エリス・ミドル

飴色茶箱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
エリス・ミドル

【Ｎコード】
Ｎ６２８９Ｉ

【作者名】
飴色茶箱

【あらすじ】
私の名前は福永亜理紗！
人と少し違うところはスポーツ万能で雑誌の表紙も飾る中学二年生のアイドル。ＡＫＢ４８なんかに負けないよ！
で、学業と部活を両立しながらたまに芸能活動をしてるんだけど・・・こんな平凡？な生活が一変する出来事が起こっちゃた
２０１１年３月１１日　震災の日・・・私は緑色の目をしたとても綺麗なお姉さんに出会った！そしてお姉さんの協力を得て私は前代

未聞のテレビ番組「最強のニート決定戦」に挑戦することになった
んだ・・・・・

ーーーーー「最強のニート決定戦のご案内」ーーーーー

日本を代表する投資家、御堂賢一は自分の余命を知ってしまった。
そこで今まで稼いだ金を前途ある有望な若者に託そうと企画された
テレビ番組

優勝賞金２００億円
参加条件は現在、定職についていない方・・
知力、体力、精神力に自信のある方・・
年齢、性別の制限は無し・・

「一次試験・学力検査」「二次試験・体力検査」「三次試験・仮想
空間ＲＰＧ」「四次試験・遊園地サバイバル」「最終試験・・・」・
・

ーーーーーーーーーーーー

女子中学生アイドル亜理紗の他に、多くの夢と希望を持った若者が
参加する中、裏ではとんでもない大人の事情が絡み合い試験は進ん
で行く。

クイズ王、女馬券師、天才医師・・・警察・・テレビ局・・そして
しがないフリーターの男・・はたして最後に賞金を手にするのは・・

:

:

２００７年１１月４日　絶世美女と天才医師

２００７年１１月４日

オレンジ色に空が染まる夕暮れ時、駅から出ると色とりどりのネオンがサングラスに差し込む。

ＪＲ渋谷駅、エレベーターでハチ公口に降りながら高橋一真は呟いた。

「道玄坂を登って首都高速三号線を越えて旧山手か・・歩いて３０分ぐらいだな」

待ち合わせの店までの道のりを頭でシュミレーションしながらチラッとブレゲのアエロナバルを見た。針は１７時５０分を指していた。（あと４０分。まだ少し時間がある・・・）

渋谷駅のハチ公前、人混みの中。高橋一真は約束の待ち合わせ時間まで少し間があったので銀色の金属でできた椅子に腰かけた。長時間座るのを防ぐためか、すわり心地はあまり良いとはいえない。行き来する人の量に圧倒されながら、少し呆れていた（しかしよくこんなに人が集まるものだな・・）

都会の喧騒の中、風が心地よく吹き抜ける。暑くもなく寒くもなくいい季節だ。

時間つぶしに人間ウォッチングをする。テレビ局の取材だろうかアシスタントディレクターが道行く女の子二人組を捕まえては取材の交渉をしている。

取材を受けてくれるのは三組に一組の割合ぐらいだろうか（結構断られるもんだな・・テレビ局の社員も大変だ・・）

そんな事を思いながら、交差点の向こうにある三台の大型ビジョンを見つめた。

せわしなく広告が流れ続け、音声と映像がごちゃまぜの渋谷独特の雰囲気を作り出す。新宿とはまた違う、渋谷だけが作り出す雰囲気・・

そんな中、１０９の方から歩いてきた女性に高橋一真は目を奪われた。

スクランブル交差点で大勢の人々がひしめき合い交錯して行く中、ただ一人、サングラス越しの一真の目に原色で映った美少女が通り過ぎる。

（なんで、彼女だけに目が行くんだろう。こんなに大勢の人で溢れかえっているのに・・）

一真にとってそれは初めての感覚だった。

普通の黒髪ではないそれは、はちみつをコーティングしたような艶のある光沢、エメラルドグリーンの瞳、誰の目も惹きつける美しく白く細い体だがその胸や腰付きのプロポーションには見事に女性の魅力が詰まっていた。

そして、一真はもう一つ生まれて初めての経験をする。考えるより先に彼女に歩み寄り声をかけてしまったのだ。

「あなたをもっと美しくできるのは僕しかいません」と・・・

高橋一真は渋谷に来た当初の目的、旧山手の高級レストランでの医師会の会合の事はすっかり忘れてしまっていた。

声をかけた彼女はこちらに振り向いた。

その時前髪がさらりと顔にかかったが、すぐにそれを薬指で上げ彼女は優雅に微笑んだ。

２０１０年１１月５日　余命一年で思うこと・・

２０１０年１１月５日

短いなぁ・・まるで、一時の夢のように儚く消えていく・・。そう、まるでそれは、砂塵の幻影のような・・人生というのは、なんと短いことか・・

思いかえすと、これまでの人生、私は全能力と時間を金儲けだけに費やしてきた。
金を稼ぐことだけが生き甲斐といってもいい。毎日がスリリングで熱かった。

だが一瞬で、そう・・ほんの一言で熱が冷めた・・

「御堂さん、言いにくいのですが、あなたの肺は癌に侵されています！それも末期の・・」

昨日、担当の医者に肺癌の宣告をされた、もって後一年の命らしい。

今、人生を振り返ってみると俺はまだ、何も成し得ていない、そして何者にもなっていないような気がする。
私はなぜ生まれてきたんだろう・・　本当は自分のためだけじゃなく、人のため、日本のため、そして世界のためにもっと他の事ができたんじゃないだろうか？

もし生まれ変わることができたら・・今度は、自分のためじゃなく、他人のために輝きたい・・・いや・・・・までよ・・ポジティブに考えれば・・考えようによっては・・まだ、残りの時間は一年もある。私がいままで稼いだ金で、世の中に貢献できたら、私のやってきた人生は無駄じゃなくなるんではないだろうか・・・

「賢一さん・・賢一さん・・・」

秘書の紺野が私の名前を心配そうな顔をしながら呼んできた。
（あっそうだ、紺野の作ってくれた朝食を食べている途中だった・・）味噌のだしのいい匂いが部屋に立ち込めていた。

「ん？ああ。ちょっと考え事をしていたんですよ・・」感情が殆ど無いような、まるで覇気のない返事をして、賢一はジャガイモ入りの味噌汁を最後の一口を口に流し込んだ。

「美味しいですね。今日の味噌汁は」料理についての素直な感想を口に出した。

「ありがとうございます、でも私の腕じゃないですよ。新じゃがを使ってますから・・」

「いえいえ、本当に美味しいですよ。ジャガイモだけでなく、いいだしがでてますねぇ」

賢一はお茶を飲みながら株取引に必要な情報をグーグルニュースと日経テレコンの最新ニュースでチェックした。
いつも朝食はデスクのパソコンでニュースやメールをチェックしながら食べるのが御堂賢一の日課だ。

「今日は尖閣ビデオ流出のニュースばかりですねぇ」

「ええ、私もそのニュースは見ました。」

ＹｏｕＴｕｂｅ上に「ｓｅｎｇｏｋｕ３８」なる登録名の人物が現れた。

彼は中国漁船が日本の海上保安庁の船に体当たりしてくる様子を六分割された計４４分に及ぶ映像をアップロードした。

この事件はマスコミやネットユーザーを中心にこの事件はすでに大きな波紋を広げていた。

「一個人が国を動かせる時代か・・・」（俺は彼のように時代を動かすことができただろうか・・）

「ええ、ネットを使えば個人でも政府に圧力をかけることができるんですね」私の呟きに対して紺野は同意する。

「このニュース。マーケットに大きな影響はあるでしょうか？」紺野が聞いてきた。

「いや、直接大きな影響はないだろうな・・だが！」

「何か心配ごとでも？」

「いや、日本も弱くなったものだな。と・・ふと思ってしまいまし

てねぇ」
そう言うと賢一はデスクの椅子から立ち上がり、オフィスの西側にあるソファーに「ふぅ～」とため息を漏らしながら、また腰掛けた。
（今日は朝日が程よく射し込んできて気持ちがいい・・・）
私は再度、物思いにふけった。
（余命を聞いて気付いた・・金を稼いだだけの無意味な人生・・私にできることはなにかないのか・・残された時間は一年・・・どうする・・）
「・・・大丈夫ですか？今日は賢一さんらしくありませんよ。なんだか、調子が悪く見えます」首を傾げながら真面目な顔つきで紺野は私の顔をのぞき込んできた。
なんでもないですよ、と私は言いかけたが、紺野の方が先に「体調と言うより、精神的な方ですか？何か心配事でも？」と聞いてきた。
紺野が気遣ってくれるのがうれしい。
長年一緒に仕事をやってきた紺野には話しておくべきか・・
「はは、やっぱり君に隠し事はできないな、ちょっと、びっくりするかも知れないが聞いてくれますか？」
「はい！何か重要なお話でしょうか？」
紺野由美は御堂賢一の正面に向き直り目を合わせた。
いつも見せない真剣な表情の賢一を見て紺野は今までに経験したこ

とのないような胸騒ぎを覚えているように見えた・・

一呼吸おいて私は言った。

「実は・・・私は後一年しか生きられないんです・・癌で」

「えっ？」紺野は瞬きもできず、目を見開き、口を開けたまま時間が止まった。

そして、しばらくして「そんな・・賢一さんが・・」と呟き、同時に目からあふれ出た涙は頬を滑り落ちた。

２０１０年１１月２７日　意志あるところに道はある

２０１０年１１月２７日

三日ほど寝ていたのだろうか・・・絵栗珠はベットの上で目を覚ました。

「ああ、先生。そこにいらしてたんですね。」

ベットの横で絵栗珠をじっと見つめていたサラサラの白髪で切れ長の目の男に話しかけた。

高橋一真。絵栗珠の美容整形の担当医だ。

表向きは美容外科の院長！裏の顔は「美の追求と不老不死」を生涯のテーマに掲げる闇医者。違法な臓器収集から薬の開発までありとあらゆる事に手を染めていた。

「先生？私は何日ぐらい寝ていたのでしょうか？」

一真はチラッとアエロナバルをみて「三日と１３時間です」と答えた。

「結構、寝ていたんですね。私が寝ている間、世の中では何か変わったことありましたか？」

「フフ・・絵栗珠さん三日くらいじゃ世の中何も変わりませんよ」

「それもそうですよね」

世間の話題は市川海老蔵が酒の席で殴っただの殴られただのという、どうでもいいワイドショーを面白可笑しく連日やっていた。
こんな話題がトップニュース。なんて平和な国なんだと一真は思ったものだ。

「ああ、それにしても完璧だ・・君は私の最高傑作だよ。絵栗珠さん」

「ふふ、先生にそういっていただけると私も嬉しいです。」

亀井絵栗珠はニコッと笑った。

その笑顔を見て高橋一真はゾクっとした。
悪い感覚ではなく、体の下の方からゾクゾクする快感が込み上げてきた。
あまりにも美しい笑顔が観れたからだ。

「先生? ところで今回はどこを治してくれたんですか?」

「分からないかい?」怪訝な顔で一真は訊いた

「ええ、どこでしょうか?」もう一度、絵栗珠が尋ねる。

「全身だよ・・私が新たに開発した薬を全身に投薬した。
三日間の集中治療で肌年齢が１０歳は若くなったはずだよ。とはいっても、君は元から美しいからそんなには実感はないかも知れないですけど・・」

絵栗珠はそういわれて自分の手を見て、さらに自分の顔に触れた。
「そう言われると・・なんだか１０代の頃の肌に戻ったような感じがしますね。このハリ・・」
亀井絵栗珠は今年で３６歳だが、見た目は本当に１６・７歳くらいにしか見えなかった。
透き通るようで潤いのある白い肌。
艶のある黒髪。
そして、絵栗珠自身が気に入っているのは移植した目だ・・鮮やかで澄んだ緑色の目。
心臓病で亡くなったドイツ人とフランス人のハーフの少女から移植した目だ。
この目を買うのは苦労した、少女の親を納得させるのに2週間と６０００万円の費用がかかった。
だが一真はこの苦労も絵栗珠の美しい姿を見るとすっかり忘れるのだった。
一真と会う前、絵栗珠はカラーコンタクトをつけていたが今はその必要もない。
日本人の良さを生かしながら、最大限に魅力を増大させていた。
「絵栗珠さんはいつも、私を信頼してくれて助かります。おかげで今回の研究も無事、終わりました。」
「ええ、私は一真先生の腕は信頼していますから・・それと、美しさに対する追求も・・」落ち着いた声で絵栗珠が喋り、鏡で自分の

今の容姿を確認する。

絵栗珠と出会った時の事は今でも鮮明に覚えている・・四年前の渋谷・・

あまりの美少女が歩いてきているので思わず声をかけてしまった。

驚いたのは年齢、３２歳。そんなことは微塵も感じさせない美しさと可愛らしさを備えていた。

彼女は京都出身で職業は京都大学の助教授。

そして彼女の祖父は地元では有名な名士だった。政界や経済界にも幅広い人脈があるらしい。

こんな完璧な女性が世の中にはいるものだなと高橋一真は不思議に思ったほどだ。

そんな完璧な女性の美しさをさらに引き出す。

一真はそれに喜びを感じていた。

あれから四年か・・そんな事を思いながら闇医者、高橋一真が不敵な笑みを浮かべた（時間は経つのにあの時よりも美しくなっている）

「ところで、絵栗珠さん・・・少し話題を変えていいですか？絵栗珠さんの興味を持ちそうな話題が手に入ったので・・」

高橋一真はエメラルドグリーンの絵栗珠の瞳を見つめながら言った。

「ええ、どんなお話ですか？一真先生」

絵栗珠はいきなり話題を変えたいと言った一真の言動が少し気にな

った

「絵栗珠さんは、御堂賢一という人物をご存知ですか？」

急に人の名前を出してきたので一瞬、一真が何の話題を持ち出したのか分からなかったが、情報経済学、教授の絵栗珠はすぐに自分の記憶と繋がった。

「御堂賢一ですか・・・確か・・日本で最も有名な投資家の一人ですよね」

「そのとおりです、さすが教授！お詳しい！」期待通りの回答に一真は冗談っぽく持ち上げ、説明を続けた

「資産総額は正確には公開されていませんが日本で１０指に入る投資家であるのは間違いありません。で、その御堂賢一なんですが・・私の知り合いの医者の情報によると、肺癌でそう長くはないそうです」

「肺癌ですか・・・」この話のどこが面白いんだろうなと少し絵栗珠は困惑した。

全く自分には関係ない話ではないか・・

「で、この話の面白いところがですね。御堂賢一には家族というものがないんです。どうやら、幼いころから児童養護施設で暮らしていたそうです」

「そうですか。ということは御堂賢一が死んだあとは残された莫大な遺産はどうなるんでしょうね」絵栗珠は単純に思ったことを口に出した。

「そう、そこなんですよ、絵栗珠さん！さすが鋭いですね！」一真は絵栗珠の回答を絶賛した。

「そうねぇ、身寄りがないというのは面白くて気になる存在ですね。近いうちに会ってみようかしら・・おじい様のコネクションを使えば会えるとは思うんだけど・・ところで一真先生がこの話をされるということは先生は御堂賢一に何かをお望みですか？」

「はい、不老不死の研究にはそれなりに莫大な資金が要ります。御堂賢一がその気ならば私の研究も大きく前進するのですが・・」

「ああ、この間、お話しされていた、人体の完全移植の件ですね。確かに今、御堂賢一に上手く話をすれば・・・でもね、一真先生。私は先生のお話を聞いて、ほかの考えが浮かんだんです・・」

「他の考えが浮かんだ？」

「ええ、御堂賢一の資産をすべて、私のものにする計画が・・」

そう言った絵栗珠の美しいエメラルドグリーンの瞳の奥にダークな光が宿るのを感じた一真はゴクッっと唾を飲み込んだ。

恐ろしいほどの魔性の魅力を放っていたからだ。

そして期待と暗鬼の色が混じった声で聞いた。

「ほう、それは興味がありますね。そんなことが出来るものなので

すか？」

「ふふ、不可能を可能にするのが私の趣味ですから。一真先生は私の座右の銘って知ってましたっけ？」

今度は楽しそうな表情をして絵栗珠は聞いてきた。

「知ってますよ！確か・・ジョン・F・ケネディーの・・・《意志あるところに道はある》でしょ」

２０１０年１２月２３日　ＬＵＮＡ　ＳＥＡライブＩＮ東京ドーム

２０１０年１２月２３日

「ふ～う、やっと入れたな。」

「そうね、少し時間が押したわね」蜜柑色のエルメスの時計を見た絵栗珠が言った。

「しかし、今日、絵栗珠が行きたかったところってライブか・・・」

「フフ・・意外ですか？一真先生」

「そうだなぁ、君のイメージはクラシックっていう感じだからね」

「そうですか？実は中学生のころからファンなんですよ！懐かしいなぁ・・」少し絵栗珠は昔を懐かしんだ。

「そう言われると、君の学生の頃はこのバンド凄い人気だったな・・」

高橋一真と亀井絵栗珠は東京ドームの２階席に座っていた。

「アリーナのほうがよかったんじゃないか？」一真が聞いてきた。

「フフ、もうそんなに若くないですよ。先生！それにアリーナに行くと先生も激しい動きをしないといけないですよ」

「ふっ、君よりは全然動けると思うけどね」一真は自信満々に答え

る。

薄暗い会場に霞がかかった演出が施されている。

「でも先生、急に誘ったのにお付き合いしてくれてありがとうございます」

「本当に急だな・・。今日は彼女とデートだったんだけどね。まあ、滅多にない君からの誘いだ・・彼女はいつでも誘えるが、私が誘っても君はなかなか付き合ってくれないからねぇ・・で？今日私を誘ったのは御堂賢一についての話をするためだろ？」

「ええ、実は。２週間前、御堂賢一に会ってきました。」

「どんな男でしたか？御堂賢一という人物は」一真は少し興味があった。

「物腰の柔らかな、素敵な紳士でしたよ。私の話を熱心に聞いてくれて、とても興味を持ってくれたみたいです。」

「じゃあ、第一段階はクリアってところか・・」

３ｄａｙｓ公演の初日となった２３日は、開場時間の遅れから、定刻より４５分遅い１７：４５に開演した。

場内に流れていたＢＧＭが止んだ。

「あっ！先生！いよいよ。始まりますよ」ワクワクした素振りで絵

栗珠が言った。

「そうみたいだな」

「話の続きはライブが終わってから・・ゆっくり話しましょ。」

厳かな「月光」のＳＥが聴こえた瞬間、五万五千人のオーディエンスの大歓声が沸き起こる。ステージ上方のヴィジョンに映し出された新月が満月へと変わり、ＬＵＮＡ　ＳＥＡのロゴが浮かび上がる。固唾を呑んでステージを見つめながら、そのときを待つ緊張感で張り詰めた会場。その緊張の糸を一気に解き放つように、真矢のカウントから「ＬＯＶＥＬＥＳＳ」で幕を開けた。

軽やかな旋律を奏でるＩＮＯＲＡＮ、トリプルネックのギターを鮮やかに操るＳＵＧＩＺＯ、身体でリズムをとりながらビートを刻むＪ、存在感のあるリズムを叩き出す真矢、なめらかな歌声で瞬時に世界観を作り上げるＲＹＵＩＣＨＩ。そのどれもがＬＵＮＡ　ＳＥＡでしかあり得ない、研ぎ澄まされたバンドの音だ。

（（錆びついたモノクロの時を自分自身の手で動かし始めた・・））

ＬＵＮＡ　ＳＥＡのフレーズでもし御堂賢一の今の状況を表現すると、こんな感じだろうか・・

絵栗珠はこれから紡ぎだすであろう壮大な物語の脚本を考えながら

ライブを楽しんでいた・・・・

２０１０年１２月２４日　クリスマスイブのＢＡＲ

２０１０年１２月２４日

二週間前、京都の名士、亀井宗次朗の孫、亀井絵栗珠が自分にコンタクトをとってきた。

彼女に会ったときの衝撃は今でも残っている。
今まで見たこともない美女・・・見ようによってはまだ１０代の少女にも見えた。

それでいて、的確な話術とどこで身につけてきたのか銀座の一流ホステス並みの仕草や心配り。彼女と会っている時間、ずっと感心しきりだった。

話の内容はどこから情報を仕入れたのか私の癌の病気についてだった。

彼女の話によると私にはまだ生存できる確率があること、そして、もし死んだ場合でも遺産を有効に活用する方法など様々なアドバイスをくれた。

御堂賢一は亀井絵栗珠の話を自分なりに整理し検討した。

おかげで今は、自分の今後を考えながら前向きに行動でき、充実した日々を過ごすことができている。

癌の宣告を受けて約二か月、気持ちに余裕が出てきた賢一は顔を出していなかったＢＡＲに久しぶりに行ってみようと思った。

賢一は黒いカシミヤのミドルコートを着て街に出た。

冷たい風が吹く中、幸せそうな恋人たち肩を寄せ合って街を歩いている。

ケンタッキーのチキンバスケットを持ったサラリーマンが小走りに駅に向かっていく。

きっと家では可愛い子供がまっているのだろう。

街路樹に色とりどりのイルミネーションが散りばめられ、木々が青、緑、赤と色とりどりの光を放ち、街には幸せが溢れていた。

（今日はクリスマスイブか・・そうだ・・一杯飲んだ後に久しぶりに教会でも行ってみるとしますか・・・）

そんなことを思いながら、御堂賢一は六本木ヒルズと東京ミッドタウンの間にある行きつけのＢＡＲ「アグニール」に入った。

カランカラン、扉を開く音が懐かしい。

「あっ、御堂さん！いらっしゃいませ」

バーテンダーの佐藤が瞬時に御堂賢一に向って、にこやかに挨拶をした。

「佐藤さん、ご無沙汰してます」

やあ、と　右手を顔の位置まで上げた。そして軽く会釈をして御堂も挨拶を返した。

少し暗めのクラシックな店内のカウンターの左から三番目。バーテンダーの佐藤から見て丁度斜め右辺りが賢一のいつもの指定席。そこにゆっくりと腰掛けた。

「ここ二か月ほどお見えにならなかったので心配していました。お忙しかったのですか？それに、今日は、表情が明るいですね。何かいいことでも？」

と、いつもの丁寧な言葉遣いで佐藤が聞いてきた。

「ああ、そうなんですよ。ちょっと難題を抱えてましてね・・でも、やっと段取りが着きました。ようやく、進むべき方向が見えてきて心の中が整理されてきた感じです。・・」

佐藤は、話の詳細は聞かなかった。

深くは聞かないのがバーテンダーのマナーだ・・

「それは、よかったです」

御堂は店内を見回した。

「今日は、カップルが多いと思いましたが、そうでもないみたいですね」シェーカーを振っている佐藤に話しかけた。

「ええ、いい意味で、いつもと一緒ですよ。まあ、雑誌なんかの取材はすべて拒否している隠れ家的な店ですからね。常連さんに落ち着いて飲んでいただきたいので」と佐藤は言った

「そうか、そういえば取材拒否のお店でしたね、ここは　あ～それにしても外は寒いね。じゃあ、とりあえず．ホットウイスキーをお願いします」

「かしこまりました。何かご希望の銘柄はございますか？」

「いや、佐藤さんのおすすめでいいですよ」

「では、山崎の１２年でお作りしますね」

「ええ、お願いします。それにしてもこの辺はイルミネーションが綺麗ですね。寒いけど散歩は夜に限りますねぇ」

「そうですね、六本木ヒルズのけやき坂のほうは凄いですよ。私もこの時期は毎日、通勤が楽しみなんです」

「うん、確かに・・歩いてるだけで心が躍るね・・街の雰囲気が好きなんですよねぇ、特別感があって・・クリスマスって・・」

「おまたせしました。山崎のホットウイスキーです」

「ありがとう」温まったカップの取っ手をもって、御堂は最初の一口を喉に通した。

「あ～温まるねぇ」芳醇な香りが口いっぱいに広がった。

「あ、ねえ佐藤さん！ちょっと一つ頼みがあるんですが・・」

思い出したように持っていた艶のあるカルティエのカバンから大きな封筒を取り出しながら御堂賢一は言った。

「はい！なんでしょうか？私にできることでしたら・・」

「実は私、今度、私財を投じて、あるテレビ番組を作ることにしたんですが・・」

「テレビ番組ですか・・」佐藤は少し驚き意外そうに賢一を見た。

御堂は大きな封筒を佐藤に渡した。

「その中には番組の詳細が書かれたパンフレットが入っています、まあ、後でゆっくり見て頂いて。で・・佐藤さんが番組に出場させてあげたい人が、もし、いたら渡してくれませんか？」

「そういうことでしたら喜んでお受けいたします」

「ああ、そうか、ありがとう」

御堂は、ぬるくなってきたホットウイスキーをぐいっと飲みほし・・

「じゃあポートアンドスターボードを一杯！」と追加注文をだした。

「珍しいカクテルをご注文ですね・・ああ、そうかクリスマスだからですね。」

「ははは、そう、グレナディンシロップとミントリキュール、赤と緑のクリスマスカラーってわけです！」

店内のジャズのＢＧＭはクリスマスソングが流れている。

ゆっくり目を閉じて音楽を聴きながら、御堂は思った

（今年が最後のクリスマスになるかもな・・）

「じゃあ、そろそろ行くか・・佐藤さん、御馳走様でした」

賢一がカウンターの席から立ち上がった。・・・が動きを止めて・・・

・・・・・・「やっぱりもう一杯だけもらおうかな。佐藤さん！アラウンド・ザ・ワールドをお願いします」

「御堂さんの一番お好きなカクテルですね。お作りしましょう！」

爽快なミントの香りとパイナップルの酸味が広がった果汁感のハーモニー、そしてジンの心地よさが絶妙に調和する

「あ～最高ですね」

「御堂さんアラウンド・ザ・ワールドは私から奢らさせてください。久しぶりにお店に来ていただいたのですから・・」

「そうですか、では御馳走になりますか。ありがとう」

「今日はこれからどちらへお出かけですか？」

「うん、ちょっと教会にね・・」

「はは、一番まともなクリスマスの過ごし方ですね・・お気をつけて　行ってらっしゃいませ！」

「ああ、じゃあまた・・」

カランカラン

賢一が扉を開けると外には真っ白なフワフワの粉雪が舞っていた

２０１０年１２月２６日　グランプリレース有馬記念

２０１０年１２月２６日

「あああぁ～ブエナビスタぁぁ・・・負けちゃったよぉ」鮮やかなミルクティーベージュの髪を乱してＣＥＣＩＬ　ＭｃＢＥＥの黒と白のガーリーテイストなファッションに身を包んだ春日優季菜は悔しい気持ちを全身で表わしながら、叫ぶ。そして両手でガンガンと手すりを叩いている。

「がははは、俺はちゃんと取ったぜ！馬連でヴィクトワールピサ、ブエナビスタの組み合わせで！まあ、ガチガチの本命だけどな！終わりよければすべて良しってわけだ！ははははは！」師匠の元太が負けた優季菜に自慢するように豪快に笑いながら言ってのけた。

「う～ん、最終コーナー。いい手ごたえだったんだけどなぁ」優季菜は残念そうに呟いた・・

「もうすこしだったな」ノートパソコンでなにやらデータを打ち込みながら陽一は言った。

「そういう、陽一はどうだったの？」少し顔を引きつらせながら聞いた。

「取ったよ、でもあまり、儲けはないね・・ヴィクトワールから上位人気四頭のＢＯＸだったから・・３０万くらいかな」テンション低めでさりげない勝ちを表現する。

「優季奈ちゃんはなんで、ブエナビスタにしたの？」陽一が不思議そうに聞いてきた・・

「だって、最後のグランプリぐらいは自分の好きな馬に賭けてみたいよぉ、損得抜きでね？」

「それは、わかるねぇ！」元太は大きくうなずいた。

「え～ん・・・ブエナビスタは今年も二着かぁ・・・」

優季菜はがっかりした表情をつくった。

この三人で競馬の馬券チームを組んで二年目が終わった。

競馬歴３０年の元太、近所では競馬狂として有名な八百屋のオジサン・・そしてもう一人はデータによる分析が得意で証券会社の委託社員の陽一。

チームの必勝パターンは陽一のデータによる分析の上で、その日の天候、馬場状態、騎手の関係をアドバイスする。

そして優季菜はパドックでずっと馬を眺めている・・

優季菜には、馬の調子をほぼ正確に読める目があった。

調子が悪そうな馬を外すだけで勝率が格段に上がった。

「よーし、まあでも今年はプラス４００万だよぉ～元太、陽一ありがと！」

「いや、礼には及びませんよ。私は１８００万プラスです」陽一は

答えた。

この馬券チームは個々がそれぞれ、情報を提供し、馬券を買うのは自分の自己判断にしている。

「がははは、俺も今年は大分プラスだったな・・財布から金が消えることがなかったからなぁ」元太も陽気に答えた。

「大分プラスって何？もう～ちゃんと収支ぐらい計算しないと駄目ですよ！師匠・・」優季菜は笑いながら言った。

「まあまあ、いいじゃないかい、三人でいい年が迎えられそうだしな」と元太が返す。

「じゃあ、これから打ち上げと行くか・・・焼肉でもどうだ？行くだろ二人とも！」元太が二人に促す。が、優季菜はすぐに断った。

「ごめーん師匠、ちょっとこれから用事があるんだごめんね！」優季菜は両手を合わせて笑いながら謝った。

「あっ彼氏とデートか？まったく冷たいね。優季菜ちゃんは・・まあしょうがねぇ、来年もみんなよろしく頼むぜ・・じゃあ、来年また・・金杯で集合だな」元太は残念そうに言った。

「そうですね、今日はもう切り上げましょう。また来年も会えるわけだし・・元太さんも優季菜ちゃんも、よいお年を・・」陽一が言う

「はい！お二人とも、よいお年を！」優季菜も続けて挨拶した。

そういって、三人は別れた・・競馬場での仲間・・その関係が優季菜には心地良かった。

優季菜はおせち料理教室というのをみつけて夜は受講の予約を入れていた。
思い立ったらすぐ行動するのも彼女の良さでもあった。

「すみません、」競馬場を後にしてＪＲ船橋法典駅に向かう途中、優季菜は後ろから声をかけられた。

振り返ると初老の男性が笑顔で近づいてきた。

（なんだろうナンパかな？でも、結構感じのいいオジサマ？しかも、お金持ってそう・・）

「はぁ～い。なんですかぁ？」と優季菜は初老の男性に向かってノリノリな感じで聞いた。

「実は競馬場で、貴方たち三人のやりとりを聞いていまして・・皆さんプロの馬券師なんですか？」

「違いますよぉ～♪私以外はちゃんと本業を持っていますよ。」

「じゃあ、お嬢さんは今はお仕事なにもしてないのですか？」丁寧な喋り口で聞いてきた・・

この人の目的はなんなんだろう・・何かの勧誘？
警戒しつつも優季菜は答えた「う～ん、お仕事は、今はしてないんですよ～」
（でも悪い人じゃなさそう。それに、凄いオーラを持ってる感じ・・

）

優季菜は人を見る目だけは自信があった。

師匠の元太と陽一を引き合わせたのも自分だ。

二人とも競馬場でいつも見かけて、そして負けているようには見えなかった。

優季菜は自分の能力が大したことないこと・・そして他人の力を利用した方が効率がいいことを今までの経験から学習していた。

「それにしてもギャンブルで勝つなんてすごいですねぇ。競馬の還元率は単勝で7割とも言われています。普通にやれば負けますよね？」初老の男性は不思議そうに聞いてきた

「普通にやれば、負けますよぉ？？でも、少しデータとかを使えばすぐに回収率は１００％を超えるんですよぉ？」優季菜は楽しそうに答えた。

「例えば、逃げ馬でひとつ前のレースで人気なのに逃げ切れなくて大負けしている馬。こう言った馬はオッズが上がっているから狙い目なんです。これだけで回収率は１００％以上になるんです」（陽一からの受け売りだけどね）

「なるほど、競馬は奥が深いですねぇ。ところでお嬢さんはお金は好きですか？」

唐突な質問に優季菜は即答した。

「好きに決まってる、じゃないですか～」

それを聞いて安堵した男は、品のいいカルティエの鞄から大きな封筒をとりだして

「それは、よかった、では、よかったらこれをどうぞ・・」と言いながら優季菜に渡してきた。

「なんですか？これは」少し不審そうに優季菜は聞いた

「まあまあ、家に帰ってゆっくりとご検討ください・・・では・・・私はこれで」

そういって初老の男性は船橋法典駅とは逆の方向に去って行った。

２０１０年１２月３０日　ダンボールハウスの住人

２０１０年１２月３０日

「空が澄んで星が綺麗だ・・」天を仰いだ亮介はつぶやいた。

午前零時の深夜・・冷たい空気に星空が鮮やかに輝く。

リーマンショックを引き金に始まった世界恐慌は、日本では派遣切りという形で表面化した。あれから3年経ち、亮介は世界恐慌など自分には全く関係のない話だと思っていた。

しかし・・

先日雇い主から、今月いっぱいでの派遣契約の打ち切りを伝えられた。

どうやら会社が倒産するらしい。

経営者の話だとリーマンショック以降、車の販売台数が徐々に減っていき巡りめぐってじわじわと、業績を悪化させた。

秋田亮介は自動車工場の派遣工の仕事が気に入っていた。

労働時間が決まっていて、休日もきちんとある。会社の寮にも住めるし、月二万出せば、社員食堂で三食ついてくる。

さほど美味くはないが栄養は偏らない。

そして何より煩わしい人間関係がなく、あまり干渉してこない職場

環境が心地よかった。

この仕事に就く前はイタリアンレストランでアルバイトをしていた、簡単な調理や皿洗いがメインだったが、それなりに面白かった。特に不満もなかったが一年間勤めた後、別の仕事がしたくなって今の仕事に就いた。

始めてみると思いの他この仕事が合っていると亮介は思った。

とはいっても前の飲食店のバイトと比較してのことだが・・

単純な労働はすべてを忘れられる。やっている最中は無意識に体が動いた。

亮介は空いた時間に、勉強するのが日課だった。

家が貧しく、学校も中学までしか行けなかったが、ここに来て大検を取り、通信制で大学も卒業した。

行政書士、公認会計士、情報処理系、その他就職の役に立ちそうもないマイナーな資格もたくさん取った。

だが、自分がいったい何をしたいのか分からなかった、意味がないからこそ勉強はもはや趣味といえる。

俺はいったい何がしたいんだろう・・・特に今の生活に不満はないし、したいことも見つからない。

気がつけば２９歳になっていた。
このままでいいのかと焦る気持ちと、このままがいいと思っている自分が混在していた。

そんな時に、突然の解雇通告
「ついてないな・・よりによって　何で俺が・・」と、咄嗟にでた言葉は本心だった。
おれはこの仕事が好きだったんだな。と思った瞬間でもあった。

巷では、明日の住む場所もない。職を失ってむしゃくしゃして、人を脅しただとか、そういうニュースが連日流れていた。
何でそういうことになるかなぁ・・亮介は理解できなかった。

真面目に働いていれば、金は貯まる。解雇されてもすぐに食べれなくなるなんてことはないだろ？一日の食事がカップラーメン一杯だとか・・まあ、大部分の派遣工は大丈夫なんだろうが、一部の無計画な奴らのせいで問題になっているにすぎないと感じていた。
亮介はこの状況を少し楽しんでいた。
もし金がなかったらどうなるのだろう？試しに深夜の街を徘徊した。
寒さが身に染みる。夜には寝れたものではない。寝るには昼。寝袋

で完全防寒することを覚えた。

渋谷の裏通りのダンボールハウスが集まる場所に気づいたら流れ着いていた。ここは、案外、暖かいな・・

後一日で年が明ける・・・これからなにするかなぁ・・そんな事を考えながら・・亮介はなんて言えばいいのだろう、一人オーラが違う男を見つけた。

目つきが雄大で、周りを観察しているような雰囲気、５０代後半だろうか・・いや、もう少し上か・・きれいに揃えた髭をはやした、男が目にとまった。

そう、自分と同じ、この状況をまるで楽しんでいるかのような・・気づかれないようにその男を観察していると、男と目があった。

そして男はニコッと笑った。

「しかし、君も大変ですねぇ」髭の男がはなしかけてきた。

いきなり話しかけてきたので亮介は少しビックリしたがすぐに切り返す。「君もって？そういう貴方はあまり大変そうには見えませんね、なんか、この状況を楽しんでいるでしょう？」

「ハハハ、そうなんですよ、ちょっと別の目的があってこの辺りをうろうろしていたんですよ！」

「別の目的？」どういう目的なんだろう。亮介は少し警戒する。

「そう、別目的でね」髭の男は頷き、亮介を見て余裕のある態度で不敵に微笑んだ。
そして次の瞬間！髭の男の唇が動いた。
「君はなかなか見込みがありそうだから、いい事を教えましょう・・」緩急をつけた喋り口で亮介に言った。
亮介は少しビックリした表情で「いい事？」と疑問形で返事を返す。
「実は今度、テレビで最強の無職を決める番組があるんです。私はその番組の関係者なんですが、出場者を捜しているんです。つまり有望な方を探しているってことなんですけどね。私が見たところ君は見込みがありそうだ。どうです出てみる気ないですか？」
「えっ俺が見込みがありそう？なんでそういうことがわかるんです？」
少し困惑して亮介は尋ねた。
「なんでって？強いて言うなら私と同じ臭いがするからかな・・それに君一人浮いてるじゃないですか、このホームレスの集まりから・・」
それは貴方もですよ、と内心思ったが、お互い様か・・
「で、その賞金額がすごいから是非と思って」髭の男が言った。
「へぇ・・」すごく気になったが、あまり、興味の無いような返事を亮介はした。
「ところで、そのすごい賞金っていくらぐらいなんですか？一千万

とか？テレビの賞金で最高ってそれくらいでしょ？ミリオネアとか・・」小馬鹿にした感じでとりあえず聞いてみた。

「知りたいですか？」ちょっともったいぶったように髭の男が言った。

本当はしゃべりたいんでしょう？と亮介は思ったが・・

「すごく、気になります」と必死の形相を作ってお願いしてみた。

髭の男は白い歯を見せてニコッと笑った

「では、これをどうぞ、」といって鞄からとりだした封筒を亮介に差し出した。

そして、初老の男は「それじゃあ、よいお年を・・」と言って去って行った・・

亮介が手に取った封筒にはパンフレットが入っていた。そこには信じられないことが書かれていた。

「優勝賞金二百億？なんだこれは・・」

あまりに浮世離れした桁違いの金額に亮介の顔が引きつった。

２０１１年１月２３日　テレビ局の敏腕プロデューサー

２０１１年１月２３日

「亜由美ちゃん、お疲れ！今日は表情もよかったし満点だったぜ♪」

新日本テレビ内の自販機が並んでいる、リフレッシュルームで笑顔の可愛い新人アナウンサーの新藤亜由美に声をかけた。

自販機からジョージアのエメラルドマウンテン缶コーヒーを取り出した斉藤は亜由美に差し出した。

「あっ斉藤さん、ありがとうございます。」ニコニコしながら新藤亜由美は返事をした。

新藤亜由美の笑顔を見て、（新人アナは元気があっていいねぇ～・・・）なんてことを思いながら、テレビ局でプロデューサーをやっている斉藤密流は、たばこの煙を肺に入れた。

「ふぅ～・亜由美ちゃんはたばこ吸わないんだっけ？」

「はい、斎藤さんはタバコが似合いますねぇ」

「そうか？」

「なんか、大人の男って感じでカッコいいです」

「最近は、たばこの値段も上がって、高額納税者だからな！少しは敬ってもらわないとな」

「フフフ、斎藤さんって面白いですね。」

斉藤密流は東大卒で社内でも出世頭として一目置かれる存在だった。入社五年目にして早くもプロデューサーを任され、手がける番組もなかなか評判がよかった。そして最近になって、ようやく自分の描いている番組が作れるようになってきた。

毎日の仕事が絶好調な、そんな時、社員食堂で日替わり定食を食べている時、他の制作部隊の面白そうな話を聞いた。

「なあ、今度の番組は新日本テレビ開局３０周年記念として、今までに見たことのないような番組を作るらしいぜ」

「今までにない番組って？」

「何でも、大金持ちの遺産を優勝したものが手に入れるという番組らしいぜ」

今度、七時間特番で最強の無職を決める番組をつくるらしい。特に面白いと思ったのは、話を持ってきたのが、日本でも１０指に入る個人投資家らしく、優勝者にはその投資家の資産を相続する権利がもらえるらしい。

（いったい、いくらぐらいになるんだ？・・・）

その投資家、御堂賢一は６２歳。まだまだ死ぬような年じゃ無いんじゃないかと思ったが。医者から肝臓ガンを宣告され余命がもう一年無いらしい。

テレビ局はこの企画に乗り気だ。制作費はすべて、御堂賢一に出資してもらえるのだ、つまりノーリスク！！こんなにうまい話はない。

斉藤密流は情報をテレビ局で入る情報は、すべて集めた。とはいっても、大まかな内容しか分からなかったが、一次試験は学力試験、二次試験は体力試験・・ここまではテレビ局との打ち合わせで事前準備も行われるが、ここから先がわからなかった。

おそらく、投資家側だけで準備した試験をこなしていくことになるだろうか？ここからは、テレビ局も追っかけるだけとなる。

「面白い！！」

気づいたら番組の話を聞いたその日のうちに会社を辞めていた。

「え～斉藤さんやめちゃうんですか～」「突然すぎますよ、どうしたんですか」「これからじゃないですか～」机の荷物をまとめていると、社内の社員から会うたびに声をかけられた。

「ちょっと、他にやりたいこと見つかってさ・・・悪いなみんな・・」

未練はない。

三ヶ月にも及ぶ試験は無職じゃないと出られない。ならば辞めるしかない。

「人生は一度きりだ！楽しまないとな！」

一次試験開催は４月３０日。エントリーは４月１０日まで、まだ時間はある。とりあえず勉強、運動で一次試験、二次試験の準備だな。

２０１１年１月２５日　教え子との微妙な関係

２０１１年１月２５日

大学の食堂でカツカレーを食べていた大学院生、相良晋吾の携帯メールの着信音が鳴った。

―――――――――――――――
ＤＡＴＥ　１／２５　１２：４８
【絵栗珠】
ＳＵＢ　今日空いてますか？

こんにちは、相良君。
お話ししたいことがあります。
今日いつでもいいので、教授室にこれますか？
―――――――――――――――

「ん？絵栗珠からだ・・お話ししたいことか・・なんだろ」

亀井絵栗珠に晋吾は大学生の頃から世話になっている。

彼女のゼミ、講義はいつも受講するだけでも倍率が高く。いつも何十倍もの競争率だ。

外見は少女のような可愛らしさがあり、カラーコンタクトなのか、瞳は吸い込まれそうなほど鮮やかな緑色をしていた。

大学で一番人気の理由は美人教授だというだけではない。話は明瞭でわかりやすく、喋り方に気品と優雅さそして可愛さを備えていた。講義を聴いているだけで幸せな気分になれるほどだ。

カツカレーの最後の一口をかき込んで、ナプキンで唇を拭いた。

「おばちゃん、御馳走様！」大きな声で言うと

「ハイ、いつも　ありがとね」と食堂のおばちゃんが言った。

教授棟のエレベーターに乗って４Ｆに行った。

「絵栗珠、こんにちは！」相良晋吾は元気よく教授室に入る。

「あら、久しぶりに聞いたわ、そのタメ口。」絵栗珠はニッコリと優雅に笑った。

晋吾は見惚れそうになるがすぐに切り返す

「あははは、絵栗珠はホントいつ見ても若いね。俺よりも年下と思っちゃうぐらい。もしかして本当に年下だったりして」晋吾は絵栗珠の本当の年齢は知らなかった。

何度か聞いたことはあるが、その度に話を逸らされて教えてもらえなかった。

「もう、そんなわけないでしょ、相良君！あっ、たまには顔だしてよ。同じ校内にいるんだから」

「いやぁ～でも絵栗珠も、忙しいと思って・・超人気教授ですから・・本当は毎日来たいんですよ～先生のゼミを受けていた頃。毎日通っていたのが懐かしいなあ。で、今日は何か自分に話があるの？」

「実はね、ちょっとお金の絡む話なんだけどいいかな？」

「お金？連帯保証人とかじゃなければいいねぇ」

冗談っぽく晋吾は牽制を入れた。

「そんなんじゃないよ。相良君は1円も損することはない」

「ふ～ん、損をすることはないって詐欺の常套句みたいで気になるな。どんな話なの？」

「実はね・・これから多分、数ヶ月後に、ある資産家が遺産相続者を決める、試験を行うらしいの。でね、是非　相良君に出てもらって、遺産をちょっと貰ってきてほしいのよね」

「ちょっと、もらってくる？簡単に言ってくれるね」

「相良君なら、簡単に貰えると思うよ。私が言うんだから間違いないわ」

「絵栗珠がそういってくれるんなら、ちょっと自信がでできた。で・・俺が遺産相続者を決める試験に出るとして、どんな内容の試験なの？」

「それは、まだわからないの。この話は動き出したばかりだから」
「えらく不確定な話だな・・俺が思うには絵栗珠が出たほうが試験を突破できる確率は高いんじゃないの？俺なんかよりもよっぽど天才だし」
「それはそうね・・」あっさりと即答した。
「あははは、否定しないところが絵栗珠らしいね」
「でも、わたし女の子だし・・体を動かす試験とかだったら怪我したりするのがいやだなって・・」可愛らしく絵栗珠が言った。
「そんな、可愛らしくいわれてもねぇ」
「ウソです！相良君。私こう見えても運動神経いいんですよ」
「へぇ～意外だな。絵栗珠はそんな風には見えない。おしとやかなお嬢様にしか」
「お嬢様だったらテニスとかフィギュアとかやるでしょ？」
「それは、偏った見方だね」晋吾は苦笑した。
「本当はね、私、その試験に挑戦したいんだけどね・・こうみえて、いろいろ忙しいんです。教授っていう仕事も」
「でしょうね。」晋吾は超人気教授の絵栗珠の忙しさは知っていた。講義やゼミがない日も講演の依頼が来て引っ張りだこだ。

「でもそれを言うなら、俺もまあまあ忙しいんだけどなぁ」
絵栗珠は晋吾の言葉を聞いて
「大丈夫、晋吾が試験に挑戦する日は私が学長に話をつけておいてあげるから。私、学長の信頼、厚いんですよ」
「知ってます。」晋吾は興味なさそうに答えた。絵栗珠が学長のお気に入りだということは周知の事実だった。
「俺にその試験、突破できると思う？」
「相良君はいままで私が見てきた中で一番優秀な生徒。頭は切れるし、それに運動神経も抜群だったよね？確か高校時代はサッカーで高校総体優勝でしょ？」
「まあ、そうだけど。そんなに上手くいくかな・・」
「相良君！私の好きな言葉って知ってる？」
「知ってますよ、ゼミの時いつも言ってたじゃないですか！《意志あるところに道はある》絵栗珠の尊敬するケネディーの言葉でしょ！！」
「じゃあ、決まりね」気品のある魅力的な目で晋吾を見つめながら絵栗珠は言った。

2011年1月28日　幸福論

2011年1月28日

カランカラン

少し古びたドアを開けて
城戸大輔は六本木ヒルズと東京ミッドタウンのちょうど中間にある
「BAR　アグニール」に入った。
クラシックな内装に薄暗い照明がレトロな雰囲気を醸し出す。

「こんばんは、佐藤さん。」大輔はまるで自宅に帰ってきたような
ほっとした表情で店に入った。

「あっ、城戸さん、いらっしゃいませ！」
バーテンダーの佐藤はにこやかな顔で迎え入れた。

「ここ座っていいですか？」

「もちろんです。どうぞお座りになってください」

「今日はまた、こちらに出張ですか？」

「そうなんです。今日はちょっと新宿で商談があったもので、久し
ぶりだな～東京も・・東京じゃここぐらいなものですよ、落ち着け
るお店って」

城戸大輔は長野の食品商社に勤めていたが大学時代は東京で過ごした、そのときよくいっていたＢＡＲがアグニールだった。

「そう言っていただけると光栄です。城戸さんは、お仕事の方は順調ですか？」

「そうだな～順調と言えば順調かなぁ、あっ、佐藤さん！とりあえず　いつものお願いします。」

「かしこまりました。」

大輔は店内を見渡した。いつも変わらないな・・ここは・・ここに来ると学生の頃の懐かしい記憶が甦る。

クラシックなジャズとシャカシャカとシェーカーを振る音が心地よく混ざり体に響き渡り
日々の喧騒を少し忘れさせてくれる。

「ねえ、佐藤さん！幸せってなんなのかな・・」唐突に大輔は佐藤に言った。

「急にどうしたんですか？・・・」いきなりの質問に佐藤は少し心配な顔をした

「いや、ちょっと佐藤さんの幸せについて聞きたいな～って」
「幸せですか・・」少し間をおいて「城戸さんは今　幸せじゃないんですか？」
佐藤は逆に大輔に聞き返す
「いや～それが、よくわからないんだよね」
困惑した表情で大輔は答えた。
「おまたせいたしました。グラスポッパーです」
「ありがとうございます。久々だな～佐藤さんのグラスホッパー」
大輔が一口飲むとミントの爽やかな香りが広がった。
「あ～うまい！やっぱり違うな～佐藤さんのカクテルは」と佐藤に向って言った。
「ありがとうございます」少し自信を持っているような顔で佐藤は答える。
「で・・さっきの幸せについての話なんだけどさ・・僕って幸せに見えますか？」
「そうですね～さっき最初の一口を飲んでいる時は幸せそうでしたよ！」
佐藤は冗談交じりに大輔に言った。
「あはははは、幸せそうでした？いや～ぶっちゃけ言うとさ・・とりあえず、学校出て・・とりあえず就職して、で今とりあえず、そこそこ仕事も順調、でもさ最近思うんだよね・・なんだかこのまま人

生終わっちゃいそうで怖いって・・」

「ハハハ、贅沢な悩みですね、城戸さん。世間ではとりあえず学校出て、就職して仕事も順調って人は幸せの部類に入るんじゃないでしょうか？そして、失ったときに初めて気づくんだと思います、仕事が無くなったり、例えば家族や知人が亡くなったりとね」

「そうかな～」グラスホッパーをグイっと飲みほして大輔は呟く。そして天井の薄暗い照明を見つめた。

「そうですよ、失って、あの時は幸せだったと気付くのが大抵じゃないんでしょうか・・それに今、自分は幸せだと思ってしまうと、状況を良くしようと思わなくなって向上心もなくなりますから」

「う～ん・・確かに」大輔は少し考えながら頷いた

「・・・そうだ、城戸さん面白い話があるんですが・・」今思いついたような言いっぷりで佐藤は少しもったいぶって言った。

「面白い話？」

好奇の目で城戸は佐藤の目を見た。

「ええ、面白い話です。軽い気持ちで聞いてください」

大輔は佐藤の表情を見てどんな話だろうとワクワクしてきた。

「是非、聞きたいですね～その前にグラスホッパーをおかわり」

「かしこまりました、本当にお好きですね　城戸さんはグラスホッパーが・・」

ニコニコしながら佐藤はミントリキュールを取り出した。

２０１１年２月２日　感謝の言葉

２０１１年２月２日

「どうです？紺野？テレビ局との交渉は？」パソコンの画面を見ながら御堂賢一は尋ねた。

「はい、準備は着々と整っています。それと、めぼしき人材のリストもここに揃えております。目をお通しください」

綺麗にクリップで留めている書類を賢一に差し出した。

「ほお」うなずきながら賢一はきれいに整理されたリストを手に取った。

「ありがとう、流石に仕事が早いですねぇ！」感心した表情で賢一は紺野をねぎらった。

「私の方も、気になる方には声をかけてきました。さて・・何人集まるか・・」

紺野由美、自分の秘書として雇って、１５年、今、彼女は４３歳・・年齢の割には、綺麗な顔立ちで笑顔が可愛い。着こなしや化粧も丁寧でいつも手抜きがない。居るだけで安らぎを与えてくれる。言われたことは迅速にこなすし、意見を求めるとすぐに返事が返ってくる。時には私を驚かすほどのアイデアも披露した、かといって、仕事に口を出してくるわけではない。紺野がいると、ものすごく仕事

がやりやすい。

しばらく間をおいて、御堂賢一は深呼吸した。

「紺野！今日は君に言っておきたいことがあります」

決意を決めたような賢一の表情に由美は心を痛めた。（いよいよ手術するのですね・・・）

「はい！なんでしょうか？」賢一の言うことは分かっていたがきちんと返答した。

「昨日やっと見つかったんです、ぴったりな体が・・・」

「本当ですか？よかったぁ、じゃあ、手術するんですね・・成功することを心の底から祈っています」

紺野は笑顔で言った。

「とりあえず、今までのお礼を言わせてください。」

「これまで、ありがとう、君と仕事ができて、本当に幸せだった。もっと君と仕事がしたかった・・・」御堂賢一は本当に寂しそうに言った。

「そう言って頂けるだけで、私には、十分すぎるお言葉です」紺野は涙がこぼれ落ちそうになった。

「私の方こそ今まで、ありがとうございました・・きっと成功しま

すよ。手術。また、一緒に仕事をさせてください」

「ああ、だと、いいんですが・・成功確率は限りなく低い」
そして言葉を続けた「私にもしものことがあったら、見届けてほしいんだ、私の後継者選びを・・君に監査役を頼む、詳しい指示はこのノートにまとめてあります」

「わかりました、責任を持ってお受けします」紺野由美はニコッと優しく微笑んだ
「四ヶ月前に賢一さんから、癌の告白を受けたときからわたしは・・」

２０１１年２月５日　会長室の密約

２０１１年２月５日

「舟木君！会長がこれから部屋に来るように言っているぞ。なにか、やらかしたのか？」

常務にそう言われて、会長室に向かう途中、新日本テレビの広告企画部の部長、舟木啓次はソワソワしていた。

初めて会長室にたった一人で呼ばれたからだ。今まで一度もこんなことはなかった。

ドキドキしながらドアをノックした。「失礼します！会長、お呼びでしょうか？」恐縮しながら舟木は会長室に入った。

重厚な机の奥に会長は腰かけていた。

舟木をみるなり、すぐにこう言い放った。

「舟木君・・・・君はクビだ・・」

舟木啓次はいきなりの会長の発言に混乱した。

「は？か、会長、いきなりど・どういうことでしょう」舟木はうろたえた。

「だから、君はクビ！」会長が念を押すようにもう一度繰り返す。

「え？・え？」舟木は頭がパニックで真っ白になった。

「ははは、半分冗談だよ。」
会長は面白がって、舟木の表情を見た。
「？会長っ～！！半分冗談ってどういうことですか！」
舟木はまだうろたえている。
「まあ、落ち付きたまえ。じゃあ、順を追って話そうじゃないか・・舟木君、今度、面白い番組ができるってことは聞いているかね？」
何の事を言っているのか舟木には理解できなかった舟木は
「はあ、我が新日本テレビはどれも面白い番組ですが・・」と困惑した顔で答えた
「ふっ、あれだよ、死に損ないの投資家が上手い話を持ってきた、あれだよ」
もったいぶって会長は舟木にうながす。
咄嗟に開局３０周年記念番組「最強のニート決定戦」のことだと理解した。
「ああ、あれですね、あの話はなかなかうまい話ですよ、番組制作費を全て出してくれるうえに賞金まで出してくれるんですから。そ・それで会長！私とその話がどういう関係があるのでしょうか？」
会長が不敵にニヤリと黄色い歯を見せた。
「君の自慢の息子の清四郎君を借りたいんだが・・三年前、会社の

社員懇親会で君の息子を見たとき、私は衝撃を受けた、あの光景は鮮烈に覚えている・・覚えているか？舟木君！」

「ええ、あのときは会長にはご迷惑をおかけしました。

「別に怒っているわけじゃない。私に会社経営について尋ねてきたとき！私は話しているだけで清四郎君の頭の回転の速さに気づいた。」

「恐縮です。でも、息子を借りたいとはどういうことでしょうか？」

「私が君の息子に何か好きなものはあるかと聞いたら・・現代の兵器について嬉しそうに語りだした。延々二時間も話を聞く羽目になったがね。好きなことについても人はそれほど語ることはできない・・・中学生であれだけ語れるなんてよほど好きなんだろう」

「すみません、戦争オタクなもので・・私の息子は・・」

「今は何をしてるんだ？」

「はい、普通の高校生です」

「いや、趣味の方だよ・・今も戦争オタクなのかと聞いている」

「はい、今では、大人と混じって休日にはサバイバルゲームをやっているほどです」

会長の目つきが変わった。

「ほぉ～それはいい」

「では、改めて結論を先に言おう君は今日限りでクビだ。退職金は規定の三倍出す。
だから君の息子をこれから半年間貸してくれないか？」

「どういうことでしょう・・私の退職と息子とその・・投資家の遺産相続の番組とどういう関係があるのでしょうか？」

「ふふふ・・さすがに社員の息子が優勝してしまったらマズイだろうに・・なあ、船木君！」

舟木はやっと分かったという表情をしてこう言った。
「まさか・・私の息子が出場して優勝するってことですか？」

「そうだ。賞金は私と君とで半分づつだ。悪い話じゃないだろう？一次試験、二次試験も当然狭き門だが協力者がいれば難なくクリアできる試験だ。三次試験は仮想空間で金を稼ぐ試験。そして四次試験がこの新日本テレビでも一部の上層部しか知らないことだが試験内容がサバイバルゲームなんだよ・・ここで他の出場者を全員消す！まあ、だけど決着は三次試験で決まるかもしれんな・・なぜなら三次試験の仮想空間バトルでも清四郎君には隠し武器の近代兵器を使ってもらうからな・・・フふふふ・・あっあはははははは」
会長は笑いが止まらない。

一方、舟木は会長の衝撃の発言に驚きを隠せない。
「全員消すわけですか・・・」

一言だけ発して動きが止まっている舟木に
「フフフ・・理解したかな？舟木君？」そう言って舟木の顔を見ながら会長は不適に笑った。

「はい！最終試験の前の四次試験。サバイバルゲームで決着させるということですね。会長！」

「よし、なかなか理解が早いじゃないか。じゃあ、２００億の賞金を半分私に渡すという誓約書にサインを・・」

会長は舟木にボールペンと紙を出した。

２０１１年２月１４日　美味しいチョコレートのお話

２０１１年２月１４日

「どうぞ、相良君！これ手作りなの」絵栗珠は晋吾に綺麗にラッピングされているチョコレートを手渡した。

「いやいや、絵栗珠！これダロワイヨじゃん！バレバレですよ」晋吾はすぐに突っ込んだ。

「あら、市販のチョコレートの方が美味しいのよ。だって、手作りって言ったって、一回溶かして、また固めるだけじゃない。相良君。美味しいチョコレートってどんなのか知ってる？」絵栗珠が得意げになって聞いてきた。

「美味しいチョコ？ん～わかんないな」

「チョコレートは夏になると溶けやすくなるでしょ。そこでチョコレート会社はカカオバターをわざわざ抜いて他の植物油をいれて溶けにくくするの。でもね。そうすると、風味や口どけが悪くなっちゃうのね。だから本当に美味しいチョコレートっていうのは今の季節しか食べられないような溶けやすいチョコなのよ」

絵栗珠はチョコレートうんちくを晋吾に披露した。

「へぇ～そのままだと美味しいのに。保存のために美味しさを犠牲にしているのか・・」

「そういうこと！ひとつお利口になりましたね。相良君」微笑みな

がら絵栗珠は言った。

「とりあえず、ありがと。絵栗珠！うれしいなぁ。超人気美人教授からもらえるなんて」

「なあに、そのわざとらしい持ち上げ方」そう言いながら絵栗珠は晋吾に顔を近づけてきた。

「て、照れ隠しだよ」絵栗珠の鮮やかな瞳に吸い込まれそうになった晋吾はそう言うのが精一杯だった。

「フフフ、可愛いわね、それでは、今から出す問題に答えられたら、いいところにつれていってあげる」

「いいところねぇ・・・まあ、とりあえず問題を出してみて」どんな問題なんだろうと思いながら晋吾が答えた。

「それでは、これから私と一緒にレストランに行ったとします」

「うんうん」

「注文した料理が運ばれてきたところで相良君の料理だけオーダーした料理と違っていたとしたらどうする？」

「・・・絵栗珠の料理は違っていないんだよね・・そうしたら、そのまま食べちゃうかな・・」

「どうして？」

「だって、作りなおしをお願いしたら絵栗珠と一緒に食べられないじゃん。どうしても時間差ができちゃうからね」

「まあ、なかなかの回答ね。及第点！じゃあこれからレストランにデートに行きましょう。今日は奢るわ！」

「えっ！！デート！やったぁ！！」

「打ち合わせも兼ねてだけどね！」

「えっ打ち合わせってあの、この前言ってた遺産相続者を決める、試験の話？」

「そうよ。いいでしょう？」少し強引に言った

「う～ん。まいっか。絵栗珠と一緒にご飯が食べられるだけで僕は満足です」謙虚に晋吾は答えた

「じゃあ行くわよ」絵栗珠はエルメスのバックを持って立ち上がった。

２０１１年３月４日　葬儀告別式

２０１１年３月４日

桐ヶ谷斎場の一階で御堂賢一の葬儀が行われていた。

午後六時前から式場の前には会葬者が溢れかえっていた。

綺麗なピンク色の温室で育てた少し早咲きの桜を使った花祭壇がひときわ目を引く。

桜の咲く季節にまた、御堂賢一の事を思い出して欲しいと願った紺野のアイデアによって祭壇は花祭壇になった。

（しかし、自分の葬儀を見ることができる人間なんて、生前葬で無い限り見れないよな・・）

車椅子の上で長門大我の体を持った御堂賢一はそう思った。

一月に臓器提供者意思表示カードを持っている脳死状態の長門大我という子を見つけた。

臓器移植法改正案で脳死は人の死となり両親があきらめかけてた時、絶妙のタイミングで御堂賢一は交渉した。

「臓器だけでなく、体の全てを譲っていただけないでしょうか？」

金額にして三億円を払ったこともあるが、なんとか長門大我の体を手に入れることができた。

話を持ちかけてきた、亀井絵栗珠から紹介された闇医者（表向きは

美容整形外科の医院長だが）高橋一真の提案で御堂賢一は可能な限り体の全てを移植した。

「体一体使えるのならば、貴方を長門大我にできますよ」闇医者、高橋一真は断言した。

高橋一真が言うには・・医学とは自然の摂理に逆らうもの、昔は骨折一つで人が死んでた時代もあった。

他人の血を使って輸血するなんてことも昔では考えられなかったのだから。いつの時代も人は永遠を欲しがる。私は医学に携わる者としてその永遠を追求したいんです。

どうやら、この医者の好奇心を刺激したようだ。

一週間にわたって手術は行われたが、彼は腕のいい闇医者だった。手術は大成功した。

皮膚から髪の毛の一本一本まで移植してくれたのだ。

彼の理論で言うと人間は脳が生きている限り生きていける、大体１２０年から１５０年だそうだ。その前にぼけてしまうこともあるが・

・

２月１２日に手術が終わったが、最初は体の感覚がなかった。一週間がたち徐々に体に痛みが奔る。そして、今日、車椅子に乗って自分の葬儀を見ることができるまでになった。

御堂賢一の葬儀は通夜なしの告別１本で行われた、本来ならば関東地方は、遺体を使っての葬儀となるが、御堂賢一の遺体は当然、頭を始め所々かけていた。というわけで骨葬となった。

悪くないな、こうして自分の葬儀を見るのも・・・

会葬者は４００人を超えた。

会社勤めもしてなくてこの人数はかなり多い方だという。

返礼品はお茶とカニ缶のセット一万円の品物。普通、即日返しは香典の半額だが紺野の提案で倍返しとなった。

若くして死ぬと同級生が会葬にきてくれる。自分が最後まで残ってしまうと誰も来てくれない。何年も合っていない年賀状だけの、友達が何人もきてくれた。中学生の女の子が泣いてくれている・・・そういえば彼女が小さい頃、沢山遊んだっけ・・御堂は自分の育った児童養護施設に度々遊びに行き、子供たちと遊んだり寄付をしたりしていた。

あっ、大学の時、付き合ってた「美代子」だ。君もきてくれたのか・・ずっと孤独で1人で暗い迷路を歩いてきたと思っていた俺の人生、こうしてみると結構悪くない人生だったのかな・・

大我に焼香の順番が回ってきた。

過去の自分に向って別れを告げた。

今日で御堂賢一は死んだ。これからは長門大我として俺は生きる。

焼香を終えて車椅子を後ろに方向を変えた大我はひと際美しい女性を見つけた。

自分に体の完全移植と遺産相続試験の話を持ちかけてきた亀井絵栗珠だ。

彼女も御堂賢一の焼香待ちに参列していた。

彼女は大我を見かけると優しい笑顔で微笑みかけた。

「お清めの席は2階に準備しております。お時間ありましたらお立ち寄りください」
セレモニーレディが食事会場の案内をしてきた。

お清め会場に着くと、たくさんの人が御堂賢一の思い出話に花を咲かせていた。

自分の話をしてもらえるってのも、嬉しいものだ・・もし、幽霊というのがいるとしたら自分が死んだあと、こうして自分の葬儀をみているのかもしれないなぁ・・

そんな事を思いながら、お清め会場のお寿司とオードブルをつまんだ。

2011年3月5日　夢想

2011年3月5日

「終わりましたね、賢一さんの葬儀・・」
紺野由美は吐息を一息ついて寂しそうに答えた。

「でもいい葬儀でした、沢山の友人もきてくれましたし・・」

「そうだな、自分でも見てて思いましたよ、人との繋がりって重要なんだなって」

長門大我はランチに紺野由美が作ってくれたペンネアラビアータをつついていたフォークを持つ手を止めて答えた。

唐辛子がよくきいていて若い体をもつ大我には少しきつかった。
（やはり、味覚って変わるものなんだな・・いつも食べていた物が、まったく違う味に感じられる）

「美味しいですね、このパスタ」

「ありがとうございます」

「それはそうと、賢一さんの資産相続者を決める番組なんですけれども・・中止にしたほうがいいのではないでしょうか？」
由美が尋ねてきた。

「中止？どうしてです？」大我は少し首を傾げた。

「手術が成功して闇医者、高橋一真には凄く私は感謝しています。ですが亀井絵栗珠の提案にこれ以上乗る必要もないと思います。命の恩人にこう言うことも気が引けるんですが・・」ちょっと言いにくそうに紺野由美が話した。

「亀井絵栗珠の提案がどうかしましたか？」長門大我が笑った。

「ええ、彼女の提案《最強のニート決定戦》は御堂賢一の資産を合法的に強奪するための策略ではないでしょうか。おそらく、彼女も試験に参加してくるのではと私は思うんです」

「さすが、紺野！優秀な秘書だ！でも、当然私はそのことには気づいていますよ」
長門大我は驚きもせずに話した。

「では！すべては長門大我が相続すればいいことではないでしょうか・・資産は御堂賢一の遺言状によって私に現在、すべての管理が任せられています。私が、無理矢理、長門大我に相続させても法的に問題は無いはずです」

「そんなことを、すると君は世間の批判に晒されますよ！」
大我は瓶詰めのミネラルウォーターをグラスに注ぎながら言った

「いいんです、どんなに批判されても賢一さんのためになるのなら・・」由美は真剣に答えた。

「まあ、紺野は予定通りに動いてください。なぜなら・・御堂賢一の資産は私自身が試験を突破して相続しようと思っています。一石二鳥なんですよ。世間に長門大我の名を一気に広めるにはね。」そして、グラスの水を一気に飲み干しこう付け加えた。

「人生は短い、知り合いの医者の話だと今度は体より、脳の方が先にダメになるらしいんです。大体、脳の寿命は百二十年から百五十年。早ければもっと早く痴呆がくるかもだってさ・・だがら、一気に手に入れたいんですよ。金と名声を・・それにはこの遺産相続試験はぴったりでしょう？彼女の策略と分かった上であえて亀井絵栗珠の提案に乗りましょう！」大我が由美に向って作り笑いをした。

「そうですね、賢一さん・・いえ大我さんなら必ず優勝できると思います。私も全力でサポートさせてください」由美は大我を見つめつつ言った

「ああ、もちろんそのつもりです、これまでの仕事、君とは息がぴったりだったからね。遺産相続試験もただの一つの仕事と考えてください、僕と君が協力すれば簡単にいつもと同じようにこなせるはずです」

「遺産相続試験が終わったら、賞金を使って会社を立ち上げます！そして得た名声を使ってさらに金を集める。そして集めた金を使って、全エネルギー循環型の世界最大の建造物、『東京天空エコツリー』を作ります。そう、この建造物こそが全世界の環境意識の象徴になるように・・長門大我の人生をかけて地球をそして人類を救おうと思うんです」

「壮大な目標ですね。私にもあなたの夢のお手伝いさせてください。でも・・・まずはリハビリからですね」
そう言いながらも由美は別の事を考えていた・・

（でも・・・万が一、賢一さんが負けた時の対策も考えておかない

と・・・）

由美は大我のグラスが空なことに気づきミネラルウォーターを注ぎながら口元に笑みを浮かべた。

2011年3月6日　使える男

2011年3月6日

高橋一真の美容クリニックのプレミアルームでアールグレイのミルクティーを飲みながら二人は話していた。

「一真先生！先日、御堂賢一の葬儀に行ってきました。」

「ほう、それで、どうでしたか？彼は・・」高橋一真は自分の手術した長門大我の経過が気になるようだ。

「ええ、まだ車椅子でしたが体調は良さそうでした。先生の腕は確かですね。順調にエントリーしてきそうだわ。最強のニート決定戦に・・」自分の思惑通り事は進んでいる。そういう表情を絵栗珠が見せた。

「まあ、ここまでは絵栗珠さんの計算通りと言ったところですか・・・」

「そうですね、まあでも、それは、あちらも計算通りと思っているでしょうね。」

「どういうことですか？」高橋一真は少し表情を変えた。

「私が、御堂賢一に遺産の有効な譲渡方法をアドバイスに行ったとき・・彼はすでにもう気づいているんです。人が損得勘定無しで・・見知らぬ他人にアドバイスをすることなんてありえない。ってね！」

「つまり、絵栗珠さんが自分の遺産を狙っているってことはもう気づいてるってことでしょうか？」

「ふふ、当然気づいてるわよ。頭のいい御堂賢一ならね！でもね、私がアドバイスした方法がベストな選択だと思ってるはずよ。彼にとっては。長門大我っていう縁も所縁もない他人に譲渡して世間に不審に思われるよりも。私の案に乗って最強のニート決定戦で優勝して金と名誉を手に入れた方がいいって考えるはずよ」

「では、絵栗珠さんの挑戦を受けて立つ気でいるってことかな彼は・・」

「そういうことになるわね・・でも最強のニート決定戦に出るのは亀井絵栗珠じゃないってのは彼も思ってないんじゃない？見えない敵と戦うのは容易ではないわ」

「出場するのは絵栗珠の教え子の相良晋吾君だっけ？」

「そう相良君！」

「彼が優勝したらどんな配分で賞金をわけるんですか？」

「別に何も約束してないわ。ただ、勝ったら高級レストランで奢ってねって言ってるけど」

「ふふ、絵栗珠らしいね！」

「でも、相良君なら何も言わなくても、私の研究室に寄付くらいはしてくれるでしょ。１００万円くらいはね」

「ははは、そんなに少ないの？優勝賞金は２００億円だよ、で・・・相良晋吾っての使える男なのかい？」

「そうねぇ、一真先生くらい使えるかも知れないわね」

「そいつは、相当使えるな・・・やばいくらいに」自信たっぷりに高橋一真は断言した。

２０１１年３月８日　記憶の中で人は甦る

２０１１年３月８日

紺野由美は御堂賢一に何回か連れて行ってもらった六本木ヒルズと東京ミッドタウンの間にあるＢＡＲ「アグニール」に入った。

カランカラン、扉を開くといつもの音がした。

店に入ると独特のクラシックな雰囲気・・今日はしっとりとしたジャズ音楽がＢＧＭ。

「あっ、紺野さん！いらっしゃいませ」

バーテンダーの佐藤が瞬時に紺野由美に向って、にこやかに挨拶をした。

「佐藤さん、こんにちは！」

「紺野さん、先日はお疲れ様でございました。葬儀はすべて紺野さんが取り仕切ったそうですね」

「いえ、佐藤さんも御堂のためにおいでくださって本当にありがとうございます。御堂も天国できっと喜んでいると思います。」

「そうだといいんですが・・」

「そうですよ！きっと」紺野がしんみりと言う。

「紺野さん、実は昨年のクリスマス・イブに御堂さん、いらっしゃったんですよ！」

「ええ、その事なら聞いています。自分の後継者を佐藤さんにも推薦してもらうんだって、言って出かけましたもの」

「そうですか・・紺野さんはご存じだったんですね。失礼いたしました。」

「それで、一つ聞きたいんですけれども・・」

「なんでしょうか？」

「その前にせっかくですし、一杯、頂こうかしら」

「アラウンド・ザ・ワールドはいかがですか？」

「ああ、御堂が一番好きだったカクテルですね」なんで佐藤がこのカクテルを勧めてきたのかすぐにわかった。

「はい、今日は私のおごりです。紺野さん。一緒に一杯だけ飲んでもいいですか？」

「ええ、喜んで！」

ミントとパイナップルの香りが広がった。

紺野と佐藤はそこに御堂が美味しそうに飲んでいる様子を想い出し、その匂いが二人の脳裏に生前の御堂賢一を蘇らせた。

「それでは、御堂賢一の冥福を祈って、乾杯！」
そう言って二人はグラスを合わせた。

「・・・で、紺野さん。聞きたいこととというのはなんでしょうか？」

「ああ、そうでした。佐藤さんは、御堂に頼まれて、実際に誰かを《最強のニート決定戦》に推薦したのかなって思って・・」

「一人だけ、紹介させてもらいましたよ。とても、将来性のある青年です。」

「差支えなければ、お名前だけでも教えて頂けないでしょうか？」

「城戸さんという方です。残念ながら名字だけしかわからないんですよ。いつもそう呼んでいますから」

「どういう方なんですか？」

「若い商社マンです。毎日、忙しそうですよ。でも目を見るといつも生き生きしてるんです」

「佐藤さんが、いいというからには本物でしょうね。そのキドさんという方は・・」

「いつから始まるんですか？そのテレビ番組は」佐藤は聞いた。

「４月３０日から収録が開始されます。予定ではそれから３ヶ月くらいです。なので、番組が放送されるのは８月以降になりますね」

「そうですか。今から楽しみです。城戸さんの活躍が・・」嬉しそうに言った。

「ええ、そうですね。私も応援しますわ」

そう言いつつ、紺野由美は別の事を考えていた・・

（キドか・・利用できるものなら利用しないとね。大我さんを優位にするために・・）

２０１１年３月１１日　東日本大震災

２０１１年３月１１日

亀井絵栗珠は東京駅の京浜東北線のホームにいた。
今日は人と会う約束をしている。
御堂賢一の資産を確実に手に入れるには教え子の相良晋吾がベストな人選だと思いつつも、もう一人候補をピックアップしていた。
すでに電話でコンタクトはとっている。午後１７時に大井町アトレで待ち合わせている。
その彼女に会うため絵栗珠は京都から東京にやってきたのだ。

突然やってきたそれは一瞬錯覚だと思った・・
ホームに立っていると目の前に停車している中央線のオレンジの電車がグラグラと揺れているのだ。　地震だと気付いた時はホームの天井がバシバシと音を響かせた。
横にいた赤ちゃんをお母さんが守るようにベビーカーに覆いかぶさっている。

駅地下にいたら少し焦ったかもしれないわね・・・絵栗珠はそんなことを思いながら、赤ちゃんを守るお母さんを見つめていた。

「ただいま発生した地震の影響で現在運転を見合わせております。復旧作業が終わるまで、しばらくお待ちください」
駅員によるアナウンスが流れた。ワンセグでニュースを確認する。ちょうど今はお昼のワイドショーの時間帯だ。案の定どこも地震の報道をやっていた。

震源は仙台の東・・・お台場で火災発生・・・次々と情報が入って

くる。

ワンセグで情報を確認しているうちに、一回目の強い余震が襲ってきた。

この余震で絵栗珠は電車の復旧は無理だと判断した。
急いで駅をでてタクシーを拾った。
まだ道路は渋滞していない。
「大井町におねがいします」絵栗珠は行先を告げた。

「よかったわ・・上手くつかまって。止まってくだっさってありがとうございます」絵栗珠はお礼を言った。
「お客さんほどの美人なら、そりゃあ止まりますよ」
タクシードライバーは嬉しそうに言った。

２０１１年３月１１日　待ち合わせ

２０１１年３月１１日

東急大井町駅のスターバックスの入り口にツヤツヤな黒髪の制服を着ている少し不安そうな顔をした女子中学生が立っていた。

雑誌の切り抜きの写真と彼女を見比べて確認した亀井絵栗珠は彼女に近づいていきこう言った。「亜理紗さんですか？」

女子中学生は目を大きく開いて、応じた。

「はい！え～と・・亀井さんですね。めっちゃ早いですね。まだ待ち合わせの３０分前なのに」

携帯で時間を確認しながら亜理紗は言う。

「フフフ・・亜理紗さんも早いじゃないですか。地震があったのできてくれないかと思ってたわ。ここに来る途中大変じゃなかった？」

周りを見渡しながら亜理紗の状況を尋ねた。

「そうですね。ちょっと道は混んでたけど走ってきたんで、大丈夫だったです」

「今日は大変なことになっちゃったわね、あなたに話したいことがあるんだけど。また日を改めようかしら・・お父さん、お母さんが心配しているんじゃないかな・・早く帰らないと」

「パパとママならだいじょうぶ・・でも仙台の青葉区にいるおばあちゃんと連絡が取れないんだ・・心配で心配で心臓が痛い・・」亜理紗は少し青ざめたような顔をしている。

「仙台の青葉区ね・・」そう言って絵栗珠はスマートフォンをエルメスの鞄から取り出した。

「ええと、おばあちゃんの家は青葉区のどのあたり？」亜理紗に聞いた。

「下愛子です」
「下愛子かあ・・待ってて・・」
絵栗珠は地図を検索し地域データベースを取り出した。
「下愛子地区は仙台市の西の方ね・・地盤も強そうだし、津波の心配もないわね」
「ほんと？そうだといいんだけどなぁ」そう言いながらも亜理紗の不安な表情は消えなかった。

それを見た絵栗珠は今日、亜理紗に話をするのはよくないと判断した。
「亜理紗さん、今日は本当に家に帰った方がいいわ。でもおばあちゃんと連絡が取れないのは携帯の基地局が多分壊れているだけだとおもうわ。もし、明日になっても連絡が取れないようなら私が何とかしてあげる。」
「ありがとうございます。嬉しいです。」絵栗珠の力強い信頼できる表情を見て亜理紗に笑顔が戻った。

２０１１年３月１２日　国道４号

２０１１年３月１２日

「すみません。急に無理言っちゃって・・・昨日何度も電話したんだけどやっぱりつながらないんです」

亜理紗から電話がかかってきたのは朝食をとっている時だった。ものすごく深刻な声をして泣きながら一緒に仙台まで行って欲しいと言ってきたのだ。

「いいのよ、気にしないで。でもよくあなたの両親が許してくれたわね　知らない人と仙台まで一緒に行くのに」

「大丈夫です。私がきっちり説得したからパパもママも分かってくれました。」

「そう。安心したわ」

知り合いの闇医者、高橋一真に借りたランサーエボリューション？で亀井絵栗珠と福永亜理紗は首都高にのって東京をでようとしていた。後ろには違法だがガソリンタンク２０リットルが２本。一真の手配により手に入れたものだ。

首都高は通行止めとラジオで放送されていたが実際は動いていた。そのため道はとてつもなく空いている。

間もなく埼玉に入って一回目のガソリンスタンドに寄った。

「レギュラー満タンできるかしら？」

「はい！大丈夫です」

どうやらガソリンはまだ入れられるようだ。

出る時は死者１０００人と伝えていたラジオが夜には街ごと人が消

えたとか不可解な情報を流していた。
「なんだか怖いですね。」
「そうね、くれぐれも油断だけはしないことね」
国道４号をひたすら北上し宇都宮を抜けた。
北へ進むほどにコンビニからは物が消えていく
途中モスバーガーで夕食を取ったがここでも品数が限られていた。
「はい！亜理紗さん！海鮮かき揚げバーガーでよかったかしら？」
「わ～い、ひさしぶり、ひさしぶり。これ好きなんですよ」
出発して６時間。亜理紗はすっかり亀井絵栗珠と友達のように仲良くなっていた。
「絵栗珠さんはなんで私を、その遺産相続の試験に出そうと思ったんですか？」
「そうね～亜理紗ちゃんが面白い存在だと思ったからかな。中学生アイドルで、陸上の８００メートル走で全国４位。テレビに出るだけでも自分を売り込むのにはいい番組だと思うわ！」
「それは、私にとってはメリットがあるけど絵栗珠さんにはどういうメリットがあるんですか？」
「そうねぇ、亜理紗ちゃんが優勝できるように手伝ってあげるから賞金の半分を私にくれる？」
ああ、こういうことか・・亜理紗は思ったが悪くない提案だと思った。
たとえ優勝できなくても上位に食い込めばテレビにも沢山出られる。それに絵栗珠とあってから亜理紗はもっとこの女性と一緒に居たいと思い始めていた。彼女の仕草一つ一つが洗練されて美しく、こんな大人の女性になりたいと思ったからだ。これが憧れなのか、尊敬なのかわからなかったが初めて経験する感覚であることは間違いなかった。
コンビニには水やおにぎりが殆ど無かったので、お酒の専門店に入ってみた。

「わあ、やったあ。水がケースで売ってる」亜理紗が嬉しそうに言った。
「おばあちゃんに買っていきましょう。水道が使えないかもしれないから」
「はい！」
「これって、何ケースも買っていいんですか？」
亜理紗が店員に聞いた。
「大丈夫ですよ」

「わ～い！よかった・・・よかった・・！」亜理紗が笑顔で喜んだ。
「念のためカップラーメンも買っていきましょうか」
絵栗珠が提案した。
「そうですね。おばあちゃんおなか空いてるかもしれないですよね」
水とカップラーメンを車に積み込み再び出発した。

北上するにつれ渋滞が激しくなってくる。途中崩落している道路があり４号線から少し迂回することもあったが１３日の午前４時には仙台に入ることができた。東北自動車道が普通に使えたら４時間で行ける距離だが・・東京から出発して１４時間無事、青葉区の下愛子に到着した。
「あったあああ。よっかったあああ」
亜理紗の祖母の家は何事もなっかったかのように建っていた。
「よかったわね。今はまだ４時だし、車で朝が来るまで待ちましょ」
「そうですね、おばあちゃんもきっと寝てるよね」
そう言って亜理紗は絵栗珠を見た。流石に休憩なしで運転してきたせいか少し疲れているようだ。
「絵栗珠さん、ごめんなさい。私、何もできなくて・・・ただ助手席に座っているだけ・・」
「いいのよ。家が無事でよかったわね」
「はい！ありがとうございます」

埼玉でガソリンを満タンにしたのだが、すでにメーターは半分を切っていた。
ガソリンの予備タンクがないと帰れないところだった・・そうおもいながら絵栗珠は眠りについた。リズミカルに揺れる余震を感じながら。

２０１１年３月１３日　届け救援物資！

２０１１年３月１３日
玄関のドアを開けて亜理紗は叫んだ。
「あばあちゃん！！亜理紗ですよーーーーー」
しばらく待つと玄関のドアが開き初老の女性が顔を出した。
「あら、びっくり亜理紗ちゃんじゃない」
亜理紗の祖母は本当にびっくりした顔をしていた。
「えへへへ、びっくりでしょ？すごくない？すごくない？」亜理紗は嬉しそうに話しだした。
嬉しそうな二人を見つつ絵栗珠は亜理紗の祖母を見た。
年齢は６０後半だろうか見た目はまだまだおばあちゃんという雰囲気ではないパワフルさを感じる。
「そちらのお嬢さんは？」絵栗珠の視線に気づいた亜理紗の祖母が聞いてきた。
「亀井絵栗珠と申します、亜理紗さんのお友達です」
「そうかい亜理紗！ずいぶん綺麗なお友達だねぇ」自分の孫も相当可愛いと思ってはいたが亀井絵栗珠の美しさは群を抜いていた。
「そだよ～かわい～じゃんでしょ」自信たっぷりに亜理紗はいった。
「わるかったねえ、亜理紗。連絡できなくて・・」申し訳なさそうに祖母は言った。
「ううん、無事だってわかって本当によかった」安心した表情で亜理紗は話す。
「ここまで、大変だったでしょ」
「ちょい大変だったけど絵栗珠さんが運転して来てくれたんだよ！」
「そうですか・・ありがとうございます」亜理紗の祖母は絵栗珠に一礼した。
「さあ、朝ごはん一緒にたべましょう。おにぎり作るから。お米ならストックがたくさんあるのよ」

亜理紗の祖母が言った。
「え～お米たくさんあるんだぁ・・カップラーメンた～くさんかってきたのに～」
「まあ！ありがとう。近所の人に配ったらきっと喜ぶわ」
「ほんと！嬉しいな～」
「ライフラインはどうですか？」絵栗珠が尋ねた。
「電気、水道は駄目ねえ、家が崩れなかっただけよかったんだけどねぇ」
笑いながら祖母は言う
「ここに車で来る途中、山の上なんですが携帯が通じるポイントがありました。連絡を取りたい方がいたらそこでなら取れると思います。車で１０分ぐらいかかりますけど・・亜理紗さんもご両親に連絡した方がいいわ。きっと心配してるはずよ！」
「はい、そうします」
「さあさあ、まずは朝ごはん食べましょうよ絵栗珠さんも亜理紗ちゃんも」
「ええ、ありがとうございます」
少し疲れた顔に絵栗珠は笑顔を作ってお礼を言った。

2011年4月8日　脅迫文

２０１１年４月８日

巨大な欲望が動く中の夢と現実が混ざり合う時、
あなた方は血塗られた惨劇を目撃する。
栄光の勝者は、一人もいない、あるのは絶望の破片のみ

「何だこの手紙は？」
新日本テレビの社長、安西隼人は黒い封筒に入った手紙を持ってきた部下、総務部の部長、三浦に尋ねた。

「どうやら、脅迫文のようです」困惑した表情で言う

「脅迫文？・・・・」三浦に対し疑問を発した。表情は眉間にしわがよっていて険しくなっていた。

今朝、郵便で届けられたこの手紙を三浦は熟考のすえ、これが脅迫文であると結論付けていた

「私の考えですが・・おそらく、これから我々がこれから収録を始めようとしている最強のニート決定戦を指しているのだと思うのですが」と自分の考えを述べた。

少し間を置いて安西は言った。「うん、確かに・・そう言われると、読みようによっては、すべてが当てはまるな。この手紙の内容を、このテレビ局で知っている者は？」

「手紙を開封した私と、社長のみです」三浦は断言した。

「そうか、知っているのは私と三浦だけか、では、最強のニート決定戦は予定通りおこなう」三浦の目を見て自信満々に安西は言った。

「ですが、社長！万が一の事態が起こる場合の事も考えておいた方がよろしいのではないでしょうか？」三浦は自分の意見を率直に述べた。

「ああ、分かっている。だがこんな紙切れ一枚にビビっていてもしょうがないだろう。警視庁の上層部に私の知り合いがいる。このことは内密に調べる。正式な公表は無しだ。もちろん社員にもな！余計な心配をさせるな」

「承知いたしました。社長がそう仰るならば、私も従います。絶対成功させましょう。３０周年記念番組を！！」三浦は両手のこぶしを握ってガッツポーズを作って見せた。

「それにしても、中学生までエントリーしてくるとはな・・面白い番組ができそうだ」

社長の安西隼人が言った。

「福永亜理紗のことですね。中学二年生で陸上の８００ｍでインターハイ４位。ジュニアアイドルとしてグラビア等で活躍中です」

三浦が簡単な情報を述べた。

「まあ、所詮は中学生だ。まあ１次試験は、彼女を多めに映して視聴率を稼ぐぞ。女子中学生が参加しているとなると話題にもなる。」楽しみだと言わんばかりにニヤリと安西が笑みを浮かべた。

２０１１年４月２９日　自分はどこまで飛べるのか・・

２０１１年４月２９日

上田城の千本桜祭りも終わりようやく、最近は暖かくなってきた。

上田駅で駅そばを食べるのは、高校受験からの願かけだ。上田駅でそばを食べて大学受験も入社試験も合格してきた。大輔にとっては縁起の良いジンクスだった。

「大輔が会社辞めるって、言った時は一時はどうなるのかと思ってたけど・・この二ヶ月間よく頑張ったわね。今までで一番努力したんじゃない？」

「そうだね、母さん」

ふとしたことから一月の終わりに東京にあるＢＡＲで「最強のニート決定戦」の存在を知った。

大輔は一ヵ月間、毎日悩んだ。

そして二ヶ月前、五年と十ヶ月勤めた会社を辞めた。

特に不満があったわけではない、人間関係も良かったし、給料にも満足していた。ただ、自分はもっと他のことができるんじゃないのか？それを見つけるために、テレビ局の「最強のニート決定戦」に出場することにした。

仕事を辞めて二ヶ月間、今までの事が猛スピードで駆けめぐる。み

っちりと準備したんだ。簡単には負けない。負けるはずがない。

この二ヶ月間はすごく充実していたように思う。「最強のニート決定戦」は知力、体力に自信のある者を募集していた。

知力、というのは何を指しているのかよく分からなかったので、朝６時に起きて、昼の１２時まで大学入試用の勉強。

科目はセンター試験で使われる科目すべてをまんべんなくやった。１３時から１６時まではスポーツジムで汗を流し、１８時から２１時までは、新聞を読んだり、クイズやパズルを解いたり、あるときは、なぞなぞを解いたり、雑学を蓄えたりした。そして２２時から２３時までは１時間みっちり走り込んだ。

大学入試の勉強をしていると、今になって目から鱗の知識だと感じる、何で学生時代、もっと勉強してなかったんだろう・・体力も体を動かすのが楽しい。

心身共に研ぎ澄まされた状態、人生の中で今が一番肉体も精神も研ぎ澄まされていると感じる。

自分を磨くってのも、たまには悪くないな。この自分を磨く時間がとても貴重に感じられた。

負けるはずない・・当然勝ちに行く・・どこまでならいける？自分はどこまでやれるのか考えるとワクワクしてきた。

「大輔！精一杯頑張っておいで！！応援してるわよ」

「ありがと、母さん」城戸大輔は明るく母親に言った。

「負けたら、またすぐに働くから、心配しないで」
大輔は控えめな作り笑いをして言う。

「別に心配なんかしてないわよ、貴方の好きなようにやりなさい」
いい母親を持ったな・・・自分がここまでいい準備ができたのは彼女のおかげだ。大輔はそう思いながら、静かに頷いて母に手を振った。

「ああ、じゃあ、行ってくるよ。」
そう言って新幹線「あさま」の1号車の自由席に乗り込んだ。

一次試験は全国五会場で同時に行われる予定だ。会場近くで一泊して、万全の体制で一次試験に臨もう。「よし！！やるか！」両手で頬を叩いて気合いをいれた上田育ちの大輔は東京に向かった。

２０１１年４月３０日？　コーラとじゃがりこ

２０１１年４月３０日

いよいよ試験開始だな。薄暗い雲が立ちこめる日、空気は少し湿っている。折りたたみ傘は念のため持ってきてはいるが、まだ幸いにも雨は降っていない。

昭芳のイヤフォンからはヴァイオリンの音色が響き渡っていた。気分をリラックスさせる時はいつもクラシックを聴く。ソニーのウォークマンで宮本笑里の「ＺＥＲＯ」をリピートしていた。

会場に向かう途中、昭芳は（一次試験は学力検査。雨が降っていようといまいと、関係ないか・・）　そんなことを考えながら歩き会場を目指す。

途中コンビニによって、ペットボトルのコーラとじゃがりこを二セット、それとミネラルウォーターを買った。

一次試験の案内にはこう書かれていた。「試験は持ち込み自由、試験時間は午前８時半から午後８時半まで」

えらい長いなと思ったので、昼食用、夕食用に、コーラとじゃがりこを一セットずつ用意した。

試験の時はブドウ糖がいい。あと、あまりおなかいっぱいになっても頭がまわらない。そう考えて、コンビニで買い物をした。

持ち込み自由なので、取り敢えず自慢の愛機、超軽量のノートパソコンを持って行くことにした。

昭芳はほとんどこのパソコン一台で仕事をこなしていた。

仕事といっても株取引をして、利鞘を稼ぐネットトレーダーだ。

ライブドアショックを境に、多くのネットトレーダーが退場する中、自分は何とか生き残っていることに、昭芳は誇りをもっていた。

得意なスタイルはカタリストを予想して、相場を張る方法、自分の考えと逆に少しでも動いたら、即撤退。高校を卒業してから十年間毎日やって生き残ってこれたのは、このルールを厳密にそして絶対に守ってきたからだ。

日本で十指に入る投資家、御堂賢一が後継者を募集しているという情報は、情報屋の友人から聞いた。

「おまえなら、いいところまでいけるんじゃないか？」と薦められたので、軽い気持ちで申し込んだ。

ラッキーなことに、全国五カ所の会場のうち福岡会場は、自分の住んでいるところのすぐ側の大学だった。

「気分転換にはちょうどいいな。」大学を歩いていると、大学生をやってみたかったな。とちょっと思ってしまう。なんか熱い青春に憧れる。

「羽賀根昭芳さんですね。」受付の女性に、試験会場が大学の体育

館であることを教えられ、そこへ向かった。

会場に入ると三百席はあるだろうか、一つ一つ独立した机が並べられ、番号のシールが貼ってあった。えーと、２４３番は・・・あった、あった

昭芳は、愛機の超軽量パソコン。それとコーラとじゃがりこを置いて席に着いた。

２０１１年４月３０日？　チャットルーム

２０１１年４月３０日　午前８時１０分

１２０から１３０ってところか・・・
今、集まっている人数を数えながら、周りを見渡した。
テレビ局のカメラがすでに回っている。
編集されると面白く映るのだろうな・・
全部席が埋まるとしたら、３００人だな。これが五会場だから、単純計算でおおよそ１５００人がこの「最強のニート決定戦」に参加していることとなる。
斜め後ろの席の栗色の髪の女と目が合った、彼女はにっこりと会釈してきた。
彼女は黒のスーツを着ていた。無職とは、思えないしっかりとした格好だ。
３０歳くらいかな・・大人な雰囲気と可愛い雰囲気が同居している。
彼女は席を立ってこちらに近づいてきた。あわてて、昭芳はイヤフォンを外した。
「ねえ、あなたもパソコン持ってきたの」昭芳の超薄型ノートパソコンを見て彼女は言った。
「そう持ち込み自由っていっても、何持ってきたらいいか分からな

くてね。結局はありきたりだけど無いよりはましかなっておもったんだ」正直に昭芳は答えた。

「持ち込み自由だからって、おやつまで持ってきたの？」コーラとじゃがりこを見て彼女は言う。

「コーラは脳を活性化させてくれるからね。」

「ふ～ん。そうなんだ・・あ、そうだ！！アドレス教えてよ。パソコンの」

「えっ？こんなところで、美人にナンパされるなんて、暇つぶしにきたかいがあったな・・」いきなりの事だったのでちょっと驚いた表情で昭芳はにやついた。

「違うよっ！！分からない問題があったら教えてもらおうと思っただけだよ」

あわてて彼女は否定する。

「あっ、そういうことね。でも、お姉さんに教えられるほど、俺は頭がよくないし、逆に問題が分かったとしても、教えてるその時間がもったいないな」

「ギブアンド・テイクよ。私が得意な問題はどんどん貴方に教えてあげるから」

「私は、音楽と英語が得意！貴方は？」彼女は勝手に話を進める。

「時事問題とか、まあ、政治経済は強いよ。ニュースとかよく見るし」

「そんなの、試験にでるのかな～・・」彼女は笑いながら言った。

「まあ、試験時間からして、相当幅広く、出題されると思うから、手を組んでおくことは悪くない提案だな、お姉さん名前は？」

「シホ！こころざすに稲穂の穂で志穂。」指で感じを書きながら丁寧に志穂は説明した。

「俺はアキヨシ、漢字は別に覚えてもらわなくていいよ」

お互いのメルアドを確認して、試しにメールを送った。

ヨロシク（＾＿＾）！！

と送信するとすぐに、

こちらこそ（＾＿＾）ｖ

と帰ってきた、早い！！これなら、ストレスなく共同戦線を張れそうだ。

だが、受信時間の数秒のロスを考えると・・・・

もう一回メールを送った。

――――――――――――――――――――――

受信時間のロスが痛い（＜＿＞）

チャットルームでやりとりしよう！アドレスは・・・

――――――――――――――――――――――

すぐに彼女から返信。

――――――――――――

了解！！今から入ります。

――――――――――――

アキヨシ＜シホさんいる？

シホ　＜いますよ～　よろしくね。

チャイムが鳴った。８時半だ、体育館のステージに若手男性アナウンサーの石橋海人が立った。

２０１１年４月３０日？　問題は千問

２０１１年４月３０日　午前８時３０分

「え～、朝早くから、お集まり頂きましてありがとうございます！」若手男性アナウンサーの石橋海人は元気よく第一声を発した。髪型は七三分けで元気のよさが自慢の新日本テレビの人気アナウンサーだ。

「これから、皆様には、案内はがきの予告どおり、学力検査をさせていただきます」

「持ち込みは原則自由です電卓も、電子辞書も、教科書など何でもＯＫです」石橋海人は試験についてハキハキと説明をした。

「それでは、これから問題を配付いたします」

十数人の係が手分けして、問題のプリントと思いきや？？？？？？プリントじゃないな・・

本を配りだした！！まるで、問題集だ。

「みなさま、問題は行き渡りましたでしょうか？？」

「ごらんのとおり、これから、こちらの本に掲載されている問題、千問を解いて頂きます」

「せっ、千問？？」周りからどよめきが起こった。

アナウンサーの石橋海人は気にせず説明を続ける。
「スタートは午前９時、終了は午後８時半です」
「最初に目次が書かれています。国語、数学、理科、社会、英語、中学生で習う五教科各１００問で５００問、スポーツ、芸能、雑学クイズ、パズル、時事問題、各１００問で、５００問、合計１０００問です」

アキヨシ＞１０００問か・・

シホ　＞音楽がないよぅ残念（＜＿＞）

アキヨシ＞英語があるだけよかったじゃないか

アキヨシ＞あ、試験が始まったら、（＜＿＞）とかいらないから！

シホ　＞なんで？

アキヨシ＞時間がもったいないだろ？一問でも多く解け！！

アキヨシ＞とりあえず、シホは俺に英語を教えてくれ、俺は時事問題で確実に分った問題は教えるから！

アキヨシ＞それと、最初の一時間はパソコンの電源切っておいた方がいいよ。

シホ　＞最初は、自分で問題を解いた方が効率いいって訳？

アキヨシ＞まあ、それもあるけど、長丁場だ１１時間半もパソコン

のバッテリー保つか？

シホ　＞問題ないよ！！換えのバッテリー持ってきてるから（^o^）

なかなか使えるじゃないか、足でまといにだけはならないな、と思いつつ。

アキヨシ＞じゃあ、別にパソコン切らなくてもいいよ。何かあったら連絡くれ。俺も換えバッテリーもってきてるから

「禁止事項は、この体育館での他人との会話、他人の答案を見るカンニング、独り言や携帯電話でのおしゃべりも迷惑になりますので厳禁です」

「なお、休憩時間は特に設定しておりませんが、体育館を出ての休憩は自由です、席を立つ際、問題集と解答シートだけは持ち出さないでください、持ち出しを発見したら即、失格です。」

「何か質問は、ありますでしょうか？」

ひょろっとした、眼鏡の男が手を挙げた

「すみません、ここで昼食を食べながら、試験を解いてもいいのでしょうか？」

「申し訳ありません、臭いや音で試験に集中できなくなる方もいるかも知れませんので、大学の食堂や、コンビニがございますのでそちらでお済ませください」

シホ　　＞ざんねんだね～コーラとじゃがりこ（＾＾）
アキヨシ＞うるさい！！！！！

「他に何かありますでしょうか？」

後ろの方から声がした
「え～と、解答用紙を見ると、すべてマークシートの五択だけど、もし、間違った答えを選んだら減点とか、あるのかな？」

「減点はありません、ただ、得点できなかったというだけです。つまり問題が分らない場合は取り敢えずマークシートを埋めておけば五分の一の確率で正解できるというわけです」

アキヨシ＞よかったな、間違った答え教えても減点されなくて
シホ　　＞大丈夫だよ、中学英語なら、ほぼ分かると思うよ。

「他にはありますか？」
もう一度、後ろの方から同じ声がした
「もう一つ、ジャンルは違っても、全問同じ点だよな」
「はい、全問一点で千点満点です」
「他に質問はございますか？」
「合格ラインは何点ですか？」
左隅の席から低い女の声がした
「合格ラインはございません、５会場で２０００人近くがエントリーしています、主催者側は、一次試験で３００人まで絞り込みたい考えです。ですから何点取れれば安全とかはないとお考えください」

――――――――――――――――――
――――――――

シホ　＞精神的にきびしいね（＜＿＞）　何点取ればいいか分からないなんて・・

アキヨシ＞上位１５％か・・確かに厳しいな、だが２人で力を合わせれば必ずクリアできるよ

――――――――――――――――――
――――――――

「それでは、もうすぐ9時ですので、質問はここで締め切らせてい

ただきます」

「1分前です。皆様ご準備ください」

２０１１年４月３０日？　操り人形

２０１１年４月３０日　午前８時５９分

「１分前です。皆様ご準備ください」

係員の合図とともに

東京会場にいた亜理紗は眼を瞑った。

（私にうまくできるだろうか・・・）

周りを見るとほとんどが２０代後半の大人の男性。女性の参加者は１割程度だろうか。

中には３０代、４０代もいるが、学生となると高校生ですら見かけない。いやいるのかもしれないが亜理紗は緊張して周りが見えていなかった。

（本当にわたしがこんな凄いテレビ番組で優勝できるだろうか・・）

絵栗珠からはイヤリングと指輪に仕込んだ高感度カメラを渡されていた。

映像は随時、絵栗珠の元に届いているらしい。

左右のイヤリングは絵栗珠の操作により３６０。回転ができ全方向を見渡せる

指輪も同様の操作ができる

つまり、絵栗珠は三つの画面を自由に操れるのだ

試験に関してのアドバイスは耳にはめたイアフォンと携帯電話に指示か来る予定だ。

《亜理紗ちゃん聞こえるかしら》

イアフォンに絵栗珠の声が聞こえてきた。

（よかったぁ・・絵栗珠さんだ・・・）亜理紗は安堵した。
【ハイ大丈夫です】
喋って返答もできるのだが試験監督に知られると危ないのでメールで返信を返した。
《一次試験は千問テストね。私の言うとおりにやれば問題なく突破できるからだいじょうぶよ》

「それでは、試験開始です！！！」係員の合図で周りがパラパラと勢いよく問題集を開きだした

ついに前代未聞のテレビ番組、優勝賞金２００億円。最強のニート決定戦の火蓋が切って落とされたのだ

２０１１年４月３０日？　前の席の高校生

２０１１年４月３０日　午後１３時　一次試験　東京会場

何なんだ??あの高校生は・・いや、学校に行ってないから高校生じゃない。

何なんだ??あの無職の小僧!!

遠藤球男は前の席を見ながら、思った。

試験が始まってすぐに、携帯で問題を撮りだした。

おそらくムービーをくまなく撮っていたのだろう。２０分ぐらいで撮り終えると、さっさとこの会場を出ていきやがった。

そして、３０分前帰ってきたかと思ったら。また、出て行った。

相当頭のいい仲間がいるのか?それとも別の方法で答えが分かったのか・・

だが、前の席の小僧のおかげで、携帯を使って、仲間に答えを聞くという方法が分かっただけでも収穫だ。

この試験始まってみると、学力も当然いるが、体力の消費も相当激しい。始まって４時間すでにもうへろへろで集中力が切れてきた。

球男のマナーモードの携帯電話が細かく震えた。メールが届いたのだ

件名　「忙しい」
――――――――――――――――――――――――――――――――
あ～なに？球男？わりい今バイト中で忙しいんだ。またな！
――――――――――――――――――――――――――――――――

「くっそー何が忙しいだ！呑気なこと言ってんじゃねえよ！」
球男は左のこぶしをグーにしてガンッと机を激しく叩いた。

「こら、そこ！静かに！次やると失格とみなします」すぐに試験監督官に注意された。

「あ、すんません・・」

この試験に協力してくれるように何人もメールで頼んでみたが、みんな、今、忙しいだとか、用事があるだとか・・

やっと協力を取り付けたのは、彼女と、大学時代のサークルの後輩だ。まあ、どちらもあまり期待はできないが・・

しかも、二人とも返信が遅い。４時間経過でまだ、３００問くらいしか終わってない。簡単ですぐ解ける問題からやっているから、これからペースは落ちてくるだろう。終わるだろうか？

少し前にヤフー知恵袋を使ったカンニング事件が世間の話題になったことを思い出した。
こっちには難しい問題を聞いてみるか・・・

そうこう考えているうちに、前の席の小僧が戻ってきて、また携帯

を見ながらスラスラとマークシートに記入していった。

２０１１年４月３０日？　一服中

２０１１年４月３０日　午後１４時　一次試験　東京会場

斉藤密流は会場を出てタバコをふかしていた。

「ふぅ～。あ～　この一服がたまらねえな」「今６００問か・・残り４００問でまだ８時間半ある」思ったより余裕だな。

主要五教科とパズルを終わらしたから、後はこのインターネットにつないだ携帯端末で調べつつやればなんとかなるだろ・・

この１０００問で差がつくとすればパズル。これは柔軟な思考力と想像力が試される。これはできない奴は絶対にできない。

まあ、この手の問題はテレビ局を辞めた後、さんざんやったからな・・あとは、ざっと残りの問題を終わらして、主要五教科の見直しだな

三本目のタバコを吸い終わる頃、横のベンチに高校生ぐらいの若者が座った。

「ありがとう、五教科は無事、終わったよ。ああ、分かった、パズルは少し時間が掛かりそうか・・残りは、後1時間もあればよさそうですか？　　ああ、じゃあよろしく頼みます。」

高校生ぐらいの若者は電話を切った。

「よう、ニートの若者！！調子はどうだい？」斉藤は若い青年に話しかけた。

「そうですね～優秀な協力者がいるので順調ですよ。」余裕な表情で青年は答えた。

「いいね～俺なんかほとんど自力だぜ！！さすがの東大卒の俺も主要五教科以外は時間がかかりそうだね。まあ、だいたい目処はついたがな。ところでさ、一つ聞きたいんだが、あんた、高校行ってないのか？」若者に斎藤は率直な疑問をぶつけた。

「ええ、最近まで重い病気にかかってまして・・二年間ぐらい、ずっと入院してたんです」

「おかげでまだ体が慣れなくて・・」

「へぇ～、なるほどね～、でも一次試験は軽く突破するとして、二次試験は体力試験だぜ？大丈夫か？兄ちゃん？」

「大丈夫ですよ、急激に体力が回復してますから・・」

マナーモードの携帯電話が光った。

「あっ、きたきた♪、スポーツ、芸能の２００問の答えが♪」

「じゃあ、また・・二次試験でお会いしましょう」

ニートの高校生はニヤッと笑って会場に向かって去っていった。

あの、ニートのガキ・・要注意だな・・
さて、俺もそろそろ行くか・・斉藤密流は灰皿にタバコを押しつけて会場に向かった。

２０１１年４月３０日？　入社二年目のプライド

２０１１年４月３０日　午後１４時３０分　一次試験　東京会場

この会場のリポーターを任された入社二年目新人アナ？　新藤亜由美は、どうしたものかと四苦八苦していた。

もう～、会場では静かにしてなくちゃいけないし、休憩中の人にインタビューしても煙たがられるし、どうしたらいいの？

一次試験は五会場で行われており、今年入社した、新人アナ三人と、入社二年目のアナ二人でリポートされていた。

新人アナに負けるわけにはいかない・・・といっても他の会場の状況が分からないので、どうしようもない焦りがあった

仕方ないので、会場の出入り口で動きがあるか観察していると・・・

「あっ、斉藤さん！！」知った顔が近づいてくるので、誰かと思ったら、二ヶ月前まで自分の番組の担当ディレクター、斉藤密流だった。髪をオールバックにしてワックスで流れを出してダンディさを醸し出している。

「おう、亜由美ちゃん。頑張ってる？」

「ハイ、お久しぶりです。斉藤さん、もう、いきなり会社辞めちゃ

ったと思ったら、この番組に出るためだったんですね？」久しぶりの再会に嬉しそうに亜由美は言った。

「まあね、こんなチャンス滅多にないからねえ」

「さすが斉藤さんですね、普通の人とちょっと違うと思ってたけど・・すっごく格好いいです。私、応援してます！頑張ってくださいね」力を込めて亜由美は言った

「おいおい、テレビ局の人間に応援されると、後々、優勝したときに面倒だから、心の中だけで、応援してくれよ」冗談っぽく言ったが斎藤の目は真剣だった。

「それもそうですね、心の中で応援してます」亜由美は少し照れ笑いしながら答えた

会場内がざわついている

「ん・・・いいのか？会場の方で何か動きがあったみたいだぜ、リポーターさん！」

斉藤は会場の中を見ながら言った。

どうやら、全問回答し終わったから、退席していいのか、質問しているみたいだ

「あいつ、数々のクイズ番組で優勝経験がある三輪裕太じゃねえか」

「えっ、ほんとですか？斉藤さん、教えてくれて、ありがとうございます。私、インタビューしてきます」

「ああ、しっかりやれよ！」

ペコリと頭を下げて、新藤亜由美は三輪裕太の方に走り出した。

２０１１年４月３０日？　インタビュー

２０１１年４月３０日　午後１４時４０分　一次試験　東京会場

「こ、こちら、リポーターの新藤亜由美です。一次試験東京会場、開始から5時間４０分、早くも、問題をすべて解き終わったという人があらわれたようです。」

会場の出口から出てきた、三輪裕太に慌てて詰め寄り、新藤亜由美はインタビューを開始した

「お疲れ様です。一次試験、最初の退席者になりますが、試験はどうでしたか？」

「う～ん、思ったより、簡単だね。どれも基本的な問題ばかりで・・・ちょっと拍子抜けだな。もっと、骨のある問題を出してほしかったね。」

自信満々に三輪裕太は答えた。

「すごく、自信がありそうですね？」

「自信も何も、一次試験なんてただの足切りでしょ？ま、お姉さんにはちょうどいいレベルの問題かも知れませんね」

新藤あゆみに向かって、三輪裕太は皮肉っぽく言った。

「失礼ですが、クイズ番組でよくお見かけする、三輪裕太さんですよね？」新藤亜由美は聞いてみた。

「ふ～ん。よく知ってるね。さすがは、テレビ局のアナウンサーさ

んだ。二次試験はもっと難関な試験にしてほしいね。上の人に言っておいて！」

一次試験は突破したも当然のような口ぶりの三輪裕太は答えた。

「は、はい、上の者と相談してみます・・」半分演技でやや上ずった声で亜由美は返答した。

余裕に表情を見せつけるクイズ王を前に亜由美は

（なに、この自信家！一次試験で落ちちゃえばいいのに）と心の中で毒づきながら、

「三輪裕太さん。今日は、おつかれさまでした～二次試験も頑張ってください」

新藤亜由美は笑顔で言った。

２０１１年４月３０日？　交渉は緩急をつけて

２０１１年４月３０日　午後１４時５０分　一次試験　東京会場

「お兄さん！」
春日優季菜はインタビューが終わった三輪裕太を呼び止めた。

「何、何か用？」そっけなく裕太は答えた。

「すみません、急に呼びとめちゃって・・」優季奈はペコリと頭を下げた。

（あ～さっきのインタビューで見てた通りの性格だ・・）優季菜は思った。

「さっきのインタビュー見てました。すごいなぁ。もう試験終わったんですよね？」

「ああ、そうだけど」

優季菜は視線を泳がせながら小声で
「で、え～と・・その　もしよかったら、ちょっと手伝って欲しいと思って・・」

「はぁ？何で俺があんたの手伝いをやらないといけないの？」
裕太は怪訝な顔をして言った。

（フフフ・・この対応も予想通り）優季菜は内心微笑んだ。

「じゃ、じゃあ　どうすれば、手伝ってもらえますか？」
困惑した顔で優季菜は尋ねた。

「俺が、あんたの試験を手伝って、何かメリットがあるのかな？」
皮肉っぽく裕太は言った。

このタイプに直接的な色仕掛けは通用しない・・経験から優季菜は感じた。
そして、プライドが高いので何かと交換条件っていうのも成功率が低く感じられた。
とすると、残りの方法は・・・

「あの・・私、競馬が得意なんです。プロ馬券師だから。今度、よかったら・・
え～と。」優季菜は困ったような表情を浮かべた。

「俺に競馬の勝ち方教えてくれるってこと？」裕太は訊いた。

「いえ、今度。一緒に馬を見に行きませんか？私、馬の表情が読めるんです」
優季菜は力強く自信を持って言った。

ちょっと驚いて裕太は「あはははは、君、面白いね　ははは」

「やるよ、これ、答え合わせ用に、メモっておいた回答だけど・・
まあ、復習するレベルの問題でもなかったしな・・」

「ありがとうございます、助かりました」フフ・・上手くいった。
そう思いながら優季菜はメモを受け取った。

「上手くいったって思ってるでしょ。今」裕太はニヤリとしながら優季菜に言った。

「えっ！」優季菜は一瞬不意を突かれた振りをした。しかし、すぐに笑顔で

「ウフフ？ばれてました？鋭いですね裕太さんは心が読めるんですか？」

笑顔で裕太に返した。

「あはははは、ばれてるのも、あんたの中では計算済みでしょ。うまいねぇ、まあ、そういう奴も嫌いじゃないけど」

そう言いながら三輪裕太は会場を後にした。

２０１１年４月３０日？　居酒屋で乾杯

２０１１年４月３０日　午後１１時

一次試験が終わって、羽賀根昭芳と神田志穂は、居酒屋で一杯飲んでいた。試験が終わった直後はお互いフラフラだったが、せっかくだから一杯飲もうということになった。

「それじゃ、今日はお疲れ様でした～」

「乾杯！」カチンとお互いのグラスを合わせて一気に飲み干した

「はぁ～ああ、うま～い。今日は恐ろしく長い一日だったねぇ～」

志穂は言った。

「ねぇ、昭芳ってビール飲めないの？一杯目からカクテルなんて」

「ああ、飲めなくはないけど、あまり美味しいとは思わないんだ・・苦くてね、お子様なのかな」

「それにしても、今日の試験は疲れたな～、人生で一番頭使ったような気がする」

「そうね、時間長すぎだよ～もうヘロヘロ・・あ～ビール美味しー」

と志穂が、疲労感と開放感が入り交じった声で言った。

少し間を開けてから
「お互い、一次試験突破できるといいですね」昭芳が言った。
「そうね～次は体力試験かぁ～あまり自信ないな～」
「自信ないのに何で応募するんだよ・・」
「昭芳は自信あるの？」
「俺？まあ、そんなに自信はないけど、毎日ジムで汗は流してるぜ」

飲み始めて一時間、お互いの仕事？についての話になった。
「へぇ～、志穂さんって、ピアニストなんだ」
「そう、でも、最近不景気で仕事がなかなか入ってこなくてね・・
まあ、暇だからこの試験を受けることができてるんだけどね」
「やっぱり、コンサートとかで弾くんですか？」
「いや、依頼があれば、どこへでも弾きに行くよ・・この前は電気店の入り口で客寄せのためにキーボードを弾く仕事があったんだけどさ、天気が悪くて、すっごく寒かったんだよ～」
「大変ですね」昭芳はグラスのジントニックに口を付けながら言った。

「で・・昭芳って、いつも何してるの？仕事してたらなかなかこんな試験受けようと思わないよね？」
あっビールおかわり！、と店員に志穂はいった。「あ俺、角のハイボールください」続けて昭芳も注文した。
「俺は、その・・まあニートみたいなもんだよ、まあ、ネットで株取引をして、ちょくちょく小銭を稼いでるけどね。」
志穂はきょとんとした。
「ネットトレーダーっていうやつ？あれって稼げるの？」
「まあ、稼げる奴もいれば、稼げない奴もいる。短い時間で見たらゼロサムゲームだからね、あまりやるものじゃないよ、結局は手数料で証券会社が一番儲かってるんだ。長期でみて、いい会社に出会えれば確実に儲かるんだけどね。それを見つけるのがまた難しいんだよね。え～と、難しい話はやめて別の話にしましょうよ、あまり説明できないんだ直感でやっているようなものだから」
志穂は首を傾げて吹き出した「ふふ、よく解らないのにやってるの？凄いねぇ」
「お客さん、お客さん、そろそろ閉店ですよ」
午前二時、昭芳は目を開けた、ああ寝てたのか、隣では志穂さんもテーブルのビールグラスを握ったまま寝ている。無理もない、今日

は疲れたからな。

「志穂さん、起きてください！」昭芳は言ったが、志穂は「う～ん」と唸るだけだった。

ダメだ完全にできあがってる・・

あああ、俺は家近いから全然いいんだけど、志穂さんをどうしたものか・・・

２０１１年５月１日　ボスに報告

２０１１年５月１日　午前１０時

ピロピロピロピロ・・ピロピロピロピロピロ

う～・・・うるさいな・・・

なに？この音・・・

ピロピロピロピロ・・ピロピロピロピロピロ

虚ろな意識の中、神田志穂は部屋の電話を取った。

「そろそろ、チェックアウトの時間でございます！ご準備をお願いいたします。」

チェックアウト？ああ・・ここってホテルか・・

まとめられた荷物と一緒に一万円と書置きを見つけた。

志穂さんへ

ホテル代ないと困るだろうからこれ置いていきますね

え。これだけ？メッセージって・・・

普通、二次試験で会いましょうとか、昨日は大変だったね。とか書くでしょ・・・

と、思いながらも志穂は急いで支度をしてホテルを後にした。

あっ、いっけない！！もうこんな時間！！

外縁が銀色で中の文字盤がオレンジのエルメスの腕時計を見た志穂は焦った。
（今日は有給貰ってるけど早く報告しなくちゃ）
バックから携帯を取り出した志穂は福岡県警に電話を入れた。
「おつかれさまです、神田です。本部長はお手付きでしょうか？」
「やあ、神田君。どうだった試験は？」
「ええ、問題ありません。問題の量は多かったものの、難しいと思えるような問題はありませんでした。全力を尽くしましたので突破できると思います。」
「そうか、それはよかった。では、今日はゆっくり休め。疲れただろう？」
「ありがとうございます。少し・・・」（まあ飲み過ぎて疲れたのが大きいけど・・）
「本部長、一つ聞いていいですか？」
「なんだ？神田君！」
「私の、職業の設定って、なんでピアニストなんですか？」
「ハハハ、神田君、深い意味はないよ。ただ警察官と公表してしまうと脅迫文を送ってきた犯人に警戒されるからな。それに君は音大出身。バイトで弾き語りとかやってたんだろ？」

「まあ、そうですけど・・・」

（正直、昨日仲良くなった羽賀根昭芳と仕事の話をしている時、少し罪悪感を感じた・・やっぱり、嘘をつくのは苦手だな・・）

「二次試験は君の他に二名、別会場からも優秀な人材を送りこんでくるそうだ」

「他の会場からも来るんですか？聞いていませんでしたので、試験に協力してくれそうな人を自分で探してしまったのですが・・」

「さすが、神田君だ！しばらくは別行動でいいだろう。二次試験までは警察が誇る優秀な君たちだから単独行動で大丈夫だ。ただ、三次試験からは私ではなく警視庁の指示に従うように・・」

「・・了解しました。本部長・・最後に一つ聞いていいですか？御堂賢一はなぜ、このような遺産相続試験をやろうと思ったのでしょうか？」

「それは、私にもわからんよ・・天才の考えることはよくわからん。君は忠実に任務をこなすことだけを考えろ！」

「ハイ！では、明日、一次試験の詳細な報告を行います」そう言って神田志穂は携帯の通話を切った。

２０１１年５月３日　任天堂３ＤＳ

２０１１年５月３日

愛犬のチロの散歩から帰ると家に小包が届いていた。

「大輔、試験の結果じゃない？テレビ局からよ」

「ああ、ありがと、母さん。」

小包を母親から受け取った城戸大輔はちょっと緊張していた。

「ねえ、早く開けてよ。楽しみじゃない」

そわそわしている、母親を見つつ、小包を開けた。

中には一枚の紙と任天堂ＤＳが入っていた。

――――――――――――――――――――

――――――――――

城戸大輔様、一次試験突破おめでとうございます。貴方の点数は九百四十八点で二千百八十七人中五十二位でした。

上位三百人までが二次試験へ進むことができます。

さて、二次試験は同送した任天堂ＤＳとソフトを使っての試験となります。この任天堂ＤＳは特別仕様ですので、必ず二次試験はこの本体とソフトをお持ちください。

集合場所、五月七日午前四時　読売新聞東京本社前

P．S　なお本体とソフトは試験日まで自由にお使いになって構いません。

あれ？二次試験って体力試験じゃなかったっけ？
と大輔は思いつつ、とりあえず、ＤＳの電源を入れてみた。

テーブルゲーム・・・将棋、囲碁、チェス、五目並べ、はさみ将棋、リバーシ、麻雀、こいこい、七並べ。

モードは一般モード、通信モードの二種類。

少し遊んでわかったことは、全ゲーム、思考時間は一手、三〇秒、通信モードは選べなかった。同じソフトを持った者が近くにいないとできないのだろう。たぶん通信モードを使って対戦させるのか？

まいったな・・一通りルールは知っているが特別得意ってのが無いからな・・

とりあえずは、操作には慣れていた方がよさそうだ。もう少し遊んでみよう。

２０１１年５月４日　報酬は一日デート

２０１１年５月４日

――――――――――――――――――――

相良晋吾様、一次試験突破おめでとうございます。貴方の点数は９８８点で２１８７人中六位でした。上位３００人までが二次試験へ進むことができます。

さて、二次試験は同送した任天堂ＤＳとソフトを使っての試験となります。

この任天堂ＤＳは特別仕様ですので、必ず二次試験はこの本体とソフトをお持ちください。

集合場所、五月七日午前四時　読売新聞東京本社前

Ｐ．Ｓ　なお本体とソフトは試験日まで自由にお使いになって構いません。

――

――――――――――

「はい、絵栗珠、昨日手紙が来てさ、一応一次試験通ったみたいだよ」

晋吾は手紙を絵栗珠に渡した。

「ふ～ん。六位か・・」

「六位じゃ、ダメなの絵栗珠。」

「いや、前日に徹夜で論文書いてたわりには、なかなかいいんじゃないかな」

「そうそう、すっげー眠くてさ・・ってなんで知ってんの？徹夜で論文書いてたって」

「江田教授が君の論文絶賛してたわよ！前日に書き直しをさせたんだけどすごくよくなってるって！よかったわね」

「そっか！江田先生がね。あれは苦労したからな～」

「あっ！ねえ相良君。２００億円手に入ったら何に使う予定？」

「えっ、俺貰っていいの？絵栗珠に全部とられるものだと思ってたけど」

「ふふ、基本的には相良君が出場して優勝するんだから、賞金は相良君のものよ。ただ・・」

「ただ・・？」

「うん、私は相良君が優位に試験に臨めるようにサポートするから。相良君は私のサポートが役に立ったら、少し分けてくれるといいなっておもってるの」

「絵栗珠にしては謙虚な提案だね」

「まあ、一応私も頑張るけど凄く助けることができるかもしれないし、全然役に立たないこともあるかもしれない。でもね相良君。最後は勝ちたいという想いが強い方が勝つのよ」

「絵栗珠のいつも言ってる、意志あるところに道はあるだね」

「私はこの試験凄く勝ちたいと思っている。相良君はまだそれがちょっと足りないわね」

「まあね、いまいち乗り気じゃないんだよね～」

「じゃあ、相良君が優勝したらなんでも一つ言うこと聞いてあげる。」

「なんでも？ほんとに？」

「うん、ほんとよ」

「じゃあさ、絵栗珠！一日デートしてよ。僕が考えたプランで一日付き合って！！」

「ふふ、可愛いわね。そんなことでいいの」

「いいよ。よ～し、ちょっとやる気出てきたかな・・」

２０１１年５月７日？　親友との再会

２０１１年５月７日　午前３時３０分

三輪裕太は少し早めに試験会場に到着した。

「あ～寒い！流石にまだ夜中だから冷えるな。」

春だというのにあまりの寒さに顔をしかめた。

「裕太？裕太じゃないか！」後ろから声がした。振り返ると赤い縁の眼鏡をかけて、肩まで髪の伸びた長髪の男が立っていた。

「ん？ああ、君か・・晋悟、ずいぶん久しぶりだな」

相良晋悟、同じ高校で高校生クイズでは一緒のチームで闘った仲間だ。

「見たよ、この前のクイズ番組、また優勝か・・さすがは裕太と言ったところか」

「六年か・・」裕太は言った。

「えっ！」

「高校を卒業してからの時間さ」

「ああ、そうだな６年ぶりだな」

「晋悟は、今何してるんだ？」

「俺？今は大学院に通ってるんだ。ＩＴ系のね。なかなか楽しいぜ・・裕太は相変わらずクイズか？」

（ＩＴ系か・・そういえば晋悟は数学とか科学が得意分野だったな、クイズでもこのジャンルでは晋悟に勝てなかったっけ・・）裕太は少し昔を思い出した。

「ああ、クイズで喰って行けたらって思ってる、まあ、この前の賞金１千万でしばらくまたリッチな生活ができるよ、そうそうこの前初めて、海外のクイズ番組に出てきたよ。もう少し英語が堪能になれば、海外でも全然いけそうだね。」

「学校は休んでも大丈夫なのか？」

「ああ、なんとか都合つけてきた、こんな面白そうな番組初めてだからな」

「そういえば、サッカー部で晋悟はスポーツも得意だったよな、しかも理系の試験がいつも俺より上だった、それで高校生クイズの時、こいつは使えると思って誘ったんだよ。」

「そういう、お前も、スポーツ得意だったじゃないか。クイズオタクなのに体育の時間じゃやたら張り切ってたしな、なんだこいつって思ってたよ」

「そういえば、晋悟、一次試験の時、東京会場にいた？」

「いや、俺は大阪会場で試験を受けてたんだ。大学院が京都大学だからさ」

「ああ、そうなんだ」

読売新聞東京本社前にセットされたステージに女性が立った、テレビ局のベテランアナウンサーだ。

「今日はお寒い中、また大変早い時間にお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。」「それでは、二次試験の説明をさせていただきます」

2011年5月7日？　箱根駅伝

２０１１年５月７日　午前４時

係の者が、参加者に一枚の紙を配りだした。

「これって、・・地図だよね・・ええと行き先は」神田志穂は地図をあまり見たことがないようだ。

地図読めないのか？羽賀根昭芳は思いつつ、「箱根だな！」と答えた。

「えっ」志穂は意味がわからなかった。

「箱根駅伝のコースだよこの地図は」

「あっ、正月にやってる、マラソンでしょ」

「マラソンじゃないよ、駅伝」志穂の間違いを訂正しつつ、昭芳は思った・・まさかこのコースを走れって言うんじゃないだろうな。冗談きついぜ・・・

「全員に紙は行き渡りましたでしょうか？」女性アナウンサーが力強くしゃべった。

「それでは、二次試験のご説明をさせていただきます」

「これから、皆さんには箱根までの百八？を歩いてもらいます、しかしただ歩くだけでは、試験にはなりませんのでゲームをしながら歩いてもらいます。」

「ゲームをしながら？」ＤＳか・・・昭芳は咄嗟に理解した。なるほど、通信対戦でゲームをしながらって訳か・・

「まずは、特別仕様のＤＳの電源を入れてください・・」各自がバックなどからＤＳを取り出し電源を入れだした。

「電源は入りましたでしょうか？このＤＳは特別仕様で中にはＧＰＳを内蔵しています。
それでは、通信モードをＯＮにしてください」

スコア１００と表示された。

「皆さんは、はじめ男性は１００点女性は１１０点を持っています、これを箱根に到着するまでに、１２０点にしなければなりません。通信で１勝すると一点、一敗するとマイナス一点です。で、通信のできる範囲ですが、ペースメーカーが専用のアンテナを持っていて半径百Ｍまでしか通信できないようになっています。」

「ペースメーカーは時速４キロで箱根を目指し箱根駅伝で言う第四小田原中継所までいきます」

「そこからがいよいよ本番です１２０点以上点数を持っている者のみ箱根駅伝で言う山登りを行います。最終的に二次試験の合格者は八十名の予定です。」

「ここまでで何か質問はございますでしょうか？」

「とりあえず第四中継所までに１２０点集めればいいんだろ？つま

り、集め終わったら、後はペースメーカーから離れて、公共の交通機関なんかで移動しても構わないって訳か？」

「はい、構いません、ただし、１２０点以上取った者はアドバンテージとして1点につき1分第四中継所からの山登りで先にスタートする権利が貰えます。また、この第二試験に限り、女性は最初の設定は１１０点になっています。つまり平均してみれば女性は男性よりも十分早く山登りをスタートすることができるのです」

「十分か・・箱根の五区はいつも逆転劇が展開される一番のエース区間で長丁場、まあそれでも女性にはやや不利な感はあるが、妥当なところか・・・」昭芳は思った。

「それでは試験開始です、皆様スタートラインに着いてください」

２０１１年５月７日？　京急で休憩

２０１１年５月７日　午前６時２０分

歩き始めて二時間半が経過した、十ｋｍ通過、京急青物横丁がみえてきた。

自販機で買ってきた温かいコーヒーを志穂に渡した。

「うわ～ありがと、昭芳」少しつかれた顔で笑いながら志穂は言った。

「志穂さん、スコアどれくらい？いい感じ？」昭芳は聞いた。

「う～ん、勝ったり負けたり。今５勝３敗、スコアは１１２点だよ。昭芳は？」

「俺は、今１０４点、四勝零敗！」

「すごーい、何のゲームやってるの？」

「普通に将棋でやってるんだけど、一手三十秒ってのが俺には合ってるみたい。」

「志穂さんは？なんのゲーム？」

「私は花札のこいこい、ここって結構穴場かも参加人数が十人くらいしかいなくて一通りあたって五勝三敗、いけるかも？」

「だな、花札で継続した方がいいよ。大体最初、みんなそうだが、一番自信のあるゲームに参加してくる。途中から参加してくる奴は、他のところで負けてゲームを変えてくる人。だから、新規プレイヤーをどんどん叩いていけば効率よく勝てると思う。」

「なるほどね、そうかもしれないね。」

志穂はＤＳを操作しながらそう答えた。「やったぁ～えへへ、六勝目♪」

「う～ん、完敗だ・・・ＴＡＩＧＡって奴とはもうやらない。スコア１２１点？もうこいつ、クリアしてるじゃん・・」昭芳は携帯のメモ帳機能にその名前を書き留めた。

各プレイヤーの名前はアルファベットで表示される。個々にＤＳが配布された時、初期設定ですでに登録されていたのだろう。

それと、もう一つ気がついた事がある。対戦が終わると双方の現在のスコアが表示される。これは、勝てば勝つほど対戦相手が見つかりにくくなることを避けるための試験運営側の配慮だろう。

「負けたの？」志穂が様子を伺うように聞いたきた。

「ああ、将棋ルームにプロ並みの奴がいる、全く手も足も出ない。」

志穂はくすくす笑った。

「何？なにか面白いことでも？」

「いや、昭芳が焦ってるとこ初めて見たから・・あっ、ねえ、もう２時間半以上歩きっぱなしだよ。朝御飯食べるついでに、ちょっと

休憩しようよ。」志穂が言った。

「休憩って言ってもな～止まると置いて行かれちゃうしな」

「すぐ、横、電車走ってるじゃん。コンビニでサンドイッチでも買って、電車で食べようよ。後一時間もすれば通勤ラッシュで込むよ、今なら座ってゆっくり食べれるよ」

「それもそうだな、ちょっと流れが悪いから、休憩するか・・」

志穂の案に昭芳はあっさり同意した。そうした方がプラスと判断したからだ。

昭芳と志穂は立会川から、蒲田まで京急線で朝御飯を食べながら移動することにした。

第一京浜から横道にそれて立会川駅に行くため商店街を歩いていると後ろから、ＤＳを持った、高校生に声をかけられた。

２０１１年５月７日？　他人になり替わり作戦

２０１１年５月７日　午前６時４０分

「すみません、二次試験を受けられてる方達ですよね。」色白で満面の笑みを浮かべた、高校生？が歩み寄ってきた。

昭芳と志穂は少し警戒した。

「実は、協力してほしいことがありまして、」

「協力？どういう風に？」志穂が答えた。

「どちらかのＤＳを貸してほしいんです。」

「はぁ～？何言ってるの？貸しちゃったら、勝手に負けられたりして、スコアをうごかすこともできちゃうよね。」

「代わりに、僕のＤＳを貸して置きますから、もし勝手に負けたりしたら、僕のＤＳからスコア取っちゃっても構いません。ほらこの通りスコアもちゃんと入っていますから」

高校生は、画面を見せた。（ＴＡＩＧＡ　スコア１２１点）

「なんで、他人のＤＳで勝負しようとするの？」

「それは、・・」

「将棋ルームでは一通り対戦した。これからは二回り目になる。だが、ＴＡＩＧＡがあまりにも強いので、みんな対戦を拒否する可能性があるからだろ？」昭芳は言った。

「その通りです、今将棋ルームにいる人たちとは一通り対戦が終わりました。」これからは警戒して、なかなか勝負してくれないかもしれません。そうなる前に、ＤＳを変えて勝負すれば、問題なく勝負してくれる、どうですか？僕のＤＳを人質にしているのだからそんなに警戒しなくてもリスクはないでしょ？」

「確かに、貸しても構わないが、協力の報酬は？」昭芳が聞いた。

「稼いだスコアの三分の一でどうでしょう？」

昭芳と志穂はお互いを見た。

「いいよ、私は賛成、悪い話じゃなさそうね」志穂は昭芳に向って言った

・・・少し考えて昭芳も続いた。

「いいだろう、交渉成立だ、あんたのＤＳは念のため預かっておくぜ、志穂さんのＤＳでいいかな、俺のはまだ将棋ルームでプレイするつもりだからできたら貸したくない。」

「いいよ、だけど一つ条件、私もＴＡＩＧＡのＤＳで花札プレイしてもいい？」

「それで構いません、よろしくお願いします。」志穂と大我はＤＳを交換した。

２０１１年５月７日？　蒲田でマッサージ？

２０１１年５月７日　午前７時４０分

歩きながら時計を見た斉藤密流は後ろでなにか呟いている人がいることに気づき、振り返った。

「四六歩、次の手は？ああ、了解！」

一次試験の休憩中に会ったニートのガキだった。携帯に専用のイヤホンとマイクを使い、棋譜を読み上げていた。

「よう、また合ったな、兄ちゃん、最後方でなにブツブツ言ってんだ？」

長門大我は、二次試験の詳細を聞き終わると同時に、秘書の紺野に協力してくれるプロ棋士を捜させた。そしてプロの棋士と携帯電話で連絡を取りつつリアルタイムで次の手を教えてもらっていた。

「ちょっと、将棋の上手い知人にアドバイス（次の一手）をもらっているんです。おかげで、順調に勝ち星を伸ばしています」

「へぇ～さすがだね、俺ももうすぐ、１２０点は突破できそうだが、後は、アドバンテージをどれだけ伸ばせるかだな。一スコアで一分はやはりでかい。出来るだけ稼いでおきたいところだな。」

「ですね。僕も走るのは得意って訳じゃないので、ここで最大限勝負しようとおもっています、現にもう疲れてきましたしね。そろそろ休憩しようかな・・・」

カン　カン　カン　赤い光が点滅している。

「おっと、少し走れ！踏切がなってるぜ！置いて行かれると通信が切れるぞ」斉藤密流が言った

「ああ！」長門大我は答える。

箱根駅伝で数々のドラマが繰り広げられた京急蒲田の踏切をダッシュで二人は越えた。

「ハア、ハア、ふう～お互い一勝分得したな！」斎藤が大我に向って息をきらせながら言う。

「そうですね」大我が涼しい顔で返事をした。

お互いにまた歩き出してＤＳを操作しながら言った。

斉藤は長門大我の表情を伺った・・！息が切れてない、つい一週間前合った時は病み上がりのような感じだったのにな。ってことは、最近まで入院してたって話は本当なのかもな・・凄い回復力だ。若いっていいね～

と思いつつプレイ中のチェスの次の手が閃いた「チェックメイト！！っよし勝った。」

「しかし、ペースメーカも大変だね。時速四キロで正確に不眠不休で俺たちを小田原中継所まで案内するんだから」

大我は鼻で笑って白い歯を見せた。

「別に一人でペースメーカをやるとは限りませんよ、途中でどこかで交代するかも知れないですよ。」

「それもそうだな、俺はそろそろ疲れてきた」
歩き出してそろそろ四時間か・・足が棒になってきた。そろそろ休憩するか
「あ、俺、休憩するから、またな。兄ちゃん名前は？」

「長門大我！」

「俺は斉藤密流、よろしくな」
斉藤密流はゆっくりと足を止めて手を挙げた。

そして第一京浜でタクシーを止めすぐに乗り込んだ。

山登りに備えて今のうちに疲労を取っておくか・・「お客さんどちらへ？」「蒲田周辺で腕がよくてここから近いマッサージ屋へ頼む。あっ疲労回復のマッサージ屋だぞ」

斎藤は念を押してタクシーの運転手に言った。

「はいよ、了解です！」注文が多い客だなと思いつつ、運転手は気持ちよく返事をした。

２０１１年５月７日？　わずかな揺らぎ

２０１１年５月７日　午前１０時３０分

「ちっ、また対戦拒否だ・・」晋吾はちょっといらついた感じで舌打ちをした。

裕太はその顔を眺めつつ言った。

「え！晋吾も？俺もなかなか対戦相手が見つからない・・」

「ははは、お互い、勝ち過ぎて。駄目だな、敬遠気味だ」

「ゆ・う・たさんっ？」横からいきなり聞いたことのある声がした。目をやると一次試験で問題の答えを教えてあげた女だったことに気づいた。

「ああ、君か・・名前なんだっけ？」

「優季菜です！一次試験ではお世話になったのに。自己紹介まだでしたね。すみません」

「へぇ～裕太が人を助けるなんて珍しいな・・お前、滅多に人助けなんてしないからな・・」

「え～そうなんですか？」晋吾に向って優季菜は言った。

「そう、学生の頃。可愛い子に勉強教えてって言われても、全部拒否してたし・・変わってんだよコイツ」

「まあ、ただの気まぐれだよ。深い意味はない・・」

「ふ～ん　そうかぁ？あ、優季菜さんか、じゃあユッキーって呼ぶね！俺は晋吾！よろしく」

「は～い、晋吾さん。こちらこそ　よろしくおねがいしますね♪」優季菜は会釈を返した。

「ところで、お二人は、ゲームの方は順調ですか？」

「ふっ、順調過ぎてもう対戦相手いないよ、１３３点、一応、ボーダーラインは軽く超えてるけどね」唇の端で笑いながら裕太は言った。

「だな、こっちが強いってわかったら対戦してくれないね。あ、俺は１３６点ね！まあ、もう少しアドバンテージを積み上げておきたいところだな・・で、ユッキーは順調なの？」晋吾が裕太に続いて言った。

「ふふふ？そうですね、一応♪こう見えて麻雀が得意なんです♪子供のころ父の麻雀相手をしてたんで・・」

なるほどな・・・道理でおれの心理を読むのが上手いわけだ・・一次試験の時のやりとりを思い出しながら、裕太は思った。

「ところで、裕太さん・・」優季菜は言った。「一次試験の助けて頂いたお礼をしたいんですが・・私のポイント受け取って貰えませんか？」

「えっ、どういうこと？もう諦めるの？」

「いえ、多分　安全圏だと思うんで、裕太さんにもポイントを渡したいんです。三次試験になったらお礼を返せるかわからないんで、今のうちに返させてください！」

「ふ～ん、別に返してもらう気はないけど・・見返りを期待して助けたわけじゃないしね。あ、ちなみに今、何点なの？」

裕太は聞いた。

「２４９点です！」

優季菜はあっけらかんと答えた。

「はぁ？」

裕太の表情がわずかに変わった。

優季菜はその表情を見逃さなかった・・

「うふふ、裕太さんも驚くことがあるんですね？ポイントもらったの、諦めて帰ろうとしてる人から？」

２０１１年５月８日？　二次試験前半戦終了

２０１１年５月８日　午前０時４分

新日本テレビのベテラン女性アナウンサー、武田美枝子は選手たちをねぎらった。

「皆さん。本当にお疲れ様でした。二次試験後半はこれより七時間後の午前七時より開始となります。なお、現在１２０点以上お持ちの方のみ参加資格がありますので。それ以外の方はここで脱落となります。脱落された方も今日はそちらにホテルをとっていますのでご自由にお使いください。」

「１２０点以上お持ちの二次試験前半突破者は得点の高い人から順に出発します。現在トップは３３５点です。つまり、１２０点の方は二百十五分後の出発となります。皆様はご自由に自分の出発時間に合わせてお集まりください。」

説明を聞いた受験者たちはすぐさま自分のおおよその出発時間を割り出した。

「最初にご説明したとおり、二次試験の後半は箱根駅伝のエース区間五区に当たるコースで大部分が山登りとなります。合格の枠は上位８０人です。わずかな時間ではございますが、皆様十分に体調を整えて試験に臨んでください。今日は本当にお疲れ様でした」

美枝子は試験受験者達に深く一礼をして報道車に戻った。

疲れた表情の試験参加者達はぞろぞろとホテルに入って行った・・

「何名、二次試験前半を突破したんですか？」武田美枝子はＡＤに聞いた。

「三百人中、１１８名です」

「あら、ずいぶん絞られたのね、まだ二次試験前半だというのに」

「それに、１３０点以上を取ったものはわずか十二名だけです」ＡＤが付け加えた・・

「って言うことは・・十分以内に１０６人・・明日は大混戦になるわね」

美枝子が静かに呟いた。

2011年5月8日？　並走

２０１１年５月８日　午前１１時

秋田亮介と城戸大輔は並走していた。お互い得点は１２５点で百一番目にスタートした。

午前七時に得点トップの春日優季菜が出発して三時間半後にようやくスタートラインに着いた。

一緒にスタートしたのは１１人だったが、気づけば他の九人を置いてけぼりにして、走り出して三十分で二人は七人を抜いた。順位は九十四番まで上げていた。

「いい感じですね。あと、十四人ですよ」城戸大輔は秋田亮介に話しかけた。

「正確にはあと、十五人・・二人で突破するには・・・」秋田亮介は答えた。

「あっそうでした。すいません。それにしてもすごいですね。こんなに走ってるのに息が切れてないなんて・・ええと・・」

「ああ、俺は秋田。元自動車工場勤務の無職だ。よろしく」

「僕は城戸っていいます。僕も今は仕事してません」

「そうか・・不景気で解雇されたのか？」

「いえ、自分自身を変えたくて、会社を辞めてこの試験を受けようと思ったんです」

「そうか、俺とは全然違うな・・俺はたまたま不景気で解雇されたとき偶然この試験のことを知っただけだ」

喋りながらも二人はまた一人抜いた。

「一緒ですよ。僕も・・この試験を口実に会社を辞めたかっただけかもしれません。まあ、いい会社で結構うまくいってたんですけどね。どうしてもこのままでいいのかなって気になって・・」

「まあ、その気持ちはわかるよ。俺も変わらなきゃって思って此処にいるわけだし」

「秋田さんは、二百億手に入れたら何をする予定ですか？」

「はは、まだ気の早い話だな・・二次試験の途中だぜ・・」

「それもそうですね。じゃあ、秋田さんまだ余裕ありそうだし・・少しペース上げます？」

「ここからは、本格的な山登りだ・・気合い入れていくぞ！とりあえず、二百億円の使い道の話は二次試験を勝ってからだ！」秋田は力強く言った

「ＯＫ！」城戸はそう答え秋田の目を見た。

二人は同時にペースを上げた

２０１１年５月８日？　ランナーズハイ

２０１１年５月８日　午前１１時４０分

ハア、ハア、あと二人！残り二キロ。

一次試験は三百位でギリギリ通過。二次試験前半戦も１２０点でギリギリ通過。

そして今、またも遠藤球男は合格ラインの瀬戸際で闘っていた。

小、中、高と野球を続けていて、大学ではラグビーをやっていた。二次試験前なんとかクリアできたのは、大学時代はラグビーのサークル以外の時間は麻雀をやっていたからだ。

（俺はついてる。あと二人）

ゴールの芦ノ湖まであと少し、球男は笑っていた。こんなに楽しいのは久しぶりだ。久しぶりというか正確に言うと野球やラグビーで得られる感覚とは別の緊張感、高揚感、そして幸福感・・一人で闘っていることの自身と不安。どれもが新鮮な感覚だった。

球男は今、一流のスポーツ選手でも滅多に体験しない、俗にいうゾーンに入った状態になっていた。

過ぎ去っていく景色が煌めきながら美しい。そんな事を感じる余裕があり、圧倒的なスピードの中であらゆる事がくっきりと見えていた。

（怖いくらいに気持ちがいい・・）

少し長い直線に入った。（見えた！百m先に一人、さらに三十m先にもう一人！残り１６００m）

目標を得た球男は、全身の細胞を覚醒させ更に突き進む

前を走る二人は過酷な山登りでフラフラで明らかに球男のペースが段違いに速かった。

球男の走りを見たテレビ局の関係者は何であんな筋肉質な体をしてあんな走りができるんだろう・・と驚きを隠せなかった。

2011年5月8日？　ディナービュッフェ

２０１１年５月８日　午後８時

二次試験合格者たちは品川に移動した後、プリンスホテルのリュクス　ダイニング　ハプナで夕食を食べていた。

ここはブュッフェスタイルの食べ放題形式でデートにもぴったりな上質な空間が演出されている。

２次試験合格者達から、少し離れた席で女性アナウンサーの武田美枝子、新藤亜由美、
大野明日香の３人も一緒に夕食をとっていた。

「明日香ちゃんは、もう慣れた？」春に入社したばかりの大野明日香にベテランアナウンサーの武田美枝子は聞いた。

「いえ、まだまだ、慣れないことが多くて・・皆さんに迷惑かけてますが・・でも毎日凄く楽しいです。新人なのに、この番組に参加させて頂いて感謝してます」

「私も、明日香ちゃんに負けないように頑張らないとなあ・・」苺のレアチーズケーキを食べながら新藤亜由美が言った。

「あら、亜由美はもう、すっかり人気アナウンサーじゃない」武田美枝子は亜由美に向ってそう答えた。

「武田先輩のようには、なかなかうまくいかないですよ～もっと勉強が必要ですね」

「あっ、このケーキ美味しいよ」亜由美は明日香に向って言った。
「ほんとですか？じゃあ私も取ってこようかな・・」
「それにしてもあいつよく食べるわね」武田美枝子は遠藤球男の皿を見ながら言った。
ローストビーフが山盛りに盛られている
「ええと、確か・・・遠藤さんですよね」明日香は言った。
「今日の最後の追い込み、凄かったよね、あの体で・・・」亜由美も言った。
「武田先輩は、遠藤さんに注目してるんですか？」明日香は聞いた。
「まあね、彼は面白いと思うわよ、ただ次の三次試験を突破できたらの話だけど・・たぶん一番苦手なジャンルじゃないかな」紅茶を啜りながら美枝子が答えた。
「明日香ちゃんは？注目している人、誰？」
「そうですね・・やっぱりクイズ王の三輪さんですかね」
「彼はいいわね、意外だったのは案外、運動神経がいいのよね・・でも、彼の友人の相良晋吾だったかな・・彼の方が私はいいわね」
「どうしてですか？」明日香が尋ねた。
「性格よ！相良の方がずっと大人な感じがしない？」

「確かに・・・」一次試験のインタビューを思い出しながら亜由美は頷いた。

「亜由美は?」美枝子が続けて聞いた。

「わたしは、やっぱり斎藤さんです。ちょっと心の中で応援しちゃったりして・・」

「ああ、斎藤君ね彼も試験に参加してたわね。優秀なプロデューサーだったのにね・・思い切ったことをしたわ。彼も・・」

「さて、このディナーが終わったら、早々に開始されるわよ三次試験・・仮想空間での長丁場が・・・」

２０１１年５月８日？　エレベーターの中

２０１１年５月８日　午後９時４０分

ディナーが終わると二次試験突破者たち八十名は自分の部屋でくつろぐよう指示された。

夕食が終わるとそれぞれの最強のニート決定戦参加者達は、品川プリンスホテルの用意された個室に移動した。

「あ、志穂さん　俺、９０４号室だからここで・・・」

エレベーターの中で羽賀根昭芳は神田志穂に向って言った。

「昭芳！私も九階だよ」志穂は９２２号室のカギを昭芳に見せた

「えっ、そうなんだ」

「じゃあさ、これから部屋に荷物、置いてくるから昭芳の部屋に行っていい？」

「ん！まあ・・いいけど　志穂さん疲れたでしょ今日は。少し休んだ方がいいよ」

「そうね～昨日、今日とずっと走らされっぱなし・・今日はちょっと休もうかな」

「うん、それがいいよ、それに・・・」

「それに？」志穂は昭芳の顔を見て尋ねた。
「自分の部屋でくつろげって指示があったでしょ。たぶん三次試験の説明はそれぞれの部屋である可能性がある。」
「ってことは、部屋に入ったら三次試験スタートとか？こんなにフラフラなのに？」
「その可能性もあると思います、あくまで可能性ですけどね・・」
「う～ん、昭芳に言われてみると、そんな気がしてきた・・」
「まあ、条件はみんな一緒です。でも心構えがあるだけで対応力があがりますよ！
お互い頑張りましょう！志穂さん！」
「そうね。じゃあ、とりあえず部屋に行ってみるね！」志穂は笑顔で答えた。
（さすがに昭芳は鋭いわね・・組んでいて頼りになる・・ま、でもいきなり三次試験開始ってことはないでしょ）
９２２号室のカギを開けて志穂は部屋に入った。「えっ・・・」
部屋のベットには紙が置いてありこう書いていた

――――――――――――――――――――
――――――――
三次試験のスタートですパソコンに向かうように
――――――――――――――――――――

２０１１年５月８日？　超仮想空間ＲＰＧ

２０１１年５月８日　午後１０時７分

三次試験のスタートですパソコンに向かうように、と書かれた紙。部屋に戻った相良晋吾はすぐにこの紙がベットに置かれていることに気づいた。

パソコンはすでに電源がついていて、現在の状態はスリープ中になっていた。

スリープ状態を解除した晋吾の目に飛び込んできたものは

――――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――

三次試験

超仮想体感型ＲＰＧ空間「ＮＥＯ　ＴＯＫＹＯ」でお金を稼ぐこと２０１０年６月１０日午後１０時までで上位４０名が４次試験に進めます

●このゲームはゲーム会社ジスパが制作した本日発売のゲーム（定価４５万８０００円）です。よって、試験参加者だけでなく一般のゲーム参加者がいます。

●バトルの時は体感スコープと体感センサーを全身に取り付けること。バトルモードに入って付けていない場合は自動的に負けとなります

●このゲーム内では実際のお金を使用します。ゲーム内で稼いだお

金は現実の世界で換金もできます。一般のゲーム参加者は自由ですが、最強のニート決定戦参加者は入金も出金も不可です。

●ゲーム内のお金、１ジスパ＝１００円です。最強のニート決定戦参加者には初期状態で３０００ジスパが与えられます。ゲーム終了時にすべて換金し回収致しますが、３０００ジスパを割っていても返却のペナルティはありません。

――

――――――――――――――

「なるほどね・・一人３００万円ね。大盤振る舞いだな全部なくしてもペナルティなしか」晋吾は独り言を呟きながら、にやついた。

（しかし、定価４５万８０００円ってどういうゲームなんだ・・）

画面を進めるとまずは職業とアバター選択画面に移った。

《職業選択・アバターは一度決めると変更はできません》

勇者、白魔導士、黒魔導士、パラディン、薬師、商人、ハンター、魔物使い、サムライ、一般人

「・・・・FFとドラクエをごっちゃにしたような職業だな・・」

そう思ったとき、コンコンとドアをノックする音が聞こえた。

「ねえ、晋吾いる？」ドアの外側から春日優季菜の声が聞こえた。

「ああ、ユッキーか！」ドアを開けながら晋吾は返事をした。

「もう、ゲーム始めてる？」優季菜が聞いてきた。

「まだ、職業とアバターを選択するとこ」

「そっかぁ。よかった？」

「晋吾は何の職業にする予定？」

「そうだなぁ、説明書をざっと読んだ限りではあまり大差がないな、初期の所持品と装備が違うだけなかんじがする。だがら一般人でもいいんじゃない一般人は所持品が家ってなってるし・・」

「なんか、どの装備よりも高そうだよね。」

「俺は、とりあえず一般人でプレイしてみるかな。ユッキーは好きな職業選びなよ。で後でパーティー組もう。」

「裕太は何にしたのかな？なにか連絡あった？」

「いや、あいつはもう、一人でゲーム進めてるだろ。性格的に」

「じゃあ、あたしは・・黒魔導士にする。見た目が可愛いから」

「そうかな～ま、いっか。じゃあユッキーは部屋に戻って！ゲーム内で合流しよう」

「わかった、晋吾？よろしくね！」

優季菜を部屋に帰すとタイミングよく携帯の着信音が鳴った。

絵栗珠からの電話だ。

2011年5月8日？　情報通

２０１１年５月８日　午後１０時１７分

相良晋吾は絵栗珠からの電話にすぐに出た。

「もしもし、絵栗珠？」

「あっ、相良君！繋がった！どう？最強のニート決定戦は？２次試験が終わったっていう情報が入ってきたんだけど・・」

「どこで、そういう情報が手に入るわけ？」晋吾は不思議そうに質問した。

「まあまあ、そういう細かいことはいいから」絵栗珠はさりげなく話題を逸らす。

「で？今はゆっくりしているところかな？」

「そうしたいんだけどね・・どうもそうさせてくれないみたいだぜ。」

「どういうこと？」絵栗珠は疑問の声を発した。

「もう始まってるんだ。三次試験・・」

「ええええ。それはきついね。やっぱりこのテレビ番組でなくてよかったぁ。私だったら絶対死んじゃう」

「おいおい、自分で出場させておいて。その言い方は冷たいな。絵栗珠」

「あははは、怒った？相良君？」

「いやいや、怒ってないけどさ」

「まあ、相良君なら、二次試験ぐらい全然、楽勝だったでしょ？」

「確かに・・もう少し、難関だと思ってたけどね。」

「でも三次試験からは大分、人数が絞られてきたんじゃないかな」

「そうだな・・８０人って言ってたな。２次試験突破者は・・」

「８０人かぁ・・あのね、相良君！その８０人の中には私の仕入れた情報によると結構、曲者が揃っているわよ。」

「情報通だね絵栗珠は」

「まあ、私もいろいろコネクションがあるからね」

「それで、注意した方がいい人っているの？」

「教えてほしい？」

「教えるために電話してきたんだろ？」

「そうよ！相良君には勝ってもらわないとね。要注意人物！まずは春日優季菜。２０代前半の女よ。彼女、一次試験も二次試験もトッ

プ通過みたいね。それと、三輪裕太！一次試験は同点トップ通過。で職業はクイズ番組の賞金ハンターってとこかしら注意が必要ね」

（どっちもよく知ってるよ・・特に裕太は高校時代から知ってるしな）と答えたいところだったが「わかった注意するよ」と答えた。

「それと・・」

「それと？」

「この番組に警察の関係者も参加しているみたい。何人かね・・」

「ふ～ん、警察がなんでこのテレビ番組に・・」こっちの情報はためになりそうだ晋吾は直感的に感じた。

「なんでも、この番組宛てに脅迫文が送られてきたらしいわ」

「脅迫文が？なんで？」

「私の考えだとね。これは、警察が仕組んだ事なんじゃないかって思うんだよね」

「警察が脅迫文をテレビ局に送ってそれを口実に番組に警察官を送り込んでるってこと？」率直な疑問を晋吾が口にする。

「そういうこと。あくまで私の想像だけどね。それをするメリットって何だと思う？」晋吾に質問を投げかける。

三秒ほど晋吾は考えて・・

「確か・・・最強のニート決定戦ルールでは［優勝者が一般人でな

い場合、公務員や会社に属している場合だったときは、遺産の譲渡を無効とする」っていう項目があったと思う。でその場合は御堂賢一の秘書に遺産は渡される」

「正解！私も脅迫文の黒幕は御堂賢一の元秘書、紺野由美だと思うのよね。そして警察は紺野由美の計画をわかった上で協力している」

「なるほど・・警察も自分たちがいかに優秀かを国民に披露するいい機会なんでしょうね。たぶん選りすぐりの精鋭を送り込んで来ているね」

「ふふ、さすが相良君、まだ、入り込んでる警察関係者の名前は不明だけど。次の試験までは調べておくね！」

「わかった。助かるよ」

「あっ、いっけない！」今思い出したように絵栗珠が言う。

「ん、なに？」

「一番伝えたいこと、忘れるとこだった。この番組の参加者で一番の危険人物。」

「危険人物か・・誰？」

「長門大我！」

「ナガトタイガ？」

「高校生の参加者よ」

「わかった、覚えておく・・あっ絵栗珠！そろそろ始めないと・・三次試験。」
（優季菜とゲーム内で待ち合わせしてたんだった。）
「うん、頑張って、相良君！」そういって絵栗珠は電話を切った。

2011年5月8日？　取材攻勢

２０１１年５月８日　午後１０時２６分

「うん、頑張って、相良君！」そういって絵栗珠は相良晋吾との電話を切った。

（まさか、こんなに早く３次試験がスタートするなんてちょっと計算外ね）

そう思いながら、急いでノートパソコンを開いた。

風呂上りに試験に参加している相良晋吾に状況を確認するだけのつもりだったが、３次試験が始まったとわかれば、亜理紗の状況が気になった。

（相良君は放っておいても３次試験ぐらいは余裕だろうけど、亜理紗ちゃんは私の助けがいる・・）

しばらくして、専用のソフトを立ち上げると

福永亜理紗に身につけさせているイヤリングと指輪に仕込んだカメラから三つの画面にリアルタイムの動画が映し出される。

そこにはアナウンサーに取材を受けている福永亜理紗が映っていた。

ディナー会場、品川プリンスのハプナで注目の選手として取材を受けていた。

美少女中学生が２次試験を突破したのだ。彼女を写せば数字が取れる。テレビ局の露骨な方針が彼女に対する取材に現われていた。

《亜理紗ちゃん・・聞こえる？》

絵栗珠は亜理紗のイアフォンを通して話しかけた。

亜理紗が取材を受けながら頷いた。どうやら聞こえているようだ。

《亜理紗ちゃん・・アイドルとして有名になるチャンスかもしれないけど取材は適当なところで打ち切って、自分の部屋に行ってみて。3次試験がもう始まっているみたいよ。折角有名になりかけているのにここで落ちたら元も子もないわ》

絵栗珠の助言は亜理紗に届いた。亜理紗は、「ちょっと今日は疲れたので・・」といって取材陣に対して申し訳なさそうに抜け出す口実を言った

２０１１年５月８日？　バトル開始！

２０１１年５月８日　午後１０時３０分

《動ける場所に移動して体感スコープと体感センサーを身につけてください》とパソコンの画面に表示された。

一般のプレイヤーとチャットで言い争いになって。お互いがバトルのコマンドを選択したためだ。

「おお～すげー」体感スコープと体感センサーを身につけて三輪裕太はバトルモードに突入した。体感スコープから見る風景はまるで自分がそこにいるような錯覚さえ覚えてしまうほどの広大な映像が広がっていた。

動ける場所ってのがちょっと分からなかったが、とりあえずスイートルームなのである程度のスペースはあった。

裕太はテーブルや椅子を端に寄せて、部屋の真ん中に移動した。

バトルがなかなか始まらない。準備時間は２００秒。裕太は準備ＯＫのコマンドを選択していたが、相手がまだ準備しているのだろう・・まだゲームは始まらない（このゲームまだ発売されたばかりだっけ・・相手もまだ都合が分かんないんだろうな）そんな事を思いながら、準備時間の２００秒が終わり、戦闘開始となった。

実際に体を動かして武器コントローラーを剣のように扱う、どうやら本当に体感型らしい。

相手が剣を裕太に向って振りかざしてきた。

とっさに裕太は後ろにジャンプしてかわした。

「おっと、あぶね～」

相手は勇者風の服装だがゲーム開始早々だからか安そうな剣と楯を装備している。それは、裕太の方も例外ではないサムライを選択したものの、安そうな錆びた刀を持っていただけだった。裕太は半歩下がり刀を上段に振りかぶった構えをとった。

と同時に相手が剣で切りかかってきた　ガン！？？？

相手が何かに当たったような仕草になった。そこに透明な壁があるかのような・・

（あ！なるほど、相手の部屋が狭いからそこより先は動けないわけね）裕太はすぐに状況を理解し、壁に当たってうずくまってる相手に裕太は相手の頭に日本刀を突き刺した。

2011年5月8日？　許す者

２０１１年５月８日　午後１０時５０分

《ＹＯＵ　ＷＩＮ》と画面に表示がでた。「お～勝った！」

《倒した相手をどうしますか？》

・とどめをさす・身ぐるみを剥ぐ・捕える・何もしない・

（本来なら頭刺したら死んでるはずだけど・・ここら辺はリアルじゃないな・・）そう思いつつコマンドを見て、

捕えるってなんだ・・と思った裕太はすぐに１００ページはあろうかという分厚い説明書をパラパラとめくりはじめた。

「男性キャラクターの場合、奴隷船や奴隷兵として、女性キャラクターの場合は娼館に売ることができます」

なるほど・・人身売買ってやつね、少しはお金が増えそうだな・・で・・とりあえず身ぐるみを剥ぐを選ぶと、相手の装備品と所持アイテムそして所持金が表示された。

《装備》
鉄の剣
布の服

《所持アイテム》

薬草

《所持金》

２３０３ジスパ

「ふ～ん２３万円くらいか・・装備品はたいしていいもの持ってないな」

（しかし、凄いゲームだな２３万円奪えて、現実世界で換金もできるんだから・・）裕太は思った。

「た、助けてくれ」倒した相手プレイヤーが言葉を発してきた。地面に頭をつけて深く土下座をしている。「この通りだ頼む・・・・」

「まいっか・・あんた壁にぶつかったんだろ。そんな負け方、不本意だよね。まあ、次からは注意するんだな！」裕太はそういって《なにもしない》を選択した。

「あ、ありがとう」勇者風のプレイヤーは裕太にお礼を言った。「あ、あの・・」

「ん！なに？また闘るの？」裕太は相手を見て言った。

「あ、いえ。よかったら仲間にしてくれませんか？」勇者は言った。

「仲間か・・まあ、めんどくさいからいいや！とりあえず一人でいろいろ動きたいからさ」

「そんなこと、言わずに兄貴ぃ」

「兄貴ってなんだよ。」

「いいじゃないですか兄貴ぃ、兄貴は命の恩人っす。折角貯めたバイト代で何とかこのゲーム買って、貯金を全部、ゲームのお金に換金してたんです。これ取られたらもう俺の人生終わるとこだったっすよ」

「おいおい！お前バカか？全財産持ってるのに、人に喧嘩なんか売るなよ！早死にするぞ！」

「ハイ・・反省してます」

「じゃあな！」裕太はそういってバトルモードを終了した。

ＰＣ画面に戻るとさっきの勇者風のキャラクターがついてくる。

「おい、仲間にしないって言っただろ？」チャットで話しかけた。

「あ、いえ気にしないでください。勝手に付いて行ってるだけなんで・・とりあえず名前は［ヒサシ］といいます！よろしくお願いします」

「勝手にしろ！」ちょっと嫌な顔をした裕太はそう言い放った。

２０１１年５月８日？　魔法の練習

２０１１年５月８日　午後１１時３０分

黒魔導士のユキナは魔法の練習をしていた。

呪文と唱え、手を動かす。すると「わあ、すごーい♪ねえ、晋吾、見て見て」体感モニターの画面いっぱいに閃光が煌めいた。ユキナは雷系の魔法を繰り出すことに初めて成功した。

ユキナは一般人のシンゴと訓練モードで対戦をしていた。説明書によると、どうやらこのモードは勝っても負けても何も起こらないらしい。

魔法を出す方法は、手の動き、指の動き、そして呪文を唱えるこの三連動作を正確に行うと魔法が発動する仕掛けになっていた。魔法によってそれぞれ動作がちがう。

炎の魔法はファイアー、氷の魔法はアイス、風の魔法はエアー、系統によって発する言葉は一緒だが動作が複雑なほど上級魔法になる、また魔法系の装備品によっても強度が変わるらしい。

「しかし、この体感センサーよくできてるな～熱さや、冷たさまで再現されるなんて・・」

晋吾は感心して言った。

「あ、できたできた。な～んだ一般人でも魔法できるみたいだな」

晋吾は十段階中六段階目の強度のファイアーを繰り出した。体感スコープを通してリアルな炎が辺りを包みこむ。

「すご～い？晋吾！よくそんな難しい動作一回でできるね」優季菜は驚いた。

「うん、まあもう少し練習すればもうちょっと早く出せそうだな。今はゆっくりやったから三秒くらいかかっちゃたけどな」

「よし、もう少し練習しよっか！」晋吾が優季菜に言った。

2011年5月8日？　大都会の宝石箱

２０１１年５月８日　午後１１時３７分

品川プリンスの最上階３９階トップオブシナガワで斉藤密流はプレミアムモルツを飲んでいた。

「ふぅ～、こののどごしがたまんないね」

「あれ～、斉藤さん！こんなところで余裕ですね～」

何やら聞き覚えのある声がしたので振り返ると長門大我が後ろから近づいてきた。

「うわ～いい景色だなぁ、街の光がまるで宝石みたいですねぇ。あっ横いいですか？」

「ああ、構わないぜ！しかしここは、お子様の来る場所じゃないぜ！」

「まあまあ、いいじゃないですか！じゃあとりあえずウーロン茶にしておこうかな・・」

メニュー表をみて大我が言った。

「ウーロン茶、飲みに来たのか？」

「いえ、こういうところ一度来てみたかったんです。あっ東京タワーが見えますよ！今日は青色ですか・・凄いなぁ」

ウエイトレスを見つめた大我はパッと手を挙げて注文を頼んだ。
「・・・・前から思ってたんだが・・」（おまえはいったい何者だ？）
大我を横目で見ながら斉藤は言った。
「なんですか？」大我は斎藤に対してにこやかにほほ笑んでいる。
「・・・いや、なんでもない！」斉藤はグィっとビールを飲み干した
「なんなんですか～気になるじゃないですか。」
「なんでもないよ」
「今日はこれからまたゲームに入るんですか？」
大我が質問した。
「いや、昨日の箱根からずっと休み無しだ・・そろそろ限界だ。これからデリヘルでも呼んでスカッとやって寝るとするよ」
「あはははは～元気ですねぇ」
「ふっそんなわけないだろ・・本当にもう寝るわ、疲れすぎだ・・」
斉藤は苦笑いしつつ手をあげて会計を頼んだ。
「ご一緒でよろしいですか？」
「ああ、こいつのウーロン茶も入れといてくれ」

２０１１年５月９日？　ホテル探し

２０１１年５月９日　午前０時３分

「兄貴はこのゲームでなにをする予定なんですか？」ヒサシが裕太にボイスチャットで話しかけた。

「ん～～まあ、とりあえず金！稼がないと行けないんだよね」

「金っすか！でも、あまり危険を冒すのも、危ないですよ！」ちょっと大げさにヒサシが言った。

「なんでも、ゲームオーバーになると再エントリーに１０００ジスパかかるらしいんです」

「ふ～ん、有り金全部取られたうえに、さらに１０万円もかかるのか・・ひでぇゲームだな・・」すると裕太はヒサシの方を見て言った。

「え～と・・ところで、あんた、なんだっけ名前？」

ヒサシはがっくりと肩を落として「ヒサシです。そろそろ覚えてくださいよ～」と答えた。

「あ、ヒサシね。覚えとくよ。ところでゲームの中断の仕方って知ってる？」

「それは簡単です、街に行ってホテルや旅館に泊まればいいんですよ！お金がかかりますけどね」

「え？そうなの？」裕太はちょっと嫌な顔をした。

「まあ、安いビジネスホテルとかだと一泊３０ジスパぐらいじゃないですかね」とヒサシが答えた。

「泊まんない場合はどうなるの？」

「そうですね～他のプレイヤーに襲われてゲームオーバーとかじゃないですか？それと・・」
ヒサシは付け加えた

「画面の左下に緑のゲージがあるでしょ。それは満腹度らしいですよ。０になると死んじゃうらしいです。なので定期的に何か食べないといけないようです。自分はこのゲームに来て１５時間くらいですが、大体５分の１減ってますね。ホテルに泊まってないと飢え死にして死ぬ場合もあるかもです」

「ふ～ん面倒なゲームだな。とりあえずこのゲームの世界にいても金をとられて、ゲームを中断しても金を取られるわけだ・・」裕太はゲームの仕組みが少し理解できた。

「そうみたいですね」ヒサシは同意した。

「とりあえず、今日はホテル探して休むとするか・・」裕太は言った。

「了解っす」ヒサシは元気よくボイスチャットで答えた

２０１１年５月９日？　カモねぎはどっちだ

２０１１年５月９日　午前１１時３５分

（六・・七・・八・・八人か・・・う～ん結構やばいかな・・）優季菜は久しぶりの緊張に、鼓動が高まりを感じた

シンゴとユキナは八人の男達に囲まれていた。今はまだバトルモードの前の交渉の段階だが明らかに男達は殺気だっていた。

「おい、有り金全部置いて行けば、命だけは助けてやる！」殺気立った男たちの一人がそう言った。

「ふふ、その言葉、そっくりそのままお前たちに返してやるよ。」晋吾が偉そうに言い放った。

（え～晋吾！そんな、相手を怒らせるようなこと言わなくていいのに～）優季菜はそう思いつつも、これはもう腹をくくるしかないと即座に判断して晋吾のセリフに乗っかった。

「そうよ、貴方たち！貴方たちの今の状況分かってるの？鴨がねぎしょって私たちの前にやってきている状態よ！あまり調子に乗ってると食べちゃうわよ♪」

ドキドキしながら優季菜は言いきった。

「なんだと～調子に乗りやがって、ぶっ殺す！」男達がバトルモードを選択し

まもなくバトルの準備画面に移った。制限時間は２００秒だ。

「ねえ、シンゴどうしよ～、私、勝てる自信ないよう・・」

「まあ、ユッキーは練習で成功した、あの雷系の魔法があっただろ、あれを一回成功させてくれたらオッケーだぜ」

「本当？」

「ああ、あとは俺に任せて！」

「わかった」

「ただし！バトル開始早々、相手が動くよりも早く、その魔法を成功させること！」晋吾は優季菜に念を押した。

「うん、絶対成功させる！」

「よし！じゃあ、大丈夫だ。」晋吾は笑顔で優季菜に語りかけた。

二人が体感モニターと体感センサーを取り付けた時、ちょうどバトル開始の時間となった。

２０１１年５月９日？　勝負は一瞬

２０１１年５月９日　午前１１時４７分

《ＹＯＵ　ＷＩＮ》と画面に表示がでた。

勝負は一瞬の内に決まったユキナがぎこちなく雷系の魔法サンダーを唱え、その閃光が煌めいた。ほんの一秒後。辺り一面が炎で包まれた。雷の音に紛れてわずか一秒の間にシンゴがレベル７の炎系魔法ファイアーを発動したのだ。

レベル７のファイアーは自分の周り３～５メートルを焼きつくすという魔法だ。

８人の男達はユキナのサンダーに気を取られ。晋吾の魔法にまるで対応できなかった。

《倒した相手をどうしますか？》

・とどめをさす・身ぐるみを剥ぐ・捕える・何もしない・

体感スコープにコマンドが表示された。

「すご～い、晋吾？よくそんなレベルの高い魔法が一回の練習でできるね」

優季菜は感心して言った。

「まあ、ね・・この囲まれた状況だったらこの魔法がベストだと思

ってね」

「しかし、凄いな。半分倒せたらＯＫだと思っていたけど。一発で仕留められるとはね」
晋吾は意外そうに言う。

「まだ、この人たちも戦いに慣れてないのよ。ゲームが発売されてまだ二日目だし・・」

「だろうな・・人数だけ集めても、このゲームは勝てないってことだな」

「とりあえず、どうする？この人たち」優季菜は晋吾に聞いた。

「そうだなぁ」晋吾はちょっと考えた・・

「勘弁してくれ、勘弁してくれ」男達は口ぐちに言った。

《身ぐるみを剥ぐ》をシンゴは躊躇いなく選択し、さらに《すべて奪う》を選択した。
・とどめをさす・捕える・何もしない・
残りのコマンドが表示された。
《捕える》を選択すると［捕獲］の表示に男達８人の名前が表示され、バトルモードは終了した。

「うわ～晋吾・・容赦ないね・・」

「あれ？ユッキーは見逃してあげた方がよかったの？」

「そんなことないけど・・ゲームとはいえ実際にお金奪ったのと一

緒だから・・なんだか可哀そうだなって・・」

「ま、自業自得だろ。俺はバトル開始前に忠告してやったんだし」

「ふふふ・・晋吾って裕太と性格違うよね！」

「えっ！なに急に？」

「だって、裕太ならこの状況ならたぶん見逃してたと思うんだよね・・」

「そうだな、あいつなら多分、見逃してただろうな」

「それなのに親友って、なんだか面白いね」

「まあ、性格が違うからお互いの長所も分かるし欠点も分かる、似ているより面白いだろ？」

「そう言われるとそうね♪」優季菜は納得した。と同時に・・・

パチパチパチ突然、後ろから拍手をする音が聞こえた。

「いや～お見事です」ボイスチャットで話しかけてきたのは［タイガ］と表示された、魔物使い風のキャラクターだ。そして、その後ろには［ユミ］という白魔導士風のキャラクターもいる。

「貴方たちの闘い・・観戦モードで観させてもらいました。いやー凄いですねホント一瞬！」

「・・・・・」シンゴが無言だったので

「なにかようですか♪」ユキナはボイスチャットで明るく答えると

「実は・・」後ろに控えてたユミが口を開いた。

２０１１年５月９日？　人身売買

２０１１年５月９日　午後１２時０８分

「今捕えた、男達８人を譲って頂けませんか？」
ユミがシンゴとユキナに向って言った。

「えっ！どういうこと？」
ユキナはちょっと首を傾げながらユミに向って言った。

「ええ、ですから、今バトルモードで捕えた８人を私たちに譲って頂きたいのです。もちろんお礼は致します。」
とユミがにこやかに説明すると・・タイガが説明を付け加えた。
「このゲームの人身売買で、男性一人の相場は調べたところ大体７００ジスパ。およそ日本円で７万円です。ゲームの再登録料が１０００ジスパなので、まあ妥当な相場と言えるでしょう。で・・お願いなのですが一人１０００ジスパ出します。８０００ジスパで８人を譲っていただけないでしょうか？」

「よくわからないな。この男達を買うことによって、あんた達にどういうメリットがあるんだ？」シンゴがタイガとユミに聞いた。

「それは・・」ユミが回答に困ってると、タイガが切りだした
「もちろんゲームを優位に進めるためですよ、この８人を僕のチームに入れようと思ってるんです」

納得したようで心の中では全然納得していない晋吾は「ふ～ん・・なるほどねぇ」と言った。

「で？譲ってあげないって言ったら、どうする？」シンゴは意地悪そうな口調で言った。
眼は笑っておらずタイガを睨んでいる。

タイガは手を前に出して振った。そしてちょっと驚いた表情をして
「いえいえいえ、どうもしませんよぉ。ただ交渉が決裂した。ただそれだけです。まさか、さっきのバトルを見て貴方たちと闘おうと思うわけないじゃないですか・・」

「どうする？ユッキー！」シンゴがユキナに尋ねた。

「う～ん。そうね～？一人１５００ジスパでどうですか？」

（おいおいおい、値段釣り上げるのかよ・・これ以上は無理だろ・・・）
シンゴがそう思った瞬間！

「いいですよ！それで即決していただけるなら」間髪入れずにタイガが喋った。

「わ～い♪やったあ？いいよね、晋吾？」
振り向いたユキナはシンゴを見た。
「あ、ああ　まいっか。ユッキーがいいなら」

「ふふ、交渉成立ですね。」ユミが笑顔を作った。

シンゴの捕獲した八人の男達がタイガの捕獲項目に移動し、１２００００ジスパがユミからタイガに渡された。

「これで、無事取引終了ですね。ありがとうございます」タイガがシンゴとユキナに感謝を述べた。

「い～え♪こちらこそ、こんなに貰っちゃって。なんか悪いです」ユキナが謙遜して言った。

「それでは、これで・・失礼します。お二人のご健闘をお祈りしていますよ」

タイガはそういって、アイテムウインドウを開いた。そして、《テレポートウイング》というアイテムを取り出し使用した。

タイガとユミが消えた・・・

「！！！」シンゴとユキナは驚いた。

「消えた・・・」瞬きしながらユキナが呟いた。

「移動系のアイテムか・・そういうのもあるんだな・・」シンゴはそう推測した。

「・・・・・・・」優季菜が考え込んでいる。

「どうした？ユッキー？今のそんなに驚いた？」

「なんだろう・・わたし、あのタイガってプレイヤーに会ったことある気がする・・どこだったか・・あっ！！」

優季菜の脳裏に半年前の中山競馬場での出来事が呼び起こされた。

「そうだ、あの時の素敵なおじ様・・あの人に似てる。喋り方、立ち振る舞い、雰囲気」

優季菜は思い出しながら語った。

「おじ様？ユッキー！たぶんあの二人、最強のニート決定戦の参加者だぜ。２次試験におっさんなんていたかな～」晋吾が横やりを入れる。

「まあ、あまり気にするなって」そう言いつつも晋吾は冷や汗をかいていた。

《タイガ》と《ユミ》・・・絵栗珠の電話の内容を相良晋吾は思い出していたのだ。

（タイガって絵栗珠が言っていたナガトタイガの事じゃないか・・それと一緒にいたユミはいったい誰だ？ユミ・・・ゆみ・・・紺野由美！！御堂賢一の元秘書！！いや、考えすぎか・・たまたま同じ名前なだけかもしれないし）

そう考えているところで優季菜が明るく言った。

「そうね！じゃあ、このお金の有効な使い方を考えよ～♪」

２０１１年５月１０日　常連客繋がり

２０１１年５月１０日　午後１３時４８分

秋田亮介と城戸大輔はゲーム内のモンスター退治でお金を稼いでいた。

モンスターを倒して捕獲して、店に売りに行って初めてお金になる。

「しかし、あまりお金貯まりませんね。」

《ダイスケ》が《リョウスケ》にチャットで話しかけた。

「まあ、安全策を取って弱小モンスターばかり倒してるからな」

このゲームは地域によって出現するモンスターのレベルが全然違うと説明書に書いてあった。

今いるところは一番難易度の低いモンスターが現れる地域で一体倒して５ジスパで売れたら高い方だ。

「秋田さん！そろそろ。もう一ランクモンスターの高いレベルのとこで稼ぎませんか？ほら、大体、戦闘のやり方も分かってきたことですし」

「そうだな・・でも油断は禁物だ。このゲームでのゲームオーバーは最強のニート決定戦でもゲームオーバーってことだからな。一般の参加者は１０００ジスパ。つまり１０万円払えば再エントリーできるみたいだけどな」

「ですね。もちろん油断はしないよう気をつけます。一瞬の気の緩

みが命取りですからね。」
そのとき画面が急に光り、二人のプレイヤーが現れた。
［タイガ］と表示された、魔物使い風のキャラクターと、［ユミ］という白魔導士風のキャラクターだ。
「こんにちは！」タイガがボイスチャットで話しかけてきた。
「あっどうも！」ダイスケがぎこちなく答える。
「いきなり、現れたけど、どうやったんだ？」
「テレポートウイングというアイテムを使用したんです。街や場所を選択して一瞬で移動できるんですよ」ユミが言った。
「この場所には何で来たんですか？」
「貴方たちに会いに来たんです。」
「僕達に？他のプレイヤーのところにも移動できるんですか？」
「はい、《千里眼》というアイテムを使えば全プレイヤーの居場所が分かるんです。で《テレポートウイング》と組み合わせれば、どんな場所にもどんなプレイヤーのところにも移動できますよ」
「で、どうして　俺達に会いに来たんだ」
「城戸大輔さんがどういう方なのかなって思ったので」ユミが答えた。

「どういう方なのかなって言っても今見えてるのゲームのキャラクターだしなぁ。でも、なんで俺の名前知っているんですか」

「あっ、やっぱり城戸さんなんですね」ユミが嬉しそうに言った。

「やっぱり、って？」

「私、アグニールの常連なんです。佐藤さんにこのテレビ番組のこと聞いて。面白そうだなって思ったので私も参加させてもらったんですよ。そこで城戸さんの事も聞いたんです」

「そっか！アグニール繋がりか・・」

「僕はユミさんの友達のタイガです。どうですか？最終的に優勝するのは一人ですが。この三次試験に限っては協力してクリアしませんか？このゲームは人数が多い方が有利なんです。そういうイベントもありますし」

「たとえば、どんなイベントがあるんだ？」リョウスケが聞いてきた。

「そうですね。たとえば皇帝というイベントがあります。その場所を支配しているだけで一日１００００ジスパ貰えるんです。日本円で１００万円ですね」ユミが言った。

「どうやったら、皇帝になれるんですか？」ダイスケが聞いてきた。

「このゲーム、「ＮＥＯ　ＴＯＫＹＯ」の中心。皇居を占領すればいいんです」

「でも、人気のイベントですのでいろいろなプレイヤーがこの皇居を狙っています」

「じゃあ、四人だけだとちょっと厳しくないですか？」

「いえ、貴方たちの他に８人協力を取り付けています」ユミが言った。

「そうなんですか、じゃあ。僕たちを入れて１２人ですか」

「そうなりますね」

「どうしますか？秋田さん」

「俺はいいと思う・・あんた、名前は？」

「長門大我といいます。よろしくお願いします」

「ナガトタイガか・・俺は秋田亮介よろしく！」

２人は握手をした。

２０１１年５月１２日？　ロックオン

２０１１年５月１２日　午後１５時３分

「おまえさぁ～こんなにゲームの中に毎日来てるけど。バイトとか大丈夫なのか？」
ヒサシがあまりにも毎日自分についてくるので裕太は思わず聞いた。

「あっ、バイトですか？もちろん止めましたよ～、だってこのゲームをやるためにバイト始めたようなもんなんですから」
ヒサシは真顔で答えた。

「このゲームって、俺、実際始めるまで全く知らなかったんだけど、どっかで宣伝とかしてたっけ？」ちょっと疑問に思ったことを裕太は率直にヒサシに聞いてみた

「大規模な宣伝はしてないみたいですね。たぶんそれもゲーム会社の戦略の一つだろうとネットの世界では結構な話題になっていましたけど」

「ゲーム会社の戦略ってどういう意味？」

「謎の多いゲームってことじゃないでしょうか？世界初の体感型でゲーム内のお金を現実世界に換金可能っていう情報が流れただけで他はどんなゲームかは公表されてませんでしたし・・」

「ふ～ん、なるほどねぇ・・・」
（このテレビ番組を作った上層部は、ほとんどゲーム内容が公表されていないにもかかわらず、三次試験にこのゲームを使ってきた・・

ということは・・・）
裕太は自分の考えを巡らせた
「兄貴ぃ～どうしたんですか？アバターの動きが固まってますよ」
「ああ、悪りい！ちっとな・・さっきのヒサシのゲームの説明で気になることがあって」
「なんか俺、気になることなんていいましたっけ？」
ヒサシが不思議そうに言った
「ストップ！！！」裕太がヒサシにボイスチャットで注意を促す。
「なんすっか？兄貴」
状況が理解できてないヒサシは辺りをキョロキョロと見渡した。
「あっ！！」
５０ｍ先でライフル銃のような武器を持ったプレイヤーが更に３０ｍ先にいるプレイヤー二人を狙っている。
「見たところ男女のペアだな・・あんなに遠くから戦闘態勢に入れるのか？」
裕太がヒサシに聞いた
「俺に聞かれてもわからないっすよ～」

ライフル銃を持ったプレイヤーは前を行く二人に照準を合わせ引き金を引いた

２０１１年５月１２日？　問答無用！！

２０１１年５月１２日　午後１５時１１分

《ロックオンされました》という表示がいきなり二人の目の前に現れた。

「えっ！！なに？ロックオンってどういうこと？」

優季菜は驚いて声をあげた。

「ロックオンってことは銃のようなもので狙われているってことだろ」

晋吾は優季菜に落ち着いた表情で説明した。

そして説明をしているうちに選択肢コマンドが表示される

１　戦闘開始

２　降伏

３　交渉する

「どうしよぉ～晋吾！？」優季菜は動揺している。

「とりあえず、交渉だろ」軽い気持ちで晋吾は

３　交渉する　　を選択した。

間髪入れずに《交渉は拒否されました》と表示された。

《バトルモードに入ります準備してください。》

「アハハ・・交渉の余地なしってことか・・」

「もう、笑い事じゃないよぉ晋吾！」焦った様子の優季菜は言う

《動ける場所に移動して体感スコープと体感センサーを身につけてください》とパソコンの画面に表示された。準備時間のカウントダウンが始まる・・

「ユッキー！おそらく、バトル開始と同時に敵は銃のようなもので撃ってくるはずだぜ！おそらくは歩いていた方向の逆側から・・後ろから狙われているんだと思う。とりあえず、そこにある岩陰に隠れるんだ！」

体感センサーを付けながら晋吾はアドバイスをした

「わ、わかった」

１０・９・８・７・６・・・準備時間の残り時間が無くなってきた。

「ユッキー来るぞ！」５・４・・・「うん、大丈夫！！」

３・２・１《バトル開始》

ガガガガガガガガガガガガ開始と同時に銃弾の嵐が飛んでくる。

二人は間一髪、岩陰に隠れた。

「やっぱりな・・・」晋吾は計算済みと言わんばかりに呟いた。

「マシンガンのような武器なのかな？」優季菜は半端じゃない銃弾の嵐を見て言った。

「みたいだな」晋吾は同意する

「さて、どうやって反撃するかな・・」晋吾は今まで練習してきた魔法でどうやって相手を仕留めようか頭の中でシュミレートした。

「あれ、晋吾。音が止んだよ・・」銃声が止み弾がとんでこなくなくなった。」

「弾切れか・・または、岩陰から出てくるよう誘ってるかだな・・ユッキーの手鏡ちょっと貸してくれない？」

「えっ、何に使うの？」

「まあ、いいから！頼む」

「わかった！」優季菜はバックからすぐに手鏡を取り出し晋吾に渡した。

受け取った晋吾は、手鏡を使って、敵のいる方向を見た。

「なるほど、そうやって使うんだぁ」優季菜は納得した。

「！！！！！！！！！ヤバい！！！！。ユッキー！！岩から、離れろ！！！！」

晋吾は優季菜の手を握って強引に岩陰から引き離した。と同時に今まで身を隠していた岩が木端微塵に吹き飛んだ。

２０１１年５月１２日？　近代兵器を持つ少年

２０１１年５月１２日　午後１５時１４分

吹き飛んだ岩を見た優季菜は背筋が凍った。

「あぶね～ことするな～ロケットランチャーのような武器だな」と晋吾が言った瞬間

ガガガガガガガガ　またマシンガンの音が響きだした。

「うわ～容赦ないね・・ユッキー！とりあえず伏せろ。」

「わかった！」今は岩が破壊されたときの影響で砂ほこりが舞っているため、何とか体を隠せている。

「晋吾！もうすぐ砂埃がおさまるよぉ！」

「大丈夫！」そう言いつつ、晋吾は魔法を出す動作を行い、叫んだ

「アイスシールド！」

次の瞬間。氷の壁が晋吾と優季菜の前に出現した。

「わあ！凄い！」優季菜は思わず声をあげた。

「これで少し時間が稼げる・・ユッキー！この前雨を降らす魔法練習してただろ？できる？」

「任せて！でもこの魔法、発動まで少し時間がかかるんだよね」

「わかってる、だからユッキーに頼むんだけどね。俺が時間稼ぎするからユッキーは雨を降らす魔法に専念してくれ！雨が降りだしたら俺が雷系の魔法を敵の上空から放ってやる。直撃しなくても感電するはずだ！正確な場所が特定できなくてもこれなら倒せる！」

「なるほど、さっすが晋吾？！了解っ！」納得した優季菜は半径５０ｍに雨を降らす魔法を出す動作を始めた。

「レインフォール！」

雲行きが徐々に怪しくなっていく

「ファイアーボール！！」晋吾は銃弾の飛んでくる方角に火の玉を飛ばした。

銃声が止んだ。「？」そう簡単に当たるわけないと思いつつ

「ファイアーボール！！」もう一度同じ方向に火の玉を放つ！

やはり反応がない

「？」どういうことだ。晋吾は思った。

優季菜も不安そうな顔をした、しかし、しっかりと雨を降らせる魔法の動作は続けている。

ポツリ、ポツリと雨粒が落ちてきた。

もう少し・・そう思った優季菜は上を見上げた。

！！氷の壁の上にゴーグルをつけた少年がマシンガンを構えようと

していた。
「晋吾！！上っ！！」
優季菜は叫んで知らせる。と同時に優季菜が発動していた魔法は別の動作が入ってしまったため解除されてしまった。
魔法を発動する時間はない！！そう思った晋吾は二日前に訪れた町ネオシブヤで買った、きれいな装飾が施されているナイフをマシンガンの引き金を引こうとしている少年に飛ばした。少年はナイフをかわしたが少し態勢が崩れた。

《ユウタが参戦しました》《ヒサシが参戦しました》と
急に体感スコープのメッセージ欄に表示された。

ゴーグルをつけた少年に向って弓矢が飛んできた！！態勢を立て直した少年は間一髪弓矢をかわした。そして近づいてくるヒサシに向ってマシンガンを乱射する。

カキン、カキン、重厚な鎧がマシンガンの弾をはじき返す。距離がどんどん詰まってくる。
同時に少年は晋吾と優季菜のほうも一瞬見た。二人の動きも警戒するためだ。

その一瞬の隙を《ヒサシ》の後ろから《ユウタ》が見逃さずクロスボウを使って矢を放った。マシンガンを持った少年の左足に矢が突き刺さる。
「ちっ！！さすがに一対四じゃ、分が悪い・・いったん引くか・・」
そう言いつつ少年はポケットから瞬間移動のアイテムを取り出した。

「ネオシナガワ！！」少年の姿が消えた

メッセージが残る《セイシロウがテレポートウイングを使用しました》

２０１１年５月１２日？　友情の値段はプライスレス

２０１１年５月１２日　午後１５時２０分

「ありがとぉ？裕太さん！！」優季菜は本当に感謝した様子でお礼を述べた。

「サンキュ！裕太！！とりあえず礼を言っておくよ！でもここで俺達がゲームオーバーだった方が裕太的にはよかったんじゃないか？俺はこの最強のニート決定戦で一番の強敵は裕太だと思ってるし・・」

「はは、別に俺の助けがなくても負けなかっただろ？余計な事をしちゃったかな？まあ、晋吾とは最終試験で正々堂々と決着をつけようと思ってるからな！」裕太は謙遜して言った。

「でも正直助かったよ、アイツ相当強かったぜ！セイシロウっていったっけ？もう遭遇したくないな。一体なんだよ！あの武器。反則じゃないのか？マシンガンとかロケットランチャーとか・・それにたぶんゴーグル！あれ、サーモグラフィとかがついてるんじゃないのか？砂ぼこりの中、戸惑いなく突っ込んできたからな・・」晋吾は少し愚痴る。

「そうだよぉ、あんな武器どこで手に入るんだろ。今まで言った街の武器屋には売ってなかったよ」優季菜も納得いかない様子だ。

「ところでさあ・・・あんた誰？」甲鉄のフルフェイスの重たそうな鎧を身につけた《ヒサシ》に向って優季菜は尋ねた。

「装備解除！！」そう言うと勇者風のプレイヤーが現れた。
「あっ！はじめまして、自分はヒサシと言います！裕太兄貴の舎弟っす。よろしくお願いしまっす！」元気よくヒサシは自己紹介をした。
「お二人は裕太兄貴のお友達なんですか？」
「まあ、そうだけど」晋吾は答える
「じゃあ、シンゴ兄貴にユキナ姉貴と呼ばせてください」
「なにそれぇ～優季菜姉貴って」優季菜は笑っている。
「なあ、晋吾！ちょっといいか？」裕太が真顔で切りだした。
「さっきのセイシロウってプレイヤー！もしかしてテレビ局側の人間じゃないか？」
「ん～そう言われるとそういう気もする・・テレビ局側が賞金が惜しくて自分たちで回収する気かもな」晋吾は頷きながら言う。
「さっきさあ、ヒサシに聞いたんだけどこのゲームってあまり宣伝してなかったらしいんだよね」裕太は晋吾に向って言った。
「なるほど・・・宣伝してなくて情報が少ないにも関わらず、テレビ局はこのゲームを三次試験に選んできた。ということは番組を企画する段階で三次試験でテレビ局の人間を勝たせるよう仕組んでるってことか・・まあ、表向きはテレビ局と関係ない人間に装ってる

んだろうけど」

「なになに～話が難しくてわからないよぉ」優季菜は難しい顔をした。

「そおっすよ～三次試験とかテレビ局とか意味分かんないっす！もっと楽しい話しましょうよ～兄貴ぃ～」ヒサシが言う

「そうだったな、わりいヒサシ！」裕太がヒサシに謝った。

「あ、ヒサシさんは最強のニート決定戦の参加者じゃないんだあ」優季菜が言った。

「裕太、お前。説明してないのか？ヒサシに」晋吾はちょっと驚く

「えっ？別に。だって、こいつ俺に勝手に着いてきてるだけだから！」

「え～と、裕太さんもヒサシさんも向ってるところって、もしかしてネオ東京タワー？」優季菜は聞いた。

「そうっす」ヒサシが言った。

「やっぱり？じゃあ、これから一緒に行こ～！？」優季菜がピンク色にライトアップされたタワーを指差した。

２０１１年５月１２日？　決着は現実世界で

２０１１年５月１２日　午後１５時２２分

テレポートウイングを使って、戦闘から離脱した、舟木清四郎はネオシナガワのカフェにいた。
「おお、清四郎！無事だったか？」サラリーマン風のプレイヤー設楽修二が話しかけてきた。
「無事だったか？じゃないですよ！設楽さん！千里眼でバトル観戦してたんなら助けに来てください！相手の増援がくるのも見えてたんでしょ？」清四郎は不満そうに話した。

「わるいわるい！次からはちゃんと助けに行くからさ。まあ、怒るなって清四郎！」
設楽修二は愛想よく謝った。
「まあ、でも基本は俺、戦闘するためにゲーム内にいるわけじゃないからね！会長に言われて君が戦いやすいようサポートしてやってくれって言われているだけ。そこのところはきちがえないように・・・」

「わかってますって！こんな凄い武器のアイテムを入手してくれて感謝してます。で・・さっき闘ってきた人達の事って調べてもらえました？」
清四郎は先ほどのバトルの相手が気になったので聞いてみた。
「もちろんさ！清四郎君が手こずることなんて今までありませんでしたからね。すぐに調べてみました・・まず最初に戦闘に入った≪

シンゴ》と《ユキナ》。彼らは最強のニート決定戦参加者だな。一次試験、二次試験とも二人とも成績優秀。特に《ユキナ》の方はどっちもトップ通過です」
修二は二人の情報を簡潔に伝えた。

「そうなんですか・・俺的には《シンゴ》の方が強かった気がするけど。彼については情報ありますか？」

「もちろんですよ。本名、相良晋吾。京都大学　情報経済学部の大学院生です。高校時代はサッカー部。高校総体で優勝してます。運動神経は抜群でしょうね。」

「おお～なるほど。強いわけだ・・」
清四郎は納得した。

「で、後から助けにきた二人。《ヒサシ》は一般のプレイヤーです。《ユウタ》の方はなかなか興味深いですよ。本名、三輪裕太。職業はクイズハンター・・クイズの賞金だけで食ってるプロです。相良晋吾とは高校の同級生ですね」

「同級生ね・・・仲間割れさせるのは難しそうだな・・」

「そうですね、その方法は現実的じゃありません・・が・・この三次試験で彼らは消しておいた方がいいでしょう。でないと後々やっかいな敵になります。」

「あ、設楽さん！そんなにこだわらなくてもいいですよ。彼らとは現実世界の四次試験でもう一度やりたいな～今度はリアルサバイバルゲームで・・」
清四郎の目つきが変わった。

２０１１年５月１３日？　叙々苑で情報交換

２０１１年５月１３日　午後２０時２分

品川プリンスホテルのセントラルタワー１Ｆの叙々苑で斉藤密流は夕食をとっていた。

ジュージューと焼肉を焼く時の美味しそうな音をたててカルビを焼いている時、聞きなれた声が後ろからした。

「あれ～斉藤さん、また会いましたね～一人で焼肉だなんて寂しいじゃないですか～」長門大我がニコニコしながら喋りかけてきた。

後ろには二人の男が一緒にいた、

「ああ、お前か・・そっちの二人は？」

「あっ、三次試験でネットの中で知り合った仲間です。秋田さんと城戸さんです。今日はオフ会をこの焼肉屋でやろうと思って・・」

「どうも！」秋田と城戸は斎藤に軽く挨拶をした。

「そうか・・俺は斉藤！」斎藤も挨拶を返す。

「よかったら、ご一緒してもいいですか？」

長門大我が斉藤に聞いてきた。

「いいぜ！三人とも座りな！」

三人は斉藤と同じテーブルを囲んだ。

「お～い、焼肉盛り合わせ追加頼む！それと生三つ、あとウーロン茶だ」斉藤はウエイトレスに注文をした。

「斉藤さんは、三次試験どうですか？クリアできそうですか？」城戸大輔が質問してきた。

「クリアねぇ～いくら稼げば安全なのか分からない以上、絶対とはいえないが・・おそらく俺はこの三次試験・・生き延びればクリアだと思っているんだがな」
斉藤密流は意外な回答をした。

「生き延びていればクリア？と言いますと・・」城戸は意外な答えの理由が気になった。
「僕も斉藤さんの考えを聞きたいな～」長門大我も同調した。

「・・・・俺も聞きたい」斉藤をみて秋田も続いて言う。

「ふっ、三人とも聞きたいのならしょうがないな。話してやる・・まあ俺の考えだと三次試験参加者は８０人そして合格者は４０人・・だが生き残るのは４０人いないはずだ。」

「４０人もゲームオーバーになる可能性なんて少ないような気がするけどなあ」城戸大輔が疑問を呈する。

「ゲーム内にプレイヤーキラーがいるんだよ」斉藤が答える

「プレイヤーキラーですか・・」城戸大輔が相槌を打つ。

「マシンガンとロケットランチャーを背負った、セイシロウっていう少年のプレイヤーだ・・俺の知っている限りでも２０人は殺って

いる。観戦モードで遠くからバトルを見てたんだが動きが半端ないぜ！」

「へぇ～、知らずにケンカを売っちゃうと間違いなく返り討ちですね～」
楽しそうに長門大我が笑った。

「・・・・」秋田は無言を貫いている。

「お前たちも三人で金稼ぐ企みをしてるかも知れないけど。目立ち過ぎるとやられるぞ」
斉藤は忠告した。

「斉藤さん！貴重な情報をありがとうございます」城戸大輔がお礼を述べた。

ウエイトレスが焼肉盛り合わせと飲み物を運んできた。
「お待たせいたしました」

「ほんと、貴重な情報ですね。お礼に今日は僕が奢りますよ～」（プレイヤーキラーか・・・マシンガンにロケットランチャー・・通常じゃ手に入らない武器・・ゲーム制作会社側の人間か・・紺野に調査してもらっておくか・・）
「さあ、ガンガン焼いていきますよ～」大我は楽しそうにロースを金網にのせていった。

２０１１年５月１３日？　推測の域

２０１１年５月１３日　午後２３時２８分

ホテルの部屋に戻ってきた長門大我はすぐにこう聞いた。

「どうですか、紺野。調査できましたか？」

斉藤、秋田、城戸と叙々苑で焼肉を食べる最中に秘書の紺野にメールで（セイシロウ）というプレイヤーについて調べるよう指示を出していたのだ。

「はい、本名は舟木清四郎。新日本テレビの広告企画部の部長、舟木啓次の次男ですね」

「本当ですか・・・この最強のニート決定戦の番組を制作しているテレビ局の・・」

少し驚いた表情で長門大我は紺野に聞き返した。

「ですが、舟木啓次は現在は新日本テレビを退社しているそうです。そして息子の清四郎も麻布高校を中退しています。」

「その退社と中退の時期は？」

「どちらも２月の下旬です」

「まだ、正式にはこの番組が発表されてない段階か・・・」

「舟木啓次が番組の情報を手に入れて優勝する自身があるから息子に出場させたということではないでしょうか？清四郎の趣味について興味深い情報が入っています。サバイバルゲームの愛好者だそうです」

「ほう、それだと４次試験は相当有利ですねぇ」そう言って大我は少し考えた。

「となると・・・広告企画部の部長の舟木啓次は４次試験がサバイバルゲームだという情報を手に入れて、息子に出場させた。優勝した時にテレビ局の関係者だとまずいから退社した・・ということに

すれば辻褄は合いますねぇ」
「はい！ですが・・私は少し引っかかるところがあるんです・・自信があるとはいえ、自分も会社を退社して、なおかつ息子まで学校を退学させています。テレビ局の退社の理由は先ほどの大我さんの考えで辻褄が合うのですが、清四郎の高校中退の理由がわかりません」紺野は自分の意見を述べた。
「そうですね、そこは少し引っかかりますね」大我が同意した。

ゲーム内で入手できる特殊アイテム、マシンガンとロケットランチャーを持っているらしいプレイヤー・・・・

「もしかしたら・・もっと大きな力が動いているのかも知れません。彼はゲーム内で入手困難なアイテムを多数もっているようですから」

「それは、テレビ局側の人間ということでしょうか？」
「ええ、あくまでも推測ですがね、まあセイシロウというプレイヤーが要注意人物だということはわかりましたのでそれは収穫ですね。それに彼だけをマークしているわけにもいけませんから・・・」

２０１１年５月１５日　ブラックリスト

２０１１年５月１５日　午後１８時２６分

《ＹＯＵ　ＷＩＮ》と画面に表示がでた。

「よ～し！！え～っと、設楽さん。これで何人目ですか？」
清四郎が設楽修二に聞いた。

「５９人目です、清四郎君が倒したプレイヤーは・・ただ、最強のニート決定戦のプレイヤーは、そのうち１８人ですけどね」

「１８人ですか・・以外と少ないですね。もっと効率よく獲物を見つけてくださいよ～設楽さん！！無駄なバトルじゃないですか」
少し不機嫌そうに清四郎が言った。

「まあ、相手から挑んでくるんだから、仕方ないだろ。だって清四郎君はこのゲーム内じゃあ賞金首になってますからね」

「えっ？どういう事ですか？」

「えっ？じゃないですよ。ゲーム内でプレイヤーを倒しすぎてお尋ね者になっているんですよ。ほら！！」
そういって、「賞金首リスト」というものを表示した。
トップには（セイシロウ）という名前が表示されていて。
捕獲すると５６００００ジスパが手に入るらしい。

「５６００００ジスパって言ったら、日本円にしたら五千六百万円じゃないですか？なんで教えてくれないんですか？」

清四郎は設楽に詰め寄った。

「まあまあ、賞金首の方が獲物から寄ってきていいんじゃないかと思いましたんで。現に最強のニート決定戦の参加者もそれで６人倒してますし・・」

「そうなんですか」

「そうなんです。楽でしょう。相手から寄ってきた方が」

「まあ、そういわれると・・・で、設楽さん実際。最強のニート決定戦のプレイヤーは何名脱落しているですか？」

「君が倒したプレイヤーが１８人、それ以外でのゲームオーバーが１４人だ」

設楽は正確な数字をだした。

「そうですか。じゃあ、全部で３２人だ。８０人中３２人脱落・・・」

「ゲームが始まってまだ7日目です。まあまあいいペースなんじゃないのかな」

設楽は笑みを浮かべた。まだ２５日も残っているのだ。

「清四郎君！この試験で。全員消しますよ。４次試験も、最終試験も関係ない。ここで貴方だけが生き残れば２００億円は自動的に貴方と会長で山分けです」

「まあまあ、この前も言ったじゃないですか。４次試験で闘ってみたい相手が出来たって。でも１００億円かあ～なんに使おうかなぁ」

清四郎は笑いながら少し悩んだ。

「まず、私にお礼をしないといけないんじゃないかな？」

「設楽さんは、この仕事が成功したら。会長からちゃんとご褒美が出るでしょ？」

「まあ、そうだといいですがね。私はただのサラリーマンなんでね。」

設楽は皮肉を込めていった。

【ロックオンされました。バトルモードに突入します】

「お！きたきた。賞金に目がくらんだ、お馬鹿さんが・・」

設楽が言いはなった。

「じゃあ、かーるく。もう一バトル殺っときますか・・」

清四郎がバトル開始のボタンを押した。

2011年5月17日　ネットアイドル

2011年5月17日　午後21時00分

【アリサ】がゲーム内にログインしました。
【エリス】がゲーム内にログインしました。

ゲーム内のネオオオイマチのカフェ。いつもの時間に福永亜理紗と亀井絵栗珠はゲームを開始した。

福永亜理紗は三次試験が始まっても普段は学校に行っていた。麻布にある中学から、品川プリンスの部屋に直行し宿題などを終わらせてからゲームを開始するのが最近の日課だ。陸上部の顧問の先生には芸能活動でしばらく休みますと伝えている。部活はできなくなったが、この最強のニート決定戦が芸能活動だと思えばそんなに効率が悪い時間の使い方だとは思わなかった。

「こんばんは、絵栗珠さん！」ボイスチャットで絵栗珠に話しかけた。
最近ではすっかり打ち解けあって友達気分だ。
「こんばんは、亜理紗ちゃん！さあ、今日もゲーム始めるわよ」
「ハイ！がんばりまっす！」
「フフ、今日も頑張りましょう」
「でも、絵栗珠さん。私、こんなにのんびりゲームしてていいのかなぁ？だって他の人は一日中ゲームの中にいるわけだし」
「大丈夫よ、長くやれば良いってわけじゃないのよ。いかにお金を効率良く稼げるかってことなのよ」

「そうですかぁ。まだちょっと亜理紗には難しいです。」
「そろそろゲーム内の操作方法にも慣れてきたころだし、今日から新しいことやってみましょうか」絵栗珠は言う
「新しいことですか？」
「そう、モンスターや他のプレイヤーからお金を奪うだけがゲームじゃないのよ、ちょっと調べたんだけどね、ネオシブヤでライブができるところがあるの。」
「みつけちゃったんですか～。にひひ～なんだか楽しそうですね」
「そこを貸し切って、亜理紗ちゃんが歌う。ネオシブヤのテレビスクリーンにライブの告知をしてね。たったの５００ジスパで広告が打てるんだって。でライブハウスの貸し切り料が一時間１０００ジスパ」
「ということは～え～と～」
「そんなに難しく考えなくてもいいわよ一人３０ジスパで百人お客さんを集めましょう。そうすれば倍の利益が出るわ」
「きゃ～そんなに簡単に上手くいくのかなぁ」
「大丈夫よ現役中学生アイドル、福永亜理紗の本名を出せば１００人位すぐよ。亜理紗ちゃんは自分にもっと自信を持ちなさい！」
「ハイ！」元気よく亜理紗は答えた。
「なんか、絵栗珠さん芸能事務所の社長みたい」
二人はお互いの顔を見て笑った。

２０１１年５月２１日？　作戦会議

２０１１年５月２１日　午後２１時３０分

「本当に１５０人も集まっているんですか？」
舟木清四郎が設楽修二に質問した。
「ああ、間違いないですよ。ネオシブヤのライブハウスで最近、アリサというプレイヤーがライブを行っているみたいです」
設楽が説明をする

「アリサですか。最強のニート決定戦のプレイヤーなんですか？
「そうです。中学生の女の子です。二次試験のとき見かけませんでしたか？」
「う～ん、そういえば中学生ぐらいの子がいたような気がするな。二次試験の前半で見かけただけですけど。あの子まだ残ってたんだ」
感心した様子で清四郎は答えた。
「あまり、油断しないほうがいいですよ。清四郎君！」
「別に油断なんてしてませんよ」
「だと、いいんですが・・年下の女の子だからといって変な情にながされないでください」
設楽が念を押した。
「はいはい、いつも通りサクッと殺っちゃいますから、ご心配なく・・で今日は、設楽さん一緒に来てくれるんですねぇ。珍しいなあ」
清四郎が設楽に向って意外そうに言う
「流石の清四郎君も１５０人を相手じゃ、ちょっと手こずるんじゃないかと思いましてね。」
「楽勝ですよ」清四郎は簡単に言いきった

「では、作戦会議だ・・俺がまず、歌っているアリサにロケットラ

ンチャーを打ち込む。それが戦闘開始の合図だ。清四郎は手当たり次第にマシンガンで向ってくる奴らを倒すんだ。俺は照明を破壊していく、真っ暗になったら暗視ゴーグルを装備して一人残らず倒していくぞ」
設楽が大まかに作戦を説明した。

「なるほど、照明が消えたらこっちの勝ちですね。暗視ゴーグルがありますし、何人いても怖くないです」

「あと、清四郎君は賞金首です。賞金稼ぎや警察にも注意してください。」
「了解！まあ、警察や賞金稼ぎといってもただのプレイヤーですから、たいしたことないですよ」

「では、作戦開始１０分前です。もう一度装備を確認しましょう！」
用意周到な設楽が言った。

２０１１年５月２１日？　強襲

２０１１年５月２１日　午後２２時０３分

アリサがネオシブヤで歌っているライブハウスは超満員の２００人がつめかけていた。ライブを始めて今日で４日目だが連日大盛況だ。今日はキャンセル待ちも出てチケットは早々に売れ切れていた。

だが、それは突然起こった。アリサは１曲目のイントロが終わって歌おうとした瞬間。何者かが自分の方に大きな銃口を向けているのに気づいた。ライブハウスぐらいの会場だと誰が何をしているのかが手に取るように分かる。まるで学校の先生が教壇に立った時に生徒が何をしているのかがはっきりと分かるように・・

次の瞬間、ロケットのようなものが超高速で飛んできたのだ。

ヒュッ　アリサは間一髪でそのロケットをかわした。

「お！まさかよけるとは、凄い運鈍神経！」

ロケットランチャーを持った男が喋った。

マシンガンの音が会場中に響き渡る。

もう一人の男は手当たり次第に会場にいるプレイヤーを攻撃しだした。

バチッ　バチッと照明が消えていく

ロケットランチャーを持った男が今度はスナイパーライフルで灯りを一つずつ破壊している。

会場全体に悲鳴がこだまする。誰もが混乱していた。

「亜理紗ちゃん！！早く！！こっちよ！」
アリサに向ってエリスが呼んだ。
アリサはロケットランチャーをかわしたあと、恐怖で動けなくなっていた。
何が起こっているのかが理解できないのだ。

照明がすべて消えて完全に真っ暗闇になった。
アリサの手をエリスがつかんだ。エリスは真っ暗闇の中ステージの裏まで引っ張っていき、それから火の魔法を使って照明代わりにして裏の出口に進んだ。

「もう大丈夫よ！」
アリサの体がガチガチと震えている。ゲームの中とはいえモーションセンサーを通して、その震えがエリスにも伝わった。
会場の中はまだマシンガンの音と悲鳴が続いている。まるで地獄絵図だ。

震えているアリサの体をエリスが抱きしめた。
「亜理紗ちゃん、今日はゲームから出ましょう。気持ちを落ち着けて・・・」
絵栗珠は亜理紗を気遣って言った。
「絵栗珠さん・・・私、許せない」
「えっ？」

「あの二人、絶対に・・私のライブ、そして集まってくれたファンを滅茶苦茶にして・・」
アリサの震えがおさまって、ゲームの世界なのに強烈な殺気を絵栗珠は亜理紗から感じた。

「亜理紗ちゃん、悔しいと思うけど・・落ち着いて!!」

「落ち着いてなんかいられないよっ!!いまからあいつらを倒しに行く!!」

アリサはアイテムリストからマインゴージュという短剣を取り出し、ライブ会場へ走りだした。

２０１１年５月２１日？　通報

２０１１年５月２１日　午後２２時１３分

亜理紗は一瞬の出来事に何が起きたのか分からなかった。
ライブ会場に走りだしたはずだがいつの間にか絵栗珠に炎系の魔法で攻撃されていた。

《ＹＯＵ　ＷＩＮ》と絵栗珠の画面に表示がでた。

《倒した相手をどうしますか？》
・とどめをさす・身ぐるみを剥ぐ・捕える・何もしない・

体感スコープにコマンドが表示された。
絵栗珠は【捕える】を選択した。

プレイヤーのアリサは身動きが取れなくなった。

「どうして・・・絵栗珠さん・・」
戸惑いつつ亜理紗は絵栗珠に聞いた。

「亜理紗ちゃん！少し頭を冷やしなさい。あなたは、もう何もしなくても3次試験を突破できるぐらいの金額を稼いでいるのよ！一時の感情で動くのはやめなさい！今の亜理紗ちゃんの状態は捕獲され

た状態だけど・・私がこのまま捕獲した状態で殺さない場合はおそらく3次試験は突破ね」
冷静な口調で絵栗珠が言う
「・・・・・でも・・・・・」何かを言いたそうな雰囲気で亜理紗は言った。
「気持はわかるわ、でもね！今やるべきことはあいつらと戦うことじゃないでしょ！
「はい！絵栗珠さんゴメンなさい・・・」
「亜理紗ちゃんは頭のいい子ね・・」
【捕獲を解除】を絵栗珠はコマンドから選択した。
プレイヤーのアリサは自由に動けるようになった。
会場内ではまだ銃声と悲鳴が続いている。これを聞いた亜理紗は・・
「絵栗珠さん・・私、どうしたらいいの？」
と絵栗珠に答えを求めた。
「亜理紗ちゃんが戦う必要はないのよ。ただ、あの二人は許せないわね！実はもう、このゲーム内専用のスマートフォンでゲーム内の警察には連絡してあるの・・賞金首がライブ会場で暴れてるってね！！」
「凄い・・あんな状況で、もうそんなことを・・・自分でやるだけが戦いじゃないんですね・・」
亜理紗は絵栗珠の素早い行動と機転の早さに驚いた。

「お利口さんね・・・そこがわかれば凄い成長よ亜理紗ちゃん。でも時には自分でやらないといけないこともあるけどね！この場所は危ないから少し離れた場所で、逮捕の瞬間を見物しましょう！」
絵栗珠が言った。

２０１１年５月２１日？　隊長の命令

２０１１年５月２１日　午後２２時１９分

遠藤球男はゲーム内の警察組織に所属していた。
フリーター生活の今の自分が現実世界では決してつけない憧れの職業だ。
「うひょ～一度、こういうミッションをやってみたかったんだよな！！血が騒ぐぜ！！」
プレイヤーのタマオが喋った。

「こらこら！タマオ君、ゲームの中だといって油断しないように。実際ゲームオーバーになったら警察といっても我々も終わりなんだからな・・」
【リュウ】というプレイヤーがタマオに釘をさした。
「へーい、へい。分かってますって」
タマオはだるそうに返事をした。
「おい！リュウの言う通りだ。遊びじゃないんだぞ。殺るか殺られるかだ。」
【カズマ】というプレイヤーもタマオに続けて苦言を吐いた。
「え～皆さん！今回の作戦を取り仕切ることになりました私はマモルと申します。」
マモルが丁寧に自己紹介をした
「では、早速ですが１５分前に【エリス】というプレイヤーからネオトウキョウの警察本部に連絡が入りました。ネオシブヤのライブハウスで賞金首ランキング一位の【セイシロウ】というプレイヤーが暴れていると・・このセイシロウというプレイヤーなんですが我々、警察組織の仲間も四人やられています。」
マモルが今の状況を説明する。

「作戦は、わたくし、マモルとリュウ、カズマ、タマオの四人で行います。」
「マモル隊長！こんなにのんびりしててていいんすか？十五分も経っているんっすよ！」
タマオがいら立った様子で言った。
「え～我々は増援部隊だ。第一陣は１２名ですでに出発している。現地からの情報だとまだホシはライブ会場で暴れている。で、状況だが、ライブ会場をラジコンカメラで撮影すると真っ暗だそうだ」
マモルは答える。

「隊長、それで？第一陣は突入したんですか？」
リュウが聞いた。

「いや、今は外で待機しているそうだ」

「オイオイ、そんなにゆったりしている場合じゃないんじゃね？そうしている間にも、犠牲者が増えてるんだぜ！俺達が先に突っ込もうぜ！」タマオが言った。

「タマオ君、生きて帰ることも我々の使命だ。安全策をとって外で闘う気なんだろう。第一陣は・・おそらく敵は暗闇でも動けるアイテムを持っていると推察できる」
マモルが考えを披露する。
「たしかに・・」その考えにカズマが同意した。

「まあ、賞金首ランキング一位の超大物だ。多少の犠牲は仕方のないところだ。本部からの指示によると第一陣は外で、セイシロウとシュウジというプレイヤーと戦うことになる。敵は劣勢になったらテレポートウイングで逃亡を図るはずだ。ライブハウスの中だとテレポートウイングは使えないが、我々もリスクがあるから外で闘わ

ざるをえないところだ。そこで、敵が逃走を図ったところで我々も敵と同じ場所にテレポートウイングを使う。本部からこのレアアイテム【テレポートウイング】を１０個貰っている。どこまででも追いかけるぞ！」

「敵がテレポートウイングを使う瞬間はどうやってわかるんですか？」

カズマが聞いた。

「第一陣の一人がライブ映像を届けてくれる予定だ」マモルが言った

「なるほど、ではその映像が入ってくるのをとりあえず待っていればいいんですね」

リュウが理解したように言った。

「けっ！逃げ出して、戦意喪失している相手を狩る仕事か・・楽勝だぜ！」

タマオが笑いながら言う

「まあ、窮鼠猫を噛むという諺があるように。油断するとこちらがやられますよ」

今の作戦を聞いてあまりリスクがないと感じたのかリラックスした表情でカズマは言う。

ピロピロリーン

マモルのゲーム内携帯電話が鳴った。

「おっ本部からだ・・」

マモルは素早く携帯にでた。

「はい！マモルです。はい！ええ、え？あ・・・そ、そうなんですか・・で・・私たちはどうすれば・・はい、はい。わかりました・・ええ。失礼します」

マモルの表情が青ざめている。
「どうしたんですか？隊長！」リュウが聞いた
「第一陣は全滅だ・・」

２０１１年５月２１日？　殺しの感触

２０１１年５月２１日　午後２２時２３分

「あらら、あっけないなあ！」

１２人の警察官をわずか２分で倒した舟木清四郎が設楽修二に言った

「なめられたもんだな賞金首ランキング１位にこんな雑魚どもを派遣してくるなんて、いま来た奴らは警察組織といってもただの寄せ集めにすぎません。私たちはこのゲームの熟練度が違いますからね」

設楽が答える。

「ほーんと、このゲームが発売になる前から２ヶ月間。みっちり設楽さんとバトルの練習してたもんなあ・・あの時は俺、こんなゲームの世界で設楽さんと二人。何やってんだろって思ってたけど。今は結構楽しいですよ。」

「そういってもらえると、清四郎君のお目付役の僕としても嬉しいですね。私も会長の命令だから仕方なしにやっていましたが・・君と一緒で今は楽しいですよ。人を殺す感触とかの快感が病みつきになりそうですね。悲鳴とか絶望しているところを見るのが楽しみなんです」

設楽が不敵に笑った。

「うわー設楽さん、危ないなあ～」

「でも、清四郎君もサバイバルゲームが趣味なんだから、わかるでしょう？」

「ん～僕の場合、人を殺すとかいうよりも。憧れのようなものですよ。映画とかを観てカッコいいな～って思ったりするような・・」

「そんなものですかね」

「そうですよ」

「まあ、いいです。それよりも清四郎君。あそこにまだ生き残りがいますよ」

２００メートル離れた先に物陰に隠れながら女性プレイヤーが２人こちらの様子を窺っている。

「ああ、ライブハウスで歌ってた娘ですね。たしか彼女！設楽さんのロケットランチャーをかわしましたよね。」

「ええ、いい動きしてましたよ彼女は・・ちなみにあのアリサというプレイヤーは最強のニート決定戦の参加者です。ここで潰しておいたほうがいいですよ。その横にいるエリスというプレイヤーは一般のプレイヤーみたいですけどね」

「しかし、２００メートルほど離れてれば安全だと思っているところが可愛いですよね。」清四郎が彼女たちを眺めながら言った。

「清四郎君。とりあえず早いところ片づけてしまいましょう。警察の上層部が出動してくると少し手こずりますから。上層部の連中はさすがに手柄を立てているだけあってゲーム慣れしてますから・・もしかすると、今来た奴らは捨て駒で上層部の人員が揃うまでの時間稼ぎかも知れませんしね。」

「警察の上層部が来ても面白そうじゃないですか」

「いや、武器の弾薬を使い過ぎています。もう、マシンガンとミサイルランチャーの弾が三分の一しか残ってませんよ。２００人以上倒してますから無理もありませんが・・万全を期すなら一度戻った方がいい。」

「わかりました。じゃあ早速。あの二人殺っちゃいましょう！」

２０１１年５月２１日？　アイコンタクト

２０１１年５月２１日　午後２２時２４分

望遠レンズで警察とのバトルを見ていた亜理紗と絵栗珠は言葉を失っていた。

「・・・・」

セイシロウとシュウジというプレイヤーの動きが半端なかったからだ。銃火器と魔法の息もつかせぬ連続攻撃！そして二人のコンビネーションは見惚れてしまうほどの淀みのない動きだ。

「想像以上ね・・あの二人。私たちじゃ手に負えないわ・・」

「あっ、絵栗珠さん。あの二人！私達に気づきました。なにか、こっちを見ながら話してるよお」

亜理紗が絵栗珠に不安そうに言う。

「そうね。でも、これだけ距離をとっていればとりあえず安心よ。敵が向かってきたらテレポートウイングを使って離脱しましょう」

「ハイ！」と亜理紗が答えた。

と同時にセイシロウとシュウジの靴からまるでロケットが地球から飛び立つ時のように火が噴き出た。

「・・・・・・・！！！亜理紗ちゃん、アイテムリストからテレポートウイングを選択してネオオオイマチまで行って！そこのホテル

からログアウトしなさい！！」

絵栗珠が亜理紗に向って喋り終わるか否かの短い時間で二人はすでに目の前まで飛んできていた。

絵栗珠の的確な指示のおかげで亜理紗はアイテムウインドウを開く操作を終えていた。

「おっと、逃がしませんよ！」シュウジというプレイヤーがアイテムウインドウを開いてテレポートウイングを選択しようとしている亜理紗にマシンガンの銃口を向けた。

「フレイムバード！！」絵栗珠は炎系の中級魔法。炎の鳥が飛んで行く魔法をシュウジに向って放った。

「ウォーターフォール！！」セイシロウがシュウジに飛んでくる炎の鳥を水の魔法で消した。

亜理紗はアイテムウインドウからテレポートウイングを取り出していた。あとは街の名前を叫べばいいだけだ。

亜理紗は絵栗珠を見た。早く行きなさい・・・アイコンタクトで絵栗珠の言いたいことがわかった。ゲームの中でも目を見れば相手の言いたいことがわかるなんて不思議な気分だった。

絵栗珠は両手から炎の球を連続してを出す上級魔法を使い右手でセイシロウ左手でシュウジ。２人を同時に攻撃し続けている。

私が逃げる時間を作ってくれているんだ・・

「ネオオオイマチ！！」亜理紗は叫んだ

２０１１年５月２１日？　白旗宣言

２０１１年５月２１日　午後２２時２７分

亜理紗が離脱したと確認した絵栗珠は攻撃をやめた。

「あら～逃げられちゃったなあ。」セイシロウが悔しそうに呟く

「清四郎君！私の援護よりもアリサというプレイヤーを攻撃するのが先でしたね。あの程度の中級魔法なら直撃しても体力は三分の一しか減りません。私たちは魔法の効果を軽減するアイテムも装備しているんですから・・帰ってから、もう一回戦術のミーティングです。」

「は～い。すみませんね設楽さん。」

「ところで、お嬢さんはもう我々とは闘わないんですか？なかなか素晴らしい魔法の使い手だ」シュウジというプレイヤーが絵栗珠に問う。

「もう、勝敗は見えています。なかなか素晴らしい程度じゃ、貴方たち２人に勝てないでしょう？」絵栗珠は皮肉を込めつつ謙遜して言う。

「しかし、仲間を助けて。自分が犠牲になるなんて泣ける話ですね。」

セイシロウが言った。

「アリサさんとエリスさんはどういう関係なんですか？」続けてセイシロウが質問してきた。

「貴方たちと同じよ。セイシロウ君！」

「ふ～ん。どこまで僕たちの事。知っているのか分からないけど・・そういう関係ね・・」セイシロウが少し考えながら言った。

「清四郎君！相手の話術に嵌まらないように。何も知りませんよ彼女は。」

「そうかしら？」

絵栗珠が見透かしたような眼をしてシュウジを見た。

「じゃあ、私たちの何を知っているんだというんだ？」

相手の話術に嵌まらないようにって言ったの設楽さんじゃないか！！とそう思いつつ清四郎は絵栗珠の次の言葉を待った。

「貴方たちはテレビ局側の人間でしょう？その通常では手に入らない武器を見れば推測できるし、さっきの会話でシュウジさんがセイシロウ君に援護しなくてもよかったのに、というニュアンスでセイシロウ君が最強のニート決定戦の参加者で、シュウジさんが協力者だということがわかるわ」

「・・・」絵栗珠の的確な推理にシュウジは少し黙った。

「・・・・・まあ、当たらずとも遠からずってとこだな」シュウジは答えた。

全部当たってるし！清四郎はそう思ったが口にださなかった。

「まあ、ここであんたを殺すのは簡単だが。最強のニート決定戦の参加者でないあんたを殺してもあまりメリットがない。そこでわれわれに最強のニート決定戦に関して有益な情報を提供できたら見逃してやってもいい！」
シュウジは自分が優位だということを匂わせつつ話を進めた。

「そうねぇ～・・」絵栗珠は少し考えるそぶりを魅せた。
セイシロウと長門大我を潰し合わせる悪魔の策が閃いたのだ

「最強のニート決定戦で私が一番危険だと思う人物を教えてあげる」

「一番危険な人物？誰だ？」

「知りたいですか？」絵栗珠が勿体付けて言う

「早く教えてください！」シュウジがマシンガンの銃口を絵栗珠に向けた。

ロックオンされました　絵栗珠に銃口を向けた瞬間、シュウジの画面に警告が表示された。

「そこまでだ！お前たち！！現行犯で逮捕する。銃を下ろせ！」そこにはタマオという警察官プレイヤーが立っていた。

2011年5月21日？　ゲームのルール

2011年5月21日　午後22時35分

「！！いつの間に後ろに？」シュウジが警察官プレイヤーのタマオに向って言った。

「へっ！どうよ！あんたら油断しすぎだぜ。おしゃべりに夢中になりすぎて後ろを見ていなかったな！」
シュウジの頭に拳銃を突きつけながらタマオはセイシロウとシュウジに吐き捨てた。

「油断？ですか・・」セイシロウはニコニコしながらタマオにマシンガンを向けた

「オイオイオイ！！こいつがどうなってもいいのか？」そう言いながらタマオはシュウジの襟首を掴んで拳銃を突きつける仕草を見せる。

「いいですよ！ね？」セイシロウガシュウジに問うた。

「ああ、別に構わないですよ」シュウジが同意する。

「脅しじゃねえぞおおおおお！！！本気だ！！」
大声をあげてタマオはセイシロウを威嚇した。
しかしセイシロウはニコニコしたままだ。

シュウジも余裕だとばかりに不敵な笑みを浮かべていたが・・！！！

ちょっとした異変に気づいた。（こいつ・・なんて馬鹿力なんだ。体がうごかせねぇ）
襟首を掴まれたままのシュウジは思った。

ザクッ！！！　えっ・・・・・タマオの頭に体感センサーを通して変な感触が通り抜けた

エリスから片手ナイフで後頭部を刺されたのだ
「おしゃべりに夢中なのはどちらかしら？」エリスがタマオに冷たい目で言い放った。

「なんで・・助けに来たのに・・俺が・・」タマオは訳が分からないまま倒れた。

《倒した相手をどうしますか？》
・とどめをさす・身ぐるみを剥ぐ・捕える・何もしない・

エリスの体感スコープにコマンドが表示された。

エリスはタマオの身ぐるみを全て剥いだ。

警察の拳銃。防弾チョッキ。制服・・・所持金、所持アイテムすべてだ。

「フフ、レアアイテムの拳銃をゲットね！貴方たちのマシンガンには敵わないけど・・」

「どういうつもりです？この男はあなたを助けに来たんですよ」シュウジがエリスに質問をする。

「別にいいでしょ。現実世界じゃないんだし。これはただのゲーム。ゲームのルール内なら何をしてもＯＫじゃない？」

「それもそうですね。で？とどめをささないんですか？」セイシロウがタマオをどうするかについてエリスに尋ねた。

「そうねぇ～どうしようかしら」（タマオというプレイヤーなかなか、いい運動神経・・腕力もありそうだし。でも単純でちょっと頭が悪いわね）

「こいつの馬鹿力はなかなかのものだ・・使いようによってはいい戦力になる。俺達に服従するなら生かしておいてやってもいい」シュウジがタマオに向って言う。

シュウジは３次試験最終日に皇居イベントを制圧するために使えないかと思った。現在十数名で徒党を組んでるチームが占拠しているらしいという情報を得ていたからだ。

「あっ！ちょっとまってください。二人とも気づいてますか？」セイシロウが自分の後ろを指しながらシュウジとエリスに聞いた。

（やばい！！気づかれた！！！）タマオは焦った。

自分が突っ込むから援護してくれと頼んでいた警察仲間、三人の存在を知られてしまったからだ。

「もちろん知っているわよ。私にいい考えがあるわ」そういってエリスはタマオに耳打ちをした。

（あそこのビルの陰に隠れている三人を倒したら、助けてあげる・・・・）

２０１１年５月２３日　ランチタイム

２０１１年５月２３日　午後１３時３２分

遠藤球男は目の前の美女を見てドキドキしていた。
深く澄んだエメラルドグリーンの瞳に見つめられると緊張の余り声が出ない。
それほど亀井絵栗珠の美しさは際立っていた。

二人は品川プリンスホテルのオープンテラスのカフェでランチを食べていた。
周りから見ると美女と野獣が一緒にいるミスマッチにさぞ驚くだろうなと球男は思った。

「あの・・・俺、ゲーム内ではエリスって呼んでたじゃないっすか！で・・今はなんて呼べばいいんっすかね？」
実際会ってみると呼び捨てにできないほどのオーラを身に纏っていた

「別に、いままでどおり絵栗珠でいいわよ。球男君！」

「そ、そおっすか？」少し嬉しそうに球男は言う。

「それにしても球男君の男気には感動したわ！」

「そうっすか！俺、男気なんて見せましたっけ？」
球男は絵栗珠に褒められて舞い上がった。

「そうよ、私があなたの警察官仲間！三人を倒すように言ったら、

仲間は売れないって言ったわよね？」

「まあ、そうっすね！とりあえず仲間は仲間ですから」少し照れくさそうに球男は答える。

「フフ、あそこで三人を倒していたら、形勢が悪くなったらいつでも裏切る男だと私は判断していたわよ」

「・・・・・俺は、そういうの嫌いなんっすよ。強い奴にくっついてコロコロ自分の態度を変えるっていうの！」

「ふ～ん、じゃあ、何で今日は私の誘いに？」

「まあ、なんというか、あれっす！自分でもよく分からないんっすよね！」

「分からないって、どういうこと？」

「エリスというゲームのアバター越しに伝わってくる・・なんていうんすか？直感ってやつですかね。この人は凄い人だという」

「凄い人ねえ・・で？会ってみて実際どう？」

「いや～よくわからないっすけど、とにかく美人過ぎて驚きっす！！なんで、芸能人じゃないんですか？絵栗珠さんは！」

「フフ・・ありがと」球男の目を見つめながら絵栗珠は微笑んだ。

「ああ～ええええっと絵栗珠さんはなんで、このゲームに参加して

るんっすか？最強のニート決定戦の参加者じゃないっすよね？」絵栗珠に見つめられた球男は少し照れながら質問した。
「福永亜理紗という中学生の女の子を優勝させるためにサポートしてるの。彼女が勝ったら賞金の半分を貰うことになってるわ」
「アリサってセイシロウとシュウジに狙われてた時に絵栗珠が逃がしたプレイヤーっすね！」
「そうよ。よく覚えてるわね！」
彼女の説明はおそらく本当だろう・・球男は思った。自分の直感はよく当たるのだ・・
「で・・今日、球男君を呼んだのはね！最強のニート決定戦で強敵が二人いるんだけど球男君に倒してもらおうと思って・・凄く運動神経がいいわよね君は！」
「ちょっとまった。俺がその二人を倒すとして、何か俺が得する事ってあるんっすか？」
「でも、優勝するには、いずれ倒さないといけないでしょう？球男君は優勝する気ないの？」
「いや、優勝するつもりでもちろんやってるっす！！」自信を持って球男が答える
「そういう割には、球男君は考えが浅いところがあるわね！現にあのとき、私があなたにとどめをさしていたらその時点でゲームオーバーだったのよ」

「・・・そう言われると返す言葉がないっす」

「でも、私の言う通りにすれば必ず最終試験までは進めるわよ！」

「最終試験に進めても最後に勝たないと意味ないっす！」

「勝ちたいなら一つ私からのアドバイス！その倒して欲しい二人を倒せる可能性は3次試験4次試験だけよ。球男君の抜群な運動神経。そして思いきりのよさ！そこは私、認めているの。二人よりも有利な状況で倒すには最終試験まで行ってはダメよ！」

「・・・その強敵二人の参加者って誰っすか？」

「一人は舟木清四郎というプレイヤー」

「ああ、あいつですか！俺もちょっと気に食わないんっすよ！あいつ！」

「彼は高校生よ！」

「高校生なんっすか？あのセイシロウっていう奴！」

「もう一人は、長門大我というプレイヤー！」

「ナガトタイガ？っすか・・どんな奴っす？」

「実は彼も高校生！ただの高校生じゃないけど・・」そう言いながら絵栗珠はチラッと鮮やかな蜜柑色をしたエルメスの時計を見た。

球男は直感的に（この人は何かを待ってる）そう感覚的に思った。

「誰か待ってるんっすか？」単刀直入に躊躇いなく球男が聞いた。

「ええ、もうすぐこのお店に来るはずなんだけど・・長門大我が・・」

「待ち合わせしてるんですか？」来るはずなんだけど・・・という言葉が少し引っかかった球男がそう聞いた。

「待ち合わせはしてないわよ。でも最近、少し遅めのランチにこのお店を利用しているみたいなの、彼に球男君が私の協力者ってことで紹介するわね！」

「協力者って紹介してどうなるんですか、ライバルっすよね彼は」

「宣戦布告！のようなものかしら」

「こなかったらどうするんっすか？」

「こなくても別にいいのよ。今日は球男君とお話しするために京都から来たんだから・・」

「えへへ～そっそおっすかあ～？」

そう言われた球男はお世辞たどわかりつつも舞いあがった。

２０１１年６月８日　信頼できる仲間

２０１１年６月８日　　午後７時２０分

魚介系の香りが店中に漂っている。品川プリンスホテルから近くの京急品川駅の駅下にあるラーメン店の集合体。その中の一つ、せたが屋で二人は晩飯を食べていた。

「この煮玉子旨いですね」中身がトロトロの半熟でいい色をしている玉子を頬張りながら大輔は言った。

「なあ、大輔・・」　　のラーメンをすすりながら秋田亮介は喋った。

「なんですか？秋田さん。」城戸大輔もラーメンをすすりながら答える。

「いや、３次試験も残り、明日、明後日の二日間だろ」

「ええ、もう終わりが近づいていますね」

「ＮＥＯ　ＴＯＫＹＯの中心を長門大我と組んで占領しているが・・そろそろ引いた方がいいんじゃないかと思ってるんだ・・」

秋田亮介はスープを口に含みながら城戸を見た。

「・・・そろそろ、ほかの誰かが仕掛けてくるってことですか？秋田さん！」

「まあ、それもある・・セイシロウという大暴れしているプレイヤーがおそらく最終日・・あるいは明日・・仕掛けてきそうな気がする・・俺ならそうするからだ・・・」

「確かに・・賞金首ランキング一位のプレイヤーですね。大暴れしているのに。僕たちのところにこないのはおかしいですよね」城戸大輔が秋田の考えに同意する。

「で・・『それもある』ってどういう意味ですか？」秋田の含みを持たせた言動が気になった大輔が尋ねた。

「長門大我の事だ・・あいつのこと。どう思う？」秋田が城戸に向って言った。

「そう聞かれるとまいっちゃうなあ。う～ん・・まあ、普通じゃないってことは確かじゃないですか？それは、この最強のニート決定戦。３次試験まで残っている全員に言えることだと思いますが・・高校生でここまで残ってるのは普通じゃないを通り越して、年下だけど少しリスペクトしちゃいます」

「・・・・・・」秋田はしばらく黙った。

「？どうしたんです　秋田さん」

「俺は・・・長門大我をこの３次試験で倒しておいた方がいいと思うんだ。」

「えっ！！」城戸大輔は驚き、ラーメンを吹き出しそうになった。

「本気でこの最強のニート決定戦をとりたいなら、あいつが一番危

険だ。得体のしれない力が奴のバックにはついている。あの【ユミ】というタイガにべったりとくっついているプレイヤーを見ていてもわかる。彼女はタイガに異常なほど心酔している」

「秋田さん！確かに長門大我は一番のライバルかも知れません！味方のうちは頼もしいけど・・正直、敵になった時、勝てるかわかりません・・でも、彼は3次試験の間は協力しましょうと言いました。それを一方的に破るのはどうかと思います。それに僕は正々堂々と自分の力の全力で彼にぶつかってみたいんです。」

「・・大輔、お前いい奴だな・・・悪かった。今の話は聞かなかったことにしてくれ」

秋田は城戸の考えに甘いと思いつつも好感を持った。

「でも、秋田さんが最初に言った、皇居イベントを手放すという考えには賛成です。長門大我にも、おそらくセイシロウというプレイヤーが仕掛けてくることを説明して、3人で一緒に3次試験を突破しましょう」

「ああ、そうだな」秋田亮介は城戸の目を見て笑顔をつくった

2011年6月9日　突入前

２０１１年６月９日　　午後９時５０分

「突入１０分前だ！」時計を見たシュウジが他の四人に合図をした。

「それにしても、アリサが参加するとは思わなかったな。よく逃げなかったね」シュウジがアリサに向って話す。

「ええ、だって、セイシロウさんやタマオさんだって最強のニート決定戦の参加者じゃないですか、私だけ参加しないってのもフェアじゃないですし」アリサがシュウジに向って話した。

「まあ、君がいてもあまり戦力には計算に入らないんですけどね」シュウジが皮肉を込めて言うと

「シュウジさん。せっかく可愛い女の子が仲間になってくれたんだからゲームを楽しみましょうよ！」セイシロウがシュウジにニコニコしながら言う。

「私は仕事ですからね、清四郎君！女の子と仲良くってわけにはいかないんですよ、この三次試験で何人消せるかです。成果は数だけです。」

「フフフ、大変ですね。サラリーマンも・・」エリスがシュウジに皮肉を返す。

「で、結局、あんたらこの3次試験で何人、殺ったんだ？」タマオがシュウジに聞いた。

「292人だ・・そのうち最強のニート決定戦の参加者は43人だけどね・・」

「え～と、3次試験の参加者が80にんで、合格ラインが40人だから・・もう生き残れば突破じゃねえか！」タマオは驚きながら言う

「これからさらに3人倒しに行きます。情報によれば、皇居イベントを支配してるのは、長門大我、秋田亮介、城戸大輔の3人それと一般プレイヤーが9人の12人で徒党を組んで支配しています」シュウジが言う。

「一番のターゲットは長門大我だろ？」絵栗珠に聞いたことをシュウジに言った。

「ええ、彼を消せばこの後の試験が随分楽になります。情報によると彼がリーダーシップをとってこの場所を支配しているようですし・・わたしの上司からも必ず消せと命令が来ているのでね」

「本当ですか？あの方からの命令ですか・・でも、その命令、今初めて聞きましたよ！設楽さん！」セイシロウがシュウジに言った。

「清四郎君は今まで通り、皆殺しにしてくれればいいんですよ。」

「ま、それもそうですね」

「しかし、貴方たち、あまり緊張感がないわね。これから3次試験の天王山っていうのに」エリスが呆れたように二人を見た。

シュウジがエリスに横目で視線を送りながら

「それは貴方もでしょう？エリスさん・・そちらのお嬢ちゃんは少し緊張しているようですけど・・」

ゲーム内のアバター越しにアリサの緊張感が伝わってくる。

「そんなに緊張しなくても大丈夫ですよ！アリサちゃん」

セイシロウが笑顔で話しかけてきた

「ハイ！ありがとうございます」アリサも引き攣った笑顔を返す

「1分前だ・・」時計を見たシュウジがコールした。

亜理紗は絵栗珠から教えられた作戦を頭の中で繰り返していた

（長門大我を全員で倒したあと・・絵栗珠さんがシュウジさんを倒す・・それが合図！！私とタマオさんでセイシロウさんを倒す・・・絵栗珠さんと私でタマオさんを倒す・・・・・・・・・・）

・・・って考えているんでしょうね亜理紗ちゃんは・・亜理紗ちゃんには悪いけどスムーズにいかなかった時は、超絶自爆の魔法で全員消すしかないわね。長門大我さえ消せれば相良君の優勝確率は大幅に上がったようなものだけど・・念のため清四郎も消しておいた方がいいわ・・

絵栗珠は緊張している亜理紗を見ながら最悪の状況をシミュレーションした。

２０１１年６月１０日？　同級生

２０１１年６月１０日　午後１０時３０分
品川プリンスシネマで映画のレイトショーが終わるころ
品川プリンスホテルの大会議室に３次試験の参加者が集められた。
正面の大画面の前にはベテランアナウンサーの武田美枝子と入社二年目の新藤亜由美が立っている。
会場で舟木清四郎は自分と同い年くらいの長門大我を見つけた。
清四郎はすぐに彼の近くに寄っていき大我に向って話しかけた。
「ねえ、君が長門大我君ですよね？」
「ええ、そうですよ。あなたは？」長門大我が答えた。
「僕は舟木清四郎！」
「ああ、あなたがセイシロウですか・・プレイヤーキラーの・・」
長門大我が納得したような表情を見せた
「プレイヤーキラーとは、カッコイイ呼び方だなあ。ところでさ、長門君、一つ聞きたいんだけど」
「はい、なんでしょうか？」
「最終日に皇居イベントを制圧しに行ったんだけどさ・・もぬけの殻だったんだよね・・もしかして、逃げたの？」清四郎が聞いた。

「そうですねぇ、本当はセイシロウというプレイヤーと闘ってみたかったんです」

「じゃあ、なんで？」

「実は仲間の二人から助言を貰いましてね・・セイシロウというプレイヤーが最終日に攻めてくるから回避した方がいいんじゃないかってね・・流石に仲間がいない状態で賞金首ランキング1位のプレイヤーと闘うほど馬鹿じゃないんでね・・」

「仲間の助言をを素直に聞いたわけだ・・残念だな、まあいいや決着は4次試験でつけます」

「こちらこそ、楽しみにしてますよ」余裕の笑みで長門大我が返した。

「それにしても、今、集まってる人数が少ないですね～もしかして、舟木君が殆ど倒しちゃったとか？」今度は大我が清四郎に質問した。

「まあ、全部僕が倒したわけじゃないですけど・・ところで、長門君は年いくつ？」

「17歳、高校2年生です」

「あ、僕も一緒、もう高校辞めちゃったけど・・」

「へぇ～同い年ですか・・じゃあ、大我って呼んでください。4次試験が始まるまでは仲良くしましょう」

「じゃあ、僕も清四郎でいいよ。なんかみんな年上ばっかりで話しかけづらかったんだ。大我がいてくれてよかった。」

「年下もいるじゃないですか・・ほらあそこ！」
長門大我は黒髪の綺麗な顔立ちをした少女、福永亜理紗を指差した。
「ああ、あの子か・・アリサちゃんは中学生だっていってたな」
「アリサちゃん？知り合いですか？」大我が聞いた
「うん、実は僕とタマオっていう、おっさんと、アリサちゃん、それとアリサちゃんの友達のエリスって言うプレイヤー、あと僕の友達の一般プレイヤーのシュウジの5人で大我が制圧していた皇居イベントに乗り込もうとしてたんだ。」
清四郎が亜理紗となぜ知り合いなのかを説明した。

「そうだったんですかぁ～よかったです。皆さんと闘わなくて・・ねえ、清四郎君。アリサさんの友達のエリスっていうプレイヤーはこの会場にいますか？」
「エリスは一般のプレイヤーみたいだったよ。アリサちゃんの協力者って感じだったな。ちょっと年上のお姉さんみたいな・・」
「へぇ～お姉さんか・・」長門大我がニヤリと笑った。
「なにか、楽しそうだね。大我！僕、楽しいこと言ったかな？」
「いえいえ、アリサさんのお友達のエリスさんって言う人が、もしかしたら僕の知っている人かも知れなかったので・・・あ、いよいよ結果発表みたいですよ。まあ、ここにいる生き残った人は全員合格でしょうけど・・清四郎君のおかげでね。」

「は～い、それでは今から3次試験結果発表の収録に入ります」テレビ局のプロデューサーが合図をした。

2011年6月10日？　第3次試験結果発表

2011年6月10日　午後10時40分

「3次試験参加者の皆様、お疲れ様でございました」
ベテランアナウンサーの武田美枝子がはっきりとした声で最強のニート決定戦参加者の労をねぎらった。
「それでは早速ですが、結果を発表させていただきます」

最強のニート決定戦　通過者　23名
3次試験　仮想空間RPG　NEO　TOUKYO　結果発表

1　舟木　清四郎（16）　高校中退　1887900ジスパ
2　榊原　翔（34）　トレジャーハンター　6833430ジスパ
3　神木　隆司（20）　大学生4899890ジスパ
4　長門　大我（17）　高校生　4876760ジスパ
5　秋田　亮介（29）　元自動車工場勤務　3444566ジスパ
6　城戸　大輔（28）　元食品商社勤務　3444565ジスパ
7　愛川　優子（23）　フリーター（カフェ勤務）　211124
5ジスパ
8　三輪　裕太（23）　クイズ番組常連　2012321ジスパ
9　春日　優季菜（21）　プロ馬券師　1898932　ジスパ
10　相良　晋吾（23）　大学院生　1898930　ジスパ
11　根本　春馬（31）　フリーター（警備員）　102002
1ジスパ
12　井上　浩二（30）　フリーター（ボディーガード）102

００２０ジスパ
１３　神田　志穂（３２）　ピアニスト　８９３３５０ジスパ
１４　羽賀根　昭芳（２８）　ネットトレーダー　８９３３３００ジスパ
１５　伊賀　雅人（３６）　探偵　６８３２３２ジスパ
１６　福永　亜理紗（１４）　中学生アイドル　５７７７８７ジスパ
１７　羽入　貴博（２７）　フリーター（コンビニ勤務）　５４５６６６ジスパ
１８　古橋　伽耶（１９）　家事手伝い　２４５９８０ジスパ
１９　斉藤　密流（２８）　元テレビ局勤務　１３２０００ジスパ
２０　伏見　正樹（３４）　元百貨店勤務　１２０２１２ジスパ
２１　小室　英児（２６）　元運送業勤務　１１１２１２ジスパ
２２　副島　修（５５）　元銀行勤務　６５０４３ジスパ
２３　遠藤　球男（２５）　フリーター（ガソリンスタンド勤務）　５３４４８ジスパ

大型画面に３次試験の順位と獲得金額が表示された

入社二年目の女子アナウンサー新藤亜由美が画面を指差しながら言った

「３次試験の結果はこの画面に表示されているとおり２３名の方が突破いたしました。」

「３次試験参加者は８０名で合格ラインは稼いだ金額の上位４０名の予定でしたが、ゲームオーバーが多数出たため、生き残った方は全員合格という波乱の結果となっております」

２０１１年６月１０日？　確信

２０１１年６月１０日　午後１０時４５分

「やっぱり、清四郎君が１番か・・・すごいですねぇ」大我が３次試験の結果発表の画面を見て言った。

「・・３次試験で１番になっても意味ないです、しかし職業まで出るんですね、この３次試験の結果・・高校中退ってカッコ悪いね。なんか他の人は結構働いている人多いし・・」

「ええ、最強のニート決定戦と言っても、参加のルールは現在、会社員か公務員でなければＯＫですからねぇ」

「ふ～ん、そうなんだ。僕はあまりルールを知らずに参加しちゃたからなあ」

「え～と一緒に皇居イベントを制圧しようとしたタマオっていうのは２３位の遠藤球男って人ですか？」大我が清四郎に聞いた。

「う～ん、多分そうじゃないかな？実際会ったことないけど・・この会場にいるんだろうけど誰だろ？遠藤球男って・・それにしても２５歳かあ、案外若いんだな。おっさんだと思っていたけどね」ゲーム内の印象と実年齢が少し違ったので清四郎は少し驚いた。

「福永亜理紗がアリサちゃんですね！１４歳か・・彼女一人の力でここまで来たとは考えづらいですねぇ・・」大我が清四郎に自分の意見を促す

「そりゃあ、そうでしょう！エリスという人が裏で糸を引いているんじゃないかな・・ゲーム内でも完全に主従の関係だったですし」清四郎がゲーム内で見た二人の率直な感想を言った。

清四郎の今の発言で長門大我は確信した。

「主従の関係ですか・・」

（やっと見つけた！亀井絵栗珠の協力者は福永亜理紗で間違いない！！で・・３次試験からの順位から推察するに、遠藤球男のほうは福永亜理紗のサポート役ってところでしょうか）

「いや、今の発言は撤回します。なんていうのかな。妹をうまく操っているお姉さんって感じでしょうか・・でも亜理紗ちゃん今日初めて見た。ゲームの中のアバターより断然可愛いなあ。中学生アイドルかぁ」そう言いながら清四郎は福永亜理紗を見た。

「あれぇ～彼女もこっちの方、見てるじゃないですか～、もしかして清四郎君に気があるんじゃないですか？彼女のところに行ってみましょうよ！」大我が清四郎を煽った

「そうですね。ちょっと行ってみましょう！」清四郎が亜理紗に向って歩き出した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6289i/

エリス・ミドル

2011年12月22日23時48分発行